姫君的メイドライフ

歌月　碧威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫君的メイドライフ

【Ｎコード】
Ｎ３６２６Ｅ

【作者名】
歌月　碧威

【あらすじ】
騙されて結婚させられそうになったワケあり姫シルク。結婚なんて冗談じゃない！！逃走に成功したのは良いけど、ひょんな縁で頼まれて期限付きでメイドをやる羽目に。そんな姫の逃走とメイドライフの記録。

＊姫君逃走から、姫君的メイドライフにタイトル変更しました。

序章

ハイヤード公国　国王バーズ様

『銀の悪魔』の処遇について。

この世のものとは思えない美しさとしなやかな白い肢体で災いを運び、白夜よりも輝くプラチナの髪は闇すらも魅了し配下とさせる。
彼女の薄い淡い薔薇の色の唇で告げるのはただ破滅の言葉のみ。
その宣告を受けし国は一夜にして滅びるだろう。
精霊の加護を受けし唯一の国ハイヤード公国で、精霊王の祝福を受けぬ悪魔の子。

ハイヤード家の呪われし姫君　シルク＝ハイヤード

もうすぐその者がハイヤード公国、精霊王の国に舞い戻ってくる。
その状況はハイヤード公国にも、ディル派同盟国にもよき事ではない。
故に我々は再び幽閉もしくは、処刑するべき事が妥当であると考える。
その日は一刻も早い日であることを望む。
さもなくばウラナ国の二の舞いになるであろう。

精霊王に愛されし姫の眠るラステナ神殿　司祭一同

「――下らない。何もかもまた姉上のせいか。ウラナが滅んだのは、

自国の王の責任だろ」
青年はそう吐き捨てると窓を開け放った。
「もしもう一度あいつらがあの時のような行動に出るのなら、その時は必ず葬り去ってやる」
ハニーゴールドの髪が揺れ動く。
彼の琥珀色の瞳には、活気あふれる城下が広がっている。
「フレイ」
『はい、ラズリ様』
視線はそのまま街並みを見渡したまま誰かの名を呼んだ。
すると青年の背後に火の塊が現れたかと思うと、それはだんだんと人の形になり赤い髪の女へと姿を変えた。

さっきまで読んでいた紙から手を放すと、ゆっくりと風に乗って窓の下へと舞い落ちていく。
「燃やせ。灰すらも残らないように」
『畏まりました』
女が小言で何か言うと紙が自然と燃え上がり跡形も無く消えてしまった。
「いっそアレも燃やすか」
『ラズリ様……』
青年が視線でさしたのは、城からちょうど右側にある山の麓に建っている神殿。
クリスタルで出来ているのか、湖が光によって反射するように煌めいている。
「つまらない風習のせいで……僕たち家族が……姉上が……」
言葉にする事の出来ない思いに、ただ唇を噛み締めている。
「姉上に害をなす者は誰であろうと僕が許さない」

もうあの時のように何も出来なかった子供ではないのだから――

第一幕　姫君逃走

おかしい。あきらかにおかしい。
何がおかしいって、鏡に映っている人が着ている衣装。
白い純白のドレスに、顔を覆うように掛けられたベール、右手にはブーケ。
これってまるで――いや、待てその可能性はゼロに近い。
自らすすんで重い枷をはめようなんて酔狂な人はいないはずだ。
私を傍に置くという事は、私の重い運命すらも背負う事になるから。
アカデミーを卒業したばっかの私は、まっすぐ城には帰らずなぜか見ず知らずの国に来ていた。
当初の話では卒業祝いに新調したドレスの為に、仕立ての町で有名なビエル国に行くはずだったのに。

「でも、ここどっかで見たことあるんだよね」
鏡から視線を外へと移した。
窓から見えるのは同敷地内に立っている教会と噴水。
教会はかなり大きいし、やたら装飾が細かく豪華だ。
ステンドグラスなんかは、今まで見たことのないぐらいの極彩色。
なんとか昔の記憶から視界に入っている景色を呼び戻そうと、過去の記憶を手繰り寄せた。

「たしかプがつくはず。プレス、プリア、プナタ……ああ！！プレサ」
この地の名前を呼んだ。
各王族が結婚式をあげるなら、ここしかないという場所。
たしか五歳の時一度だけ従兄の結婚式で来たことがある。
まだ何も知らずにのうのうと生きていたあの時――

「お～よく似合っているじゃないか、シルク。銀の髪には白がはえる」
「バーズ様……」
開けられた扉から現れたのは、髪と同じハニーゴールドの髭を蓄えた中年男が入ってきた。
後ろに騎士団を従えている。
顔よりなぜか、タルのようなお腹に目がいってしまうのはなぜだろう……

「なんで卒業祝いのドレスがこの白いドレスなんです？おかしいでしょ？」
腕を組んでバーズ様を睨むと、そそくさと騎士団の後ろの隠れてしまった。
ハイヤード公国の王ともあろう人が、娘に睨まれたぐらいで……
「すみません、国王様。俺視力悪くなったのかわからないのですが、姫様が着ているのってもしかしなくてもウエディングドレスというやつなのではないですか？」
国王を背にし銀色の甲冑に身を包み、紫のマントをつけている男が口ごもりながら言った。
心なしか顔色が悪い気がする。
まわりの騎士団もおなじような感じだ。

「すまん、シルク！！この間、アカデミー時代の友人と逢ってさ～。挑発に乗って賭けして負けちゃった。そんで娘を息子にくれって言われてな。
まさか、そんな事言われるなんて思わなくて……えへ」
えへじゃねぇ！！なんでそんな賭けをしたんだ！？
「相手は私の事を知ってるんですか？」

――銀の悪魔の存在を。

「たぶん知らないだろう。ディル派じゃないし。それに女ぐせが悪くて性格も悪いから、結婚自体を望んでないはずじゃ。今回もお前と同様騙されて来る手筈になっている。それにうちと同じく政略結婚とは無縁なぐらいの大国だし、まだ遊びたいだろうし……そんな所も父親そっくり」

そんな人絶対お断りだ。

「あ、大丈夫。顔はいいから」

そこ心配してないし。

「絶対嫌」

冗談じゃない。私は新しい家族なんかいらない。

もうこれ以上、苦しめる存在を増やしたくないよ。

「私はずっと一人で生きていきます。バーズ様はお忘れになったのですか？私は貴方達に不幸しか与えてません」

「姫様、何をおっしゃってるんですか！？」

「シルク……わしは――」

「とにかく、結婚はしません」

バーズ様の言葉を遮り、窓際まで移動した。

ここ二階か。地面じゃなく芝生、垣根もあるけど飛び落ちたら不味いな。

――普通なら。

でも今は、父様……バーズ様の精霊がいるから大丈夫だ。

「ラピス様やラズリ、それにユリシアによろしく伝えておいて下さい」

『ラズリ』という言葉が出ると、彼らの顔色はもはや青ではなく白

に変わり始め、ガタガタと震えだした。
『暁の獅子』率いる騎士団として名高い彼らが、なぜ私の弟で怯える？
バーズ様もなぜ自分の息子の名前を聞いただけで騎士団と同じようになる？
まあ、いいや。
ドレスの裾を破りひざ上までの長さにすると、今が逃走チャンスとばかりに窓を開け放ち外へ飛び降りた。

第二幕　包囲

「ちょっと待てお前ら、なんで剣抜いてんだよ」
おかしいだろ。丸腰の人間に対してその行動は。
というより、自国の軍に剣を向けられる姫（わたし）ってどうよ？

飛び降りた私をバーズ様の精霊ウィルが助けてくれた。
彼が私の周りに風を起こして浮かせてくれたのだ。
おかげで何事もなく逃げられると思ったのに――
不覚にもどっかに隠れていた騎士達によって包囲されてしまった。
先読みされていたか……

「すみません、姫様。絶対に手荒な真似はいたしませんから」
「もう剣抜いてるだけで充分だろ」
「威嚇です。威嚇」
すんなよ。一応、これでも姫なんだからさ～。
姫って守られなきゃいけないか弱い生き者なんだよ？世間一般的には。
「言っておきますけど、普通の姫とシルク様とではまったく異なりますからね」
よく私が考えてる事がわかったな。
「大人しく部屋へ戻りましょう」
「悪いけど嫌」
結婚なんて冗談じゃない！！
「なら、実力行使でいかせてもらいます」
そう言って奴らは、剣を構え始めてしまった。

仕方ないな～太ももに隠しておいた短剣に手を伸ばす。もしもの為に、ベルトで固定しておいたのだ。

「まさか姫、武器を……？」
「一応、命狙われてる身なんでね」
「ありえねぇ！！姫に武器持たせたら終わりだろ！！」
騎士達は少し後ずさりし始めてしまった。
だろうね。私には、暁の獅子仕込みの剣技があるのだから。
たぶんここにいる奴らより強い自身はある。
ただ、長剣と短剣じゃ話が少し違うようになってくるが。

「怯むな」
「そうだ。俺達だって団長と姫様がいない時、負けないようにあんなに鍛えたじゃないか。きっと姫様より強くなっているはずだ！！」
「そうだ！！」
「お～っ！！」
意気揚々と一人が叫ぶと、それに続くようになにやら吠え始めた。
へ～。それは見てみたいかも。

「なら、かかってこい」
短剣を構え、騎士達に挑んだ。
どのくらい強くなってるか楽しみだわ。
「姫、覚悟！！」
ちょっと待てお前。その台詞違うくないか？
騎士団の一人がそう言ってかかってきた。
それを短剣で受け止めると、すかさずしゃがみ込んで片足をすくうように蹴りあげた。
するとバランスを崩した男が、よろめきだったのですぐさま剣を奪う。
「長剣ゲット」
「卑怯ですよ！！蹴るなんて」
「しょうがないじゃん。短剣と長剣とじゃリーチが違うしね。それにこれでまともに戦える」

「最悪だ」
彼らは片手で顔を覆うようにしたり、こめかみを押さえこんでいる。

「言うの忘れたけど、私アカデミーでグレン様に剣術習ったから」
「ちょっ、ちょっと待って下さい。なんでメイド科で剣術なんですか。しかも三大剣豪のグレン様なんて！！」
「ほら、結構トラブルに巻き込まれる星の元にいるからさ〜。シドも習ってたよ。学生だったし」
あの方は強い。暁の獅子……シドも名のある剣豪だけど、あの人とは格が違う。
三大剣豪の一人グレン様は、アカデミーの騎士科の先生。見た目弱々しいおじいさんなんだけどね。

「仕方がない。全員でかかれ！！」
「はぁ！？卑怯だろ！！」
あいつら本当に全員でかかってきやがった。
いくらなんでも一人に対して二・三十人は勝ち目なんてない。
その時、少し離れた所にある門に馬車が入ってきた。

――あれ、少し拝借するか。

第三幕　こう見えても演技派なんです？

そりゃあ、いるよね。ここに来る人達のほとんどが王族か貴族だもん。
護衛の一人や二人ぐらい。

「……まいったな」
剣を捨て腕を組みその光景を見る。
騎士達をある程度蹴散らせて馬車の近くまで来たのはいいけど、その周囲には馬車を囲むようにして四つの馬に乗った騎士達が居る。
護衛としては少ない方だから小国かな。

しかし馬車の為とはいえ、他国の騎士に手を出すのはさすがに不味いよね。
国際問題に発展しちゃうかもしれない。
あ～もう来ちゃってるし。
すぐ後ろには追手の騎士が近づいてきている。
まっ、事情話して町まで乗せてもらえばいいか。
そうと決まればさっそく話をと騎士達に近づく。
あれ……？
三人はさして目立ちもしないが一人だけ目立つ人がいる。
「――女の人だ」
よく騎士達が身に着けている銀の鎧では無く、薄紫の鎧を着ていた。
色付きって事はそれなりの立場の人じゃん。
鎧を見て初めて綺麗だと思ったのは、着ている人も綺麗だからかも。
ウェーブのかかった金色の髪は一つに結われ、青い瞳がこちらを見て大きく見開かれている。

「そこの女どうしたのだ！？そのような格好で！！」
そのような格好って……あ～、たしかに言われてみれば。
ウェディングドレスは戦いでボロボロになっている上に、私が逃げにくいからの理由で最初に破って膝上にしちったせいで、ドレスのデザインがめちゃくちゃになってわからなくなってしまっている。

「しかも、傷まで負って」
かすり傷ですけどね。あちらこちらにかすり傷がある。
騎士達と戦って無傷で済むというわけにはいかない。
その人は急いで馬から飛び降りると、私の元まで駆け寄ってきてくれた。
「どうしたのだ？」
「無理やり結婚させられそうになって逃げている所なんです。私、我武者羅に逃げてこのようなみずほらしい格好に……」
「何言ってるんです！？」
「それじゃあ俺達が悪者みたいじゃないですか！！」
追いついた騎士達が口をそろえて否定した。
鎧着てるのに意外と早いな、お前たち。

「嘘は言ってないよ？」
「そうですけど……」
女の騎士はフルフルと小刻みに肩を震わせ、剣を抜き騎士達に向けた。
細見の剣で柄の所には宝石がついている。
「お前らはそれでも騎士か！？このようなか弱き女にまで剣を向けるとは！！」
「か弱い人なら自国の騎士に剣をむけないだろ……」
「そもそもうちの姫様をその辺の姫様と一緒にする事自体が間違っている」

「だよな～こいつら姫様の事全然わかってねぇ」
「うちの姫様はな、アカデミー在学中に校長室常連組だったんだぞ」
あの～一応剣向けられてるんですけど。緊張感とかないの？

「何をわけのわからない事を言っている！？」
「これはわが国の問題だ。余所の国が口出す事ではない」
「悪いがこれを見逃すのは私の騎士道に反する。これ以上この子に危害を加えないのならこの場は見逃してやるがどうする？」
「断る。それに我らが姫様になぜ危害を加えなければならない？俺達は姫様を守るための護衛だ」
「ならその護衛がなぜ剣を向けるのだ！？こんな美しい子に」
「そ、それは――」
女の騎士に圧倒され、うちの騎士達はたじろいてしまっている。
怯むなって。

「貴方は馬車の中に入りなさい。ここは私たちが片づけるから」
そう言い終わるとその女騎士は仲間の騎士に目で合図を送った。
するとその人達は剣を抜き、ハイヤードの騎士達と対面するような形になっている。
「おい、セルマよ。その娘を連れて町まで行け」
馬を操っているおじさんにそう言った。
「しかし、スレイア様……」
「いいから、行け。どうした？女、早く乗れ」
「いえ、ちょっと」
馬車にある紋章が目に入って思わず足を止めてしまったのだ。
鳥と何かの花が描かれている。
この国はどこだ？知らないという事はディル派では無いはずだ。

「ねぇ、鳥と花の紋章って何処～？」
「『ギルア』だ」

騎士たちの代わりに、スレイア様と呼ばれている女の人が答えた。
ギルアって、たしかガル派で一番大きい国じゃん。
なのになんでこれしか護衛いないの？

「ギルア……おいっ！！まさかその中に乗っているのって国王とか王子とかじゃないだろうな！？」
「――……第一王子リクイヤード様だ」
それを聞いた騎士達の顔色が急速に変化し始め、慌ただしく両手でこっちに戻って来いと手招いている。
「姫様！！絶対ダメです！！早くこちらへ」
「えっ、なんなの！？」
「ギルアの第一王子と言えば、女好きで有名なんですよ！！姫様は外見だけはいいんですから！！」
おい、なんか最後引っかかったぞ。　だけってなんだ、だけって。
「たしか、国王様も女好きで後宮に人が入りきらないって噂が……」
「なんでも大層な美男子って話だよな。金あって容姿がいいならモテないわけないじゃねぇか……羨ましすぎるぜ」

ん？親子そろって女好きってどっかで聞いたような話――
「とりあえず、接触禁止ですから、ただちに離れてください」
「わかった。私が用事あるのは馬車だけだもんね」
馬車がダメなら、ギルアの騎士達が乗っていた馬でも借りるか。
馬の位置を確認しながら、どうやって逃げようか策を練る。
「早くこちらへ」
「わかったってば。けど、その前に――」
後ろから聞こえる騎士達の制止を聞かずに馬車の扉を開け放った。
だって顔ぐらい見たいじゃん。やっぱ遊んでる風なのかな？

「あんたが王子？」
開けてみて拍子抜け。

「んなわけないよね」
だってそいつは口を布で覆われ、手足を縄で縛られていたから。

第四幕　姫君、喧嘩を売られる

――こういう趣味の王子なのか？
「ん～っ、んん！！」
一体何言ってんのよ。
何か言っているようだが、布で口を塞がれているのでよくわからない。
布を取りはらってやり、ついでに結ばれていた足と手の縄を切ってやる。
晴れて自由の身になったそいつは手と足を軽く動かすと、
「どこの誰だか分りませんが、ありがとうございます」
と深く頭を下げた。
薄い茶色のクセのある髪に丸眼鏡の青年。
これが女好きの王子？どう見ても、図書館とかで難しい本読んでそうなタイプじゃん。

「別に礼なんていいよ。でもなんでそんな格好してたわけ？やっぱ趣味？」
「んなわけないでしょうが！！これは――」
そう言いかけるといきなり外に向かってあの女騎士の名前を叫んだ。
「スレイア様っ！！」
「どうした、スウイ」
「王子が居ないんですよ！！俺を縛って逃走したんです！！」
なんだ、やっぱ王子じゃなかったんだ。っうか、護衛気づけよ。

「あいつは、何を考えてるんだ！！」
頭を抱え、スレイアさんは地面を足で蹴っている。
「王族が出れば問題ないからって……」
「私に出ろと！？無理だろ！！」

「取りあえずその辺の町で女の子と遊んでると思うので、さっさと探しましょう」
「あの～、私も手伝いましょうか？」
手伝いがてらに、ここから逃げれるかもしれないし。
「すまない。頼む」
「いいえ」
それに、困ったときはお互い様ですもの。

「ウィル。私の鞄と布にくるまれている長い荷物取ってきてくれる？」
『いいよ』
建物の中に置いてきてしまった荷物をウィルに取ってきて貰うように頼んだ。
『はい、シルク様』
「ありがとう」
「姫様、それ何ですか？」
騎士の興味は、長い布に巻かれたものに向かっている。

「ああ、これ私の愛剣」
そう言って、布を取り払う。宝石で植物や花の文様が装飾された手首ぐらいの太さのゴールドの剣。
一見武器というよりは、美術品などの鑑賞むきだと思うがこの剣あなどれない。
ハイヤード公国では国宝級の代物なのだ。
「これって『マギア』じゃないですか！？俺、儀式でこれの模造品使ってるの見たことあるんですけど！！」
「う～ん。これね、マギアであってマギアじゃないんだよね」
だってこれ……――
「マギアってあのマギアかよ。たしか大昔に消失したって話じゃなかったか？」

「主と認められないと、剣は重く鞘から抜けないんだったよな」

『マギア』とは、精霊王が愛した人間の娘に送った剣。
その娘こそハイヤード公国の何代前だっけかな？とにかく大昔の姫。
けどその剣は姫が亡くなってしまった後に原因はわからないけど消失してしまったらしい。
私は諸事情によりこの軽く伝説となりかけたマギアを手に入れた。

「姫様、これは急いで国民にお披露目しなければなりません。国王様の耳にお入れしないと！！」
騎士は興奮気味に建物の中に走って行った。
そういえば、パーズ様遅いんだけど。
どうせ螺旋階段辺りでへばってるんだろうな～。

「――ッ」
急に私の横を急に鋭い刃物がかすめる。
ちょっと、何！？
とっさによけて、難を逃れたからよかったものを！！
その剣はさっきまで友好的だった人物のものだった。

第五幕　祝　脱出

「ちょっと姫様！！これなんとかして下さいよ！！」
「そうですよ。なんで俺達までこんな目に！！」
だってしょうがないじゃん。私、無意味な戦いは好まないもん。
ガリガリと氷の削られる音があちらこちらで聞こえる。
みんな涙目になりながら剣を片手にひざ下まで覆っている氷を削っていた。

私に剣を向けたのは、スレイア様。
スウイいわく、珍しい剣を見ると戦いたくなるらしい。
いるよねたまにそういう人。

これ以上体力奪われたくないし、面倒な事にもなりたくなかったので、マギアに密かに埋め込んでおいた氷の魔石の力を発動させたのだ。
いやぁ、やっぱ勝手にマギアを改造しておいて良かった。
そのおかげで今、まったりと馬を強奪……じゃなくて借りる為に荷物とかいろいろ準備が出来るし。

「姫ご自分がやってる事がわかってるんですか！？国宝級の代物を勝手に改造したんですよ！？いくら姫だからってやりすぎです！！」
わかってるよ。だからマギア見つけても連絡しなかったんじゃん。
「別に良くないですか？魔石だって国宝級の代物ですし。それに今魔石を所持してるのは、『漆黒の魔女』ぐらいですよ」
「だよね～」
もうすでに剣を放り投げて諦めたスウイがフォローしてくれた。
だって滅多に手に入らない魔石を貰った上に、ついでに改造する？
って聞かれたから、する！！する！！ってノリで言っちゃうじゃん。

「しかし貴方達は羨ましいですね。こんな美しい人の護衛が出来るなんて」
「なら交換するか？一日で辞任したくなるぞ」
未だ諦めていない騎士たちはせっせと剣を動かしている。
頑張れ！！陰ながら応援してるから！！

さてと、そろそろ行こうかな～。脱出されると面倒だし。
馬車にまたがると、積んでいた荷物を確認する。
よし、準備万端！！いざ出発～！！

『姫様』
馬を走らせようとした時に呼ばれたので振り返ってみると、綺麗な服に身を包んだ教会の女神像にも負けない美人が教会の下で膝をついている。

――精霊だ。

『姫様がまたここにお越しになるのをお待ちしております』
「ありがとう。誰かの式に呼ばれたらまた来るよ」
『いいえ。今度こちらに来るときは、貴方様の式です』
――は？私の？無理だよ。
だって私は――銀の悪魔だから。
「……それじゃあ、もう行くね。バイバイ」

結婚式ねぇ。絶対ないない。
可能性ゼロな事がこの先、ゼロじゃなくなるなんて事この時の私は
まだわかんなかった。

閑幕　そのころの騎士たちは

姫君が無事逃走した後の騎士達は、この先待っているであろう自分たちの処遇に意気消沈していた。
今何を考えてる？と聞けば、必ず『ラズリ様に殺される事』と答えるであろう。
みんな国王の命令に従った事を各自後悔していた。
権力的には国王様なのだが、力の関係では圧倒的にラズリが有利なのだ。

「どうするんだよ……姫様逃げちゃったよ」
「どうするもこうなってる以上どうする事もできないだろ。はぁ……ラズリ様、絶対楽な死に方させてくれないよな……」
「重度のシスコンだもんな。しょうがないって言えばしょうがないけど。あの姫様の美しさじゃ無理もない」
「それだけじゃないだろ。王子は『あの事件』の事もあるからシルク様の事になると必要以上に過保護になってしまうんじゃないか」
「かもな……」
「姫様大丈夫かな？アカデミーに入っていたから、その辺の温室育ちの姫と違って町とかも慣れてるだろうけど」
地味に少しずつ氷を削っていたおかげで、片足がやっと出た騎士もちらほら見える。
彼らは忘れてしまっている。この状況を一発で打開出来る人がいる事を――

「……なあ」
「なんだよ」
「これバーズ様の持精霊、ウィル様の力があれば簡単に砕く事できるんじゃないか？」

「……。」
「早く言えよ！！」
思い出した人がいたが、そこには難問があった。
バーズ様は日頃の運動不足の為、階段で息を切らしていたのだった。
ウィルに直接頼めばいいんだが、精霊を見たり話したりする事が出来るのは、ハイヤードの人間だけなので無理だ。
そこで湧きあがったのは、国王様コール。

しばらくすると、騎士に背負われてバーズ様がやってきた。
いつも優秀すぎる自分の息子にばかり評価がいき、自分に対する声援などこのところまったく聞かなかった国王は目にうっすらと涙を浮かべている。
あまりの嬉しさに、彼には現状が見えていなかった。

「お前達、そんなに私の事を……」
「国王様！！そんな所で立って涙ぬぐってる場合じゃないですよ！！ウィル様のお力で早くこの氷をなんとかして下さい。姫様に逃げられてしまいました」
「なんだと！？お前たちなぜ追わない！？」
「これじゃあ、追えるわけないじゃないですか！！」
国王様はやっと自分の置かれている現状を理解したよう。
すぐさま持精霊ウィルを呼び出し、氷を砕くように命令すると、何処からともなく竜巻が起こり人を巻き込まずに氷だけを砕いていった。

「これで追えるだろ。早くシルクを捕まえてなんとしても結婚させるのだ！！」
「まだ言ってるんですか！？姫様それで逃げてるんですよ。それにそんな事したらラズリ様に殺されてしまいますって」
「シルクはなんとしてでもあやつの息子と結婚させる！！」

「だから――」
「そうしなければ……シルクは……わしの娘は殺されてしまう。だから何としてでも、ディル派と関係ない国と結婚させて逃がしてやらなければならない――」
国王の顔はみるみるうちに苦痛の表情に変わる。
さすがに騎士達は事情は分からないまでも、何かあると思ったのか二・三人国王の元に残して急いで馬で姫の後を追った。

登場人物紹介　（前書き）

随時追加予定。

登場人物紹介

★ハイヤード公国の人々★

＊シルク＝ハイヤード（偽名：リノア＝システニア）
一応主人公でハイヤード公国の姫でマギアの持ち主。
この間名門グラックスアカデミーのメイド科を卒業したばかり。
諸事情により、ディル派からは『銀の悪魔』として嫌われている。
容姿端麗の上に頭がいいが、少々暴走癖がある。
過去に幽閉経験がある。

＊バーズ＝ハイヤード＊
シルクの父。息子のラズリに名声を奪われ始めて、すねている。
シルクがバーズの事を名前で呼ぶには理由あり。
持精霊は風を守護に持つ『ウィル』
お腹が樽。
リクイヤードの父バルトとは、同じアカデミーの同級生。
実は、植物学の権威。

＊ラズリ＝ハイヤード＊
シルクの弟。
持ち精霊は火を守護に持つ『フレイ』水を守護に持つ『ミスティア』
持精霊は一人一精霊だったが、なぜかラズリは二人いる。
これまた容姿端麗・頭脳明晰。民や家臣達に絶大なる人気を誇る。
ただし、騎士達や一部の者達は彼の名前を聞くだけで青ざめるレベル。
シルクと妻のユリシア以外には冷たい。

騎士達いわく、重度のシスコンで愛妻家。

＊シド
現・騎士団団長。
シルクを幽閉生活から救い出してくれた恩人。
武術に優れた貴族の出身。家は代々ハイヤードの王族につかえている。

＊マギア
シルクの愛剣。
軽く伝説になりかけな国宝級の代物。
人化出来るが、今は力が無く満月の夜し人型になれない。
派手好き。ナルシスト。

＊ハイヤード公国
精霊に加護された国。
ここの王族は七歳になるまでに精霊を召喚して契約する事が出来る。
国自体はあまり大きくはなく、自然に囲まれた田舎のような所。

★ギルア国の人々★

＊リクイヤード＝ギルア
ギルアの第一王子。

容姿と家柄のせいか、各国の姫君と貴族令嬢達に絶大なる人気を誇る。
仕事は出来るが、女好きという欠点が。
シルクと関わり、城内外の王子に対するイメージを覆される。

＊スレイア＊
シルク達が教会で会ったギルアの女騎士。
ギルアの第一王女。

＊バルト＊
リクイヤードの父親。
ギルア国の国王。
イケメンで女性大好き。

＊ロイ
シルクのアカデミー時代の友人。
現在は、ギルアで新人騎士に就任中。
廊下は走らず競歩の真面目人間。

＊オリンズ＝ギルア
ギルアの第二王子。
幼いながら、シルクがお気に入り。

＊元老院＊

ギルアの影の支配者達。
表に出ないようにギルアを守っている人達。
シルクにとっては、優しいおじいちゃん達。
リクイヤード達にとっては、めんどくさい年寄り。

＊ギルア国
ガル派最大国。
ここの王子と国王は女好きらしい。

★その他の人物達★

＊ハイネ＊
シルクのアカデミー時代の友人。
グランス国の女王様。
通称『漆黒の魔女』
魔術が桁違いゆえに、恐れられている。

★その他用語解説★

＊ディル派
精霊信仰の人々や国の事を指す。

精霊第一主義で、生活の中心が精霊でまわっている。
その為、精霊と密接なハイヤード公国を同じように崇拝している。

＊ガル派
ディル派でもジル派でもない人々や国の事を指す。
ギルアが最大国。

＊ジル派
魔法が使える人々や国の事を指す。
数百年前の魔女狩りのせいで国々が滅ぼされ、少数しかおらず、今では『漆黒の魔女』が率いるグランス国しかない。

＊精霊
自然の中にいるやつと、召喚しないと出てこないやつがいる。
どちらもハイヤード家の者しか見る事が出来ないし、話す事もできない。
彼らはハイヤードの王族に忠誠を誓っている。
そのため、ディル派にとってハイヤードは精霊と同等の扱いを受ける。

第六幕　逃げ切ったと思ったのに

やっぱ、旅と言ったらこれでしょ？
片手に袋を抱えながら右手に持っているそれを頬張ると、口の中に甘ずっぱさが広がっていく。
ん～、うまっ。
この国の特産物のララナという果物を煮詰めて入れたパンらしく、ここでしか食べれないらしい。
その国でしか食べれなかったり、見れないものを見たりしないと旅をした気になんないよね。

ここは大国ギルア。
さすが大国というだけあって、とにかく人や建物がやたら多くてごみごみしている。
うちの国とは大違い。
ハイヤードは、何も無い――じゃなくて、自然豊かな所なんで、ことは正反対。

んでもってそんな大国になんで私がるのかというと、よくわかんない。
馬に乗って逃げる最中、突然友達に貰ったネックレスが光って気づいたらここにいた。
いきなりの瞬間移動に驚いたけど、逃げられたから別にいい。

『ハイネ』このネックレスになんかしたのかな？
ハイネは、魔術師なので魔法が使える。
だから、転位魔法でも施していれば移動する事が可能だ。

「あいつら今頃、プレサの近くの町探してるんだろうな～」
そんでもって、目撃情報なくてパニくってるはず。
騎士達が血眼で探しているのを想像しちゃって、少し罪悪感というものがわいてきてしまった。
……無事ですよって事だけは教えておこうっかな。
だってさ、減給とかクビとかになったら可愛そうじゃん。
悪いのバーズ様なんだし。

残っていたパンを口に放りこむと、掌で円を描くようなしぐさをする。
すると淡いピンクの色の蝶が何処からともなく現れ、指先に止まった。
「一応無事だからって伝えて」
そう言うと、その蝶は私の周りを一周すると飛び立っていった。

さて、今度は何処の国に行こうってかな～っと。
教会前の噴水に腰掛け鞄から地図を出すと、それを眺める。
地図には所々バツが付いてあって、私はその国には行けない。

『シルク様』
声は聞こえるが、姿は見えない。
精霊が宿るのは自然の中だけでなく、古い建物や物にも宿る。
だから、この後ろの教会にも宿っていても不思議では無い。

あの教会にいるのか――

会いに行こうか迷ったが、まず話を聞く事にした。
「どうしたの？」
『あの赤い服を着たご婦人の店の壁際をご覧下さい』

は？壁際？
じーっといわれた方向を見ると、男の子が壁に隠れるようにして見ている。
四・五歳ぐらいかな。
服もかなり上等の物を着ているから、たぶんどっかの貴族の子供だろう。
その子供は私と目が合うと落ち着きなく視線を彷徨わせては、またこっちを見る。
私が近寄ると体を右に行ったり左に行ったりした。
「何か用？」
しゃがんで視線を合わせる。
細いブラウンの髪に、青い瞳。かなり色が白い。
「さっきの」
さっきの……ああ、もしかしてアレ見てたのか。
前と同じようにして、手から蝶を出しその子の指先に乗せてあげる。
「あげる」
「ほんと！？」
強張らせていた顔から、笑みがこぼれおちる。
おっ、可愛い。
「これ私の意識だから、時間断つと消えちゃうけどね」
そう言ってその子から離れようとした時だった。
本日二回目の包囲にあったのは。

第七幕　牢獄の中

どうやって逃げ出すかなぁ。
私はパンをちぎりながら、ここから脱獄する方法をなんとか探し出そうとあれこれ思考を巡らせていた。

いやあ、参った。参った。
まさか、あの子がこの国の第二王子だなんてね。

私は王子誘拐未遂で掴まってしまい、ただいま地下牢屋生活一週間目。
オリンズ王子も違うって言ってるのに、駆けつけた女官が「この人が王子をさらったんです！！」とのたまったせいで、一躍犯人に仕立てられてしまった。
んで結局ぬれぎぬだ！！って言ってんのにあの騎士たち信じてくれなくて、私をここに放り込んだのだ。
絶対あのメイドちゃんと見てなかったな。
責任のがれたくて、私に罪おしつめやがって……

まぁあのまま騎士と戦ってもよかったんだけど、街中だったから他の人に迷惑かけちゃうから大人しく掴まった。
アカデミーの時に結構いろんな騒動に巻き込まれたから、牢屋生活も別に問題なくやっていけるし。
それに……牢屋暮らしの方が『あの時』よりは天国にも思える。
ランプはあるし、食事には毒も入ってないもんね。

ん？
食事を続けていると、何か音が近づいてくるのが聞こえた。
どうやら、それは足音と話声らしい。

看守かなぁ。
走っているのか、足音が激しいように感じる。
さしあたって自分には関係ないと思い、残りの食事に手を付けようとした時だった。ガシャンという柵を握る音が聞こえてきたのは。

「……本当に居た」
男は柵を握りながら、中にいる私を目を大きく見開いて凝視していた。
その男はかなりガタイが良く、年齢はバーズ様とそう変わらなそうだ。
顔立ちも男らしく、お腹もうちのバース様のようにたるんでない。
バーズ様もお菓子ばっかり食べてないで、少しは運動すればこういう体になると思うんだけどなぁ。

「あなた誰？」
私が声をかえた男は貴族なのかよくわからないが、身なりの良さからかなり上の人物だと言う事が推測できる。

「それは後だ。それよりまずここから出よう。君をこのままここに置いておくわけにはいかない」
出してくれるなら、ありがたいけど。
でも、誰よ？
その答えは、バタバタと走ってきた看守が答えを教えてくれた。

「国王様！！一体どうなさったんですか！？」
へ～。大国ギルアの国王様ってこの人なんだ～。
この世界はおおざっぱに分けると、三つの勢力に分かれている。
精霊信仰のディル派。魔力を持つジル派。そして、その二つ以外のガル派。
ギルアはガル派の最大勢力で、膨大な国土を誇る大国だ。

「早く、この子を出してあげるんだ」
「は、はい」
看守は鍵の束からここの牢の鍵を見つけると、鍵穴に刺しここを開けてくれた。

＊
＊
＊

「驚いたよ。諸事情で国外に出てたんだが、オリンズの誘拐事件の話で急遽戻ってきたんだ。その上犯人が銀色の髪の少女と言うじゃないか。銀色の髪なんてそうそういない。まさかと思ったら、本当にシルクちゃんだなんて」
対面するように座っている、私を助けてくれた中年の男性。
彼は、この国の国王・バルト様。
どうやらうちのバーズ様とはアカデミー時代からの親友だそう。
そのため私の事も知っていたらしく、話を聞いた時は青ざめたらしい。

……まぁ、一応私も姫なので。他国間の火種になる可能性もあるしね。

「さあ、遠慮せずにお菓子と紅茶飲んで」
「ありがとうございます」
カップに口をつけると、林檎の良い香りが鼻腔をくすぐった。
アップルティーか。
「あの。私、誘拐の犯人じゃないです。偶然街中であっただけで…

…」
「もちろん、シルクちゃんがそんな事するわけないっていうのはわかってるよ。それにオリンズが城を抜け出すのは、なにもこれが初めてじゃないんだ」
「はぁ……」
じゃあ、何か対策打てばいいじゃんか思うのは私だけ？

「それで相談なんだけど、シルクちゃんに頼みがあるんだ」
「なんですか？」
「うちでメイドやってくれないかな？もちろん、お給料は支払うよ。この城、メイドが辞めるの多くて人手不足で困ってるんだ。しばらくの間、代わりのメイドが見付かるまでうちで働いてくれないかい？アカデミーでメイド科にいたシルクちゃんなら、出来る内容の仕事だとは思うんだけど……」
メイドかぁ。どうしようかな。
ハイヤードに帰るにも馬車代とかいるし、ある程度お金稼いでた方がいいかも。

「あの。お引き受けする代わりに条件というか、私の名前とか家の事とか秘密にして貰っていいですか？」
身分がバレてやりにくいのは、嫌だ。
でもそれ以上に嫌なのが、ディル派の奴らにバレてしまう事。
あいつら、私の事目の敵にして殺したがっているから。

「それはもちろんだよ。バーズにはこちらから、連絡を入れよう。一つ先に言っておくけど、ギルアはガル派だから大丈夫だと思うけど念のために外出時には護衛をつけさせるね」
「はい」
「じゃあ、今日はもう休んで貰って明日からお願いするね。そうだ。服と部屋を用意させよう」

バルト様は、鈴でメイドを呼ぶと指示した。

第七幕　牢獄の中（後書き）

かなーり久々に更新。

第八幕　初対面ですよね？

「リノア～っ！！」
「うわっ」
急に足に何かが抱きついて来たせいで、バランスが崩れる。
だがなんとか踏ん張り、持っていたアイロンのぴっちりかかったシーツの束は死守した。
あ、あぶなかった。これ落としたら、絶対洗濯担当の人に怒られる。

「オリンズ様」
「リノア～」
私の足元にしがみついているのは、第二王子のオリンズ様。
あれから妙になつかれてしまった。
ここでは私はシルクじゃなく、『リノア』と名乗っている。
アカデミー時代から使っている偽名で、今ではすっかり自分の本名のように慣れ親しんでいた。

「オリンズ様。急に抱きついたらリノアが転んでしまって危ないですよ」
オリンズ王子の後ろに控えていた女官が、王子に注意を促す。
今度の女官はこの間の女官より少し年下で、３０代後半から４０代前半ぐらい。
どうやらこの間の女官は外されたらしい。
彼女はいつも穏やかな笑みを浮かべていて、周りを安心させてくれる。

「ごめんなさい。リノアが見えたから……」
しゅんとなってしまった顔に、思わず胸を打たれる。
うっ。母性本能？

「いいですよ、オリンズ王子。でも今度から気をつけて下さいね」
「うん」
あぁ、可愛い笑顔。
シーツの束がなかったら、頭なでるのに～。

「リノアも一緒に行こう？」
「いけません。リノアはお仕事中です」
「やだっ。リノアと一緒に行く！！リノアいいよね！？」
「だめですよね！？」
え～と。私に振られても。
目の前では二人の攻防戦が始まってしまっている。
ジタバタ暴れる王子に対し、女官は有無を言わずに首を振っていた。
おうっ。王子は私の足にまた抱きつくと、今度は泣きわめきだし始める。
どうしよう。このシーツ全部取り換えなきゃならないし、他にも仕事があるから行けないんだけど……
女官も私も困っていると、不機嫌そうな声が飛んできた。

「――　騒々しい。一体、何事だ？」

美声のした方向に、私達三人の目がいく。
そこには見る者の大半が美しいというぐらい整いまくった青年が立っていた。
金色の髪をかきあげながら、青い瞳でこちらをうっとおしそうに見ている。

誰だ？こいつ――
腰には剣を下げているけど、騎士って感じではない。
城にいるからか、来ている衣類の布は上等の品物だ。
その男の姿を見ると女官は深々と頭を下げ、オリンズ王子は私の足

から離れるとその人めがけて走っていった。
「兄上っ！！」
「オリンズ。良い子にしてたか？」
「はい」
その男は走ってきたオリンズを抱き上げる。
兄上……？
ってことは、こいつがギルア国・第一王子のリクイヤード？
あぁ、良く見ると似てるかも。
たしかうちの騎士達が、女好きって騒いでたっけ。
たしかにこりゃ、もてるな。

「兄上が戻られたと聞いて、兄上の元に行こうって思っていた所なんです」
「そうか」
ふ～ん。こいつもオリンズの可愛さには弱いんだ～。
さっきまでの表情は何処へいった？とばかりに、笑顔を振りまいている。

「それで？お前らは誰だ？」
愛想笑いとか出来ないのかなぁ。
こちらに見せている表情は無表情だ。

「はい。新しくオリンズ様の女官として雇われたメイヤと申します。こちらは――」
「リノアと申します」
私も女官と一緒に頭を下げた。

「この女か。外に居た騎士たちが騒いでた女は」

「は？」
騒いでた？私なんかしたっけ？
「その容姿なら、貴族に取り入り金を巻き上げる事すら容易いだろ」
しねぇよ。んな事誰も。
――っていうか、初対面なのになぜそんな事言われなきゃならないのよ！！
こめかみが自分で引き攣るのが、わかる。
でも、ここは我慢だ。我慢。
それに、これは仕事だ。

「申し訳ありません。私、仕事中ですので失礼いたします」
にっこりとほほ笑みフェードアウトをはかろう。
じゃないと、このバカ王子にキレてシーツをぶん投げてしまいそうだ。

「うちの臣下達に手を出されても迷惑だ。仕方ないから、俺が直々にお前の相手をしてやるよ」
これを聞いて笑みが崩れぬわけがない。
綺麗な洗いたてのノリのきいたシーツが、宙を舞う……はずだったが、それを止めたのはほんの数日前まで毎日聞いていた聞きなれた声だった。

「――シルク！？」

第九幕　王子ＶＳメイド

ルーベンスアカデミー。
その学校は、入学倍率がかなり高い。
ここが人気なのには二つの理由がある。

一つは、入学料・学費共に無料な事。
そのため一般庶民から王族までさまざまな身分の人に入学資格が与えられる。
ただしその他の寮費などは自腹の上、親などからの仕送りは一切受けてはならない。自分の必要なお金は、全てバイトで賄うという条件付きだ。

そしてもう一つが、人材の育成力。
卒業生は各分野で世にたくさんの業績を残す人材が多い。
そのため、この学校を卒業するという事は一つのステータスになる。
庶民から城務めの官人になるのも可能になのだ。

もちろん授業はかなりハードだからついていけない奴や、王族や貴族なんかは優雅な生活から自分で労働という生活になるため、耐え切れなく辞める奴も多い。
私はそんな所をつい三週間前に卒業した。
ハイネ達と別れる時、「また逢おうね」って笑いあって別れたけど、まさかこんなに早くあうなんてな～。

私が見つめている甲冑に身をつつんでいるその男は、手にしていた書類が散らばるのを気にも留めず、こちらを見てただ茫然としている。
彼の髪はとかしてないの？とつい聞きたくなってしまうが、それは

彼の強烈なくせ毛がそう思わせているだけだ。
「お前なんでこんな所にいんだよ！？しかもその格好！！」
彼は散らばった書類を踏みしめながら、こちらに足を進める。
「久しぶり、『ロイ』。三週間ぶり～。ロイが騎士団の試験受かったのって、ギルアだったんだね」
彼は、ロイ。
私とは学科は違うけど、アカデミーの時の仲の良い友人の一人だ。

「何、初耳みたいな事言ってんだよ。ちゃんとお前らに真っ先に受かった時言っただろうが。人の話、ちゃんと聞いとけよ。校長先生にもさんざん言われ続けてただろ」
「あ～。校長元気かな？」
「お前ら卒業して、運動不足になってるんじゃないか？」
「お前らって……ロイも追いかけられてたじゃん。真っ先に掴まってたけど」
「廊下は走ったらいけないっていう校則があるからな」
出た。ロイの真面目さ。
いくら校則であるからって言ったって、追われてたら逃げるじゃん。普通。
掴まったら、校内草むしりと校長室掃除がまってるし。
それなのにこのロイは、バカ真面目に競歩で逃げていたのだ。

「お前はたしかうちの騎士団の新入りだな。たしかロイ＝テオドラ」
「はっ。これはリクイヤード様。挨拶もせずに申し訳ございません。どうかご無礼をお許し下さい」
ロイは膝をおり、礼をとる。
ロイが騎士っぽくしてんの初めて見た～。
「そんなにかしこまずとも良い。それよりお前、さっきこの女の事

シルクって呼んでなかったか？」
リクイヤード王子はロイに立つように促すと、私の方に視線を向ける。
あっ、そうだった。ロイのやつ、私の事本名で呼んだんだっけ！！
「……あ、いえ。それは」
どうやって誤魔化したらいいんだ！？とばかりにロイはこっちを見つめている。
今回はしょうがないか。たぶん、咄嗟に出たんだろうし。
アカデミーの時、私は自分の素姓を隠していた。
そのためリノアという偽名で通ってたんだけど、ロイのように仲の良かった一部の人物や校長などは私の事情を知っているため本名を知っているのだ。
「何をおっしゃってるんですか？ロイはちゃんとリノアと申したと思うのですが。ちゃんとリノアと聞こえましたよね？ねぇ、メイヤ様」
「えっ！？」
ごめんなさい、メイヤ様。
巻きこんじゃいます。
「そう言われてみれば、リノアと聞こえたような気がいたしますわ……」
「――だそうです。王子の完全なる聞き間違いですね。早急に耳のお掃除をする事をお勧めいたしますわ」
これぐらい言ってもいいだろう。
さっき、さんざん嫌な事言われたんだし。
「なんだと？」

「聞こえなかったの？さっさと耳掃除してくれれば？」
「リノア～！！王子になんて口のきき方を！！」
急遽間に入ったロイの目が涙目だけど、気にしない。

「たかがメイドのくせにその口のきき方はなんだ。クビにするぞ」
「すれば？ただし、あんたにその権限があればね。私は国王様に雇われたの。あんたはただの王子でしょ」
「リノア！！」
私のその言葉に、ロイの悲鳴じみた声が響く。

「ただのメイドが偉そうに。お前は俺が誰だかわかっているのか！！」
「王子、違うんです。リノアはメイドであってメイドじゃないんです！！」
「じゃあ、なんなんだ」
「それはその……」
「私が何者でもあんたに関係ないじゃんか」
「お前は少し黙れ」
「あんたが黙りなさいよ」
結局私たちの口論は、話を聞きつけた人達が止めに入るまで続いた。
これが私とリク――リクイヤードの最初の出会いだった。

第十幕　あちらも姫で、こちらも姫

「――聞いたよ、シルクちゃん。リクイヤードとやり合ったんだって？」
「すみません。あまりにもあの王子の性格が悪かったのでつい」
出されたお菓子に手を伸ばしながらバルト様に返事をすると、「シルク！！」と咎めるロイの声が後方から耳に届く。
ロイってばバルト様がせっかく座って良いって言って下さっているのに、自分は騎士なのでと言って申し出を断って私の後ろに控えている。

「申し訳ありません、バルト様。シルクには後でちゃんと言って聞かせますので」
「よいよい。ぜひ、うちの息子の性格を矯正してやってくれ」
バルト様は笑いを噛み殺している。

ここは城内に数室ある応接室の一つ。
会議が出来るんじゃない？ってぐらい広いテーブルに椅子が２０脚。
それから、壺などの装飾品だけといういたってシンプルなつくりだ。

「あの、国王陛下。シルクの事なんですが」
「話は聞いたのかい？」
「はい。シルクから大体。ですが、やはり問題だと思います。シルクの事情はおわかりですよね。それもあってシルクは他の王族より狙われやすいのです。もしシルクに何かあったら、この国はあの重度のシスコン……いえ、とても姉思いのラズリ＝ハイヤードの攻撃にあってしまいますよ。それにハイヤード公国にはシドもいます」
「おお、ラズリ君か。彼は実に優秀だと聞くな。バーズが時折嘆い

ているよ。息子の成長が速すぎて、もう追い越されてしまったとね。
シドというのは君たちの友人であの名高い暁の獅子の事かい？」
「はい。彼らだけではなく、ハイネとカシノ――漆黒の魔女率いるグランス国と科学の国ピネル国も敵にまわすでしょう」
「あぁ。彼女らはアカデミー時代のシルクちゃんとロイの友人だったね。もちろん、シルクちゃんの身の安全は心配ごとの一つだ。そのため、城の強化を図るなど気をつけているよ。それに――」
バルト様の声は、ノックの音で途切れてしまう。

「失礼いたします」
扉が開けられ入ってきたのは、あのスレイヤさんだった。
スレイヤさんは、私を視界にとらえると目を大きく見開き私を指さした。

「なぜ、ここにいるんだ！？」
……そうなりますよね。

「以前のご無礼をお許し下さい。ギルア国第一王女、スレイヤ姫」
私は立ち上がると、礼をとった。
最初メイドの噂話で聞いた時は、すっごく驚いちゃった。
彼女はれっきとしたこの国の姫。
王位の継承権から退き、今は騎士団の副隊長をしているらしい。

「いや、こちらこそすまなかった。あのハイヤード公国の姫だと知らずに無礼を働いてしまって。……というか、そもそもなぜ姫がここにいるのだ？それにその格好、まるでメイドじゃないか？」
「はい。メイドとしてここで働かせて貰っています」
「はぁ！？」
彼女は最初茫然と私を見ると、次に自分の父親を睨んだ。

「どういうことですか！？あなたは自分のやっている事がわかってるんですか！？一国の姫にメイドやらせるなんて！！」
「その話でお前を呼んだんだ。シルクちゃん。一応護衛としてロイとスレイヤを外出時など、必要な時につけさせるよ」
「はい、ありがとうございます。――あ」
鐘の音が鳴り響くのが室内まで聞こえて来る。
やばいっ！！昼休み終わっちゃうじゃんか！！

「すみません。私、もう仕事なんで行きます」
「あぁ、すまないね。貴重な昼休みだったのに」
「いえ。あのできれば眼鏡をかけて縄で縛られていた人にも、口止めをしていただきたいのすが……」
「縄で縛られた奴かい？」
「スレイヤ様なら、わかると思います」
私はそう告げると、部屋の外へと飛び出した。
次の仕事は、２階の東棟っと。
急がねば！！

第十一幕　王子専属メイド

あの王子め。どんな嫌がらせだっつの！！
こっちはあと１時間以内に３０室、全シーツ換えと掃除をしなきゃならないのに！！

私はさっきまで別棟でシーツの張り替えの仕事をしていたんだけど、いきなり王子付きのメイドに呼び出しをくらってしまったのだ。
「王子にお茶を持って行ってほしい」と。
私は王子付きのメイドじゃないから、そんな事しなくていいのにさ。
まぁ、人が足りないならヘルプで入るよ？
でも、王子のとこ足りてるじゃん。

このまま室内に入るとキレて文句を言いそうになってしまうので、私は深呼吸を二・三度行ってからノックをした。
すると間もなくして、入室を促す返事が耳に届いた。

「失礼いたします」
片手にポットとカップの入ったトレイを持ち、空いた片手で扉を開ける。
スマイルだ、スマイル。
自分に言い聞かせなんとか笑みを浮かべるが、あいつの言葉でそれは数秒と持たなかった。

「――遅い」
そう発言したのは、中央にある大きめの机で書類にペンを動かしている、リクイヤード王子。
「申し訳ありません。私、今まで別棟にいましたもので。喉が渇いて仕方ないと駄々をこねるのなら、王子付きのメイドにでも入れさ

せて下さい。目と鼻の先なので、早いと思います」
ふん。別にお前なんかに睨まれても怖くねぇっうの。
私はさっさと室内から退出すべく、カップを空いている机のスペースに置く。

「お前はほんと可愛くないな」
「なんとでも。それより、濃かったり薄かったりしたらおっしゃってください。好みがまったくわからないので」
「お茶なんてどれもいっしょだろ？」
「違います。葉っぱの種類、蒸らす時間などによってかなり変わってくるんですよ」
リクイヤード王子は、カップに口をつける。
お茶入れは、はっきり言って自信あるんだよね。
授業でさんざんやったし、結構先生に褒められてたから。

「おいしいでしょ？」
王子の顔が一瞬変わったのを、私は見逃さなかった。
「……不味くない」
こいつひねくれ過ぎ。
可愛くないのはそっちじゃん。

「リクイヤード王子。今度からは、ご自分付きのメイドに頼んでください。私は、別棟担当なので、こっちの仕事すると自分の仕事出来なくなってしまうんです」
私は一礼するとさっさと扉から廊下へと出た。
ヤバいなぁ。時間内に終わらせないと、メイド長に怒られちゃうじゃんか。
かと言ってチェックが入るから、手抜けねぇし。

＊
＊
＊

「――言ったよね？私、昼にさ。お茶なら自分付きのメイドに頼んでって。しかも、明日私早番だから、もう寝なきゃならないの」
テーブルに両手をつくと、ダンッという大きい音が室内に響く。
それなのに、目の前のやつは無反応だ。

「リクイヤード王子。聞いてます？」
「大声だすな。聞こえてる。だから、お前を呼んだんだろ」
「は？意味わかんないんですけど。というか、今何時だがわかりますか？」
もう少しで夢の世界って時に急に起こされ、何事かと思ったら「王子にお茶を持って行って」って……
一瞬、デジャブか！？って思ったっうの。

「お前は俺専属のメイドになったんだ。だから、俺が呼んだら来い。言っておくが、朝晩関係ないからな」
「はぁ！？」
んな事初耳だっうの！！
冗談じゃない。朝晩関係ないなんて、特別割増手当貰わなきゃ……
――じゃなくて、睡眠不足で働けなくなるじゃんか。
こいつ、メイドの事こき使いすぎだ。

「言っておくが、他のメイドはちゃんと交代制だし、休みもある。お前はなし」
「なにその嫌がらせ」
あ～。もうめんどい。

別にこいつに嫌われてもいいけどさ、仕事フルってキツイって。
こいつが勝手に言ってるだけかもしんないし、後でちゃんと確認とるか。

「ん？」
コンコンとリクイヤードの後ろにあるドアから聞こえて来る。
私とリクイヤードは二人してその方向を見ると、瑠璃色の鳥が一匹窓辺にとまっていた。

「鳥……？誰か餌付けでもしてるのか？」
「違う」
これは――
私は窓を開けると、その鳥を室内に招き入れる。

『夜分遅くに申し訳ありません。シルク様』
「どうしたの？」
「お前、何鳥に向かってしゃべってんだ？」
リクイヤードは私を見て首を傾げている。
この声はたぶん、あいつには届いてない。
これは精霊の声だ。
どうやら鳥に姿を変えているらしい。

「ちょっと黙って。ねぇ、何かあったの？」
『オリンズ様が城を抜け出しました』
「ええっ！？」
『今、私の元へいます。このような夜半に子供一人ではいろいろ危のうございますので、取り急ぎご報告にあがりました』
「わかった、ありがとう。迎えに行くから、場所教えてくれる？」
『おおせのままに』
ほんと、ここの警備ってどうなってるのよ？

「リノア。お前、頭大丈夫か？」
いつのまに立っていたのか、リクイヤードは私の前方に立って顔の前で手を振っていた。

「大丈夫に決まってるでしょ。それより、リク。馬一頭かしてくれない？」
「おい、リクって……」
「いいじゃん。そっちの方が呼びやすいし。私この格好だとあれだから、上着もってくるから外に準備しておいてね」
さて、どうしようかな。
国王様には念のためにお伝えした方がいいかしら？

第十二幕　姫君の力の見せどころ

「こんなところにほんとにオリンズがいるのか？」
「うん」
がさがさと両手で茂みをかき分けながら、私達はひたすら前へと進む。
私の前方をリクが道をつくってくれているから、結構楽。
歩きやすい山道からかなり外れ、オリンズ様は獣道を通っていったみたい。
葉っぱとかで怪我とかしてないといいけど。
それに山賊やクマなんかとの遭遇など、あぶない事も多いじゃん？
良かった。精霊がいてくれて。
絶対、私達だけならこの森の中彷徨ってたもん。
でもさ、オリンズ様どうして山なんかに来たんだろう？しかもこんな時間に。

「なぁ」
「ん～？」
「あの鳥、変じゃないか？」
リクは私達を案内してくれている瑠璃色の鳥を指す。
鳥は私達のペースに合わせてくれていて、私達が休憩のために休むとちゃんと止まって待ってくれる。

「へ～。良く気づいたね」
誰が見ても鳥にしかみえないのに。
「あの鳥、やけに鮮明に見えないか？月明かりとランプの明かりがあるとしても、異常にはっきりと見える。一体、あれはなんだ？」
「教えたら私の秘密教えなきゃならないから、今は教えてあげない」

「はっ？なんだよ。それ」
「どうしても知りたいなら、私がここから居なくなる時に教えてあげ――って痛いんだけど」
鼻つぶれるかと思ったじゃんか。
リクが急に立ち止まったせいで、私はリクの背中に顔面をぶつけてしまった。

「……お前、いなくなるのか？」
「そりゃあね。最初っから、代わりの人が見付かるまでだし。だから代わりの人見付かって、お金が貯まったら自分の国に帰るよ」
数年足を踏み入れられなかったけど、早くハイヤードに帰りたい。
ギルアみたいに大きくもないし発展もしてないけど、自然に囲まれたハイヤードが私は大好き。
それに、家族とだって逢いたいもん。
あ～。懐かしい。あの山に囲まれた国。

「リク～？」
リクはずっと立ち止まったまま、前を向いたきり。
なんだこいつ。もしかして私が居なくなるかもしれないのがさみしいのか？
いや、でもそんな情がわくほど一緒に居なかったし。

「……行くぞ」
「え？あ、うん」
私は首を傾げたが、あまり気にする事無く足を進めた。

＊　＊

＊

――まいったな。

茂みからなるべく気配を消し、外の様子を伺う。
そこには男が数人、松明を手にピンク色に咲いている花を摘んでいるのが見えた。
彼らは花を摘んでは大きな麻布につめるのを何度となく繰り返している。

こいつら、夜光華狩りの連中か……

夜光華というのは暗闇の中であの淡くピンク色に光っている花のこと。
主に香水や製油の原料として使用され、品のある香りから貴族令嬢に愛用されていた。

でもそれは前の事。
こういう山深い所でしか生息していない事、それからこの華自体希少な事から元々高値で取引されていた。
そのため採取者が増加し、花が激減。
現在では生息している所があまりなく、今では採取禁止命令が出ているぐらいだ。
そのため、採取出来ない事になってるんだけど……

――さてはあいつら、裏で売るつもりだな。

「リノア」
「何？」
リクが、小声で話かけてきた。

焦るわけでもなく、表情はいつもと変わってない。

「お前、見付からないようにここに隠れてろ」
「えっ、何。もしかして正面突破する気？」
「他に方法ないし、見逃すわけにはいかないからな」
相手はざっと見て、１０～１５人ぐらいみたい。
相手の腕前がわからないけど、この人数ならなんとかなるかも。

「わかった」
マギア持ってきて正解だったな。
私は、マギアを包んでいる布を取り払う。
すると、月の明かりに埋め込んだ魔石とマギアが輝く。
この間魔石一個使っちゃったから、なんか少し不格好かも。

「まさか、その装飾品で戦うとかぬかすんじゃないだろうな？」
「そのつもりだけど？」
「ばっ――」
私はリクの口を手で塞ぐと、あの男たちの様子を伺った。
良かった気づかれてないみたい。
唇に人差し指を当てながら、ゆっくりと手を離す。

「バカかお前！！これはどう見たって装飾品だろ！！切れるのか？
それにそもそもお前は、剣が使えるのか！？」
「ちゃんと切れるよ。それに使えるから持って来たんじゃん」
「いいか。護身用にならったっていう程度じゃ話にならない。実際の戦闘は予想外の出来事が起こるんだ。それに、あの一番大柄な男いるだろ？あいつには賞金がかかっている」
「へ～。んじゃあ、あの男私が倒すから」
そしたら賞金は私のもの。
ラッキー。ハイヤードまでの資金稼ぎにはちょうどいいじゃん。

「お前、人の話聞いてたのか？」
「聞いてたわよ。私の事は気にすんなって。リクより強いかもよ？」
「んなわけあるか。いいか、助けてって言っても助けないからな」
「いいよ、別に」
だってそれはないし。
あいつらそんなに強敵って感じじゃないもん。
「じゃあ、さっさと倒してオリンズ様迎えに行きますか――」

第十三幕　銀の悪魔

男と女なら、女の方が弱い。
それは力の強さや、体の大きさの違いから言われることだ
でも実際は、個々の能力を見なければわからない。
武術にすぐれた女にとって、男一人を倒す事すら容易な時すらあるんだから。

「ちょっとリク！！なんであんたがそいつと闘ってんのよ！！」
複数の剣の太刀を交わしながら、少し離れたところで戦っているリクに怒鳴った。
動物や虫の鳴き声に交じって、金属のぶつかり合う音が聞こえてくる。

「知るか」
冗談じゃない。なんでリクばっかり賞金首と闘ってるのよ！！
相手の戦力は全部私に向けられている。
おそらく、人質にでもとろうと思ったのかもしれない。

大体リクがあいつを倒したら、賞金がリクのものになっちゃうじゃん。
どのくらいの賞金額かわからないけど、無一文の私には天からの助けだ。
それを横取りされるなんて――

「こっち早めに切りあげて、賞金ゲットしてやる」
私はこっちのやつらを倒し、リクが賞金首を倒す前に私が賞金首を倒すことにした。
幸いな事に、こいつら数だけで弱いし。

筋が悪いわけじゃないから、ちゃんと鍛錬積めばそれなりになるのに。
勿体ないな～。

一人二人と倒していくと、様子がおかしい奴が目に入ってきた。
他の連中は私に向かって来るんだけど、そいつだけはただ私を見て震えている。

「おいっ！！こんな時に何ぼさっとしてんだ！！」
「……無理だ」
青白い顔をした男は、ゆっくりと腕を上げ私を指さす。

「俺達この女に殺されちまうんだよ」
いや、殺してはいないって。
みんな、みね打ち。
「――この女は銀の悪魔なんだ！！」
その男の声があたり一面に木霊する。
あまりに異常な声音に、少し離れた所で戦っていたリク達の動きまで止まってしまった。

「銀の悪魔って……ハイヤードの呪われた姫のことか？」
「そうだ」
「俺はディル派じゃないから良くわかんねぇけど、姫は何年も城の地下牢で幽閉されてるって聞いたぞ。たしかにこの女銀色の髪だけどよ……」
「俺だってそう聞いてる！！でもこいつの持っている剣はマギアだ。まさか、実在するなんて」
どうやら、誤魔化すのは無駄のようだ。
マギアを知っているから、こいつは精霊信仰のディル派の国の出身らしい。

「あんたディル派？」
「そうだ。お前が滅ぼしたウラナの出身だ」
前にウラナという国があった。
今は地図上からは、その存在が消えてしまっている。
天変地異が起こり一夜にして滅んだとか、戦で滅んだとかではない。

「――ウラナね。あのバカ王の居た国か」
ウラナを滅ぼしたのは、あろうことか自国の国王。
だが、それはあまり知られていない。
彼らの国を滅ぼしたのは、私になっているのだから。

「陛下をバカにするな！！あのお方はお前のせいで死んだんだぞ」
「死んでないわよ。あんた達国民にはそういう話になってるの？あの事件の後、あのバカな国王はさっさと自分の国を見捨てて、他国へと亡命したんだけれど」

――あの事件。
それはウラナ滅亡の原因となった奇妙な伝染病。
今はその病原菌についての研究も進み、ワクチンや治療薬も存在しているから、発症しての死亡率はかなり少ない。
だけど、あの頃はそんなに進んでなかった。
発症してからの死亡率が、９０％を超えていたのだ。

「お前の言うことなんか信じるか！！ウイルスをばら撒いた張本人のくせに。俺らの国になんの恨みがあるんだよ！！」
「恨みなんてないわよ」
「だったらなんでみんなを殺したんだよ。俺の家族もあの時、全員お前に殺されたんだ」
男の崩れ落ちるように地面へとしゃがみ込む。

雫が地面に落下した。

「知られていないけど元々の原因となったのは、虹色に輝くデデの華。そのウイルスを国内に持ち込んだのは、あんたの所の国王よ」
ある日ウラナの国王は、商人から虹色に輝くデデの華の話を聞かさる。
王はその話を聞き、なんとして手に入れたいと思った。
「華のウイルスだと？バカにするな。華なんかのウイルスで、あんなに人がたくさん死ぬかよ！！」
「あまり自然を馬鹿にしない方がいいわよ」
生き物には菌や良い悪い関係なくウイルスが存在している。
それは植物だって言える事。

「これは一部の上の連中の間では事実として認識されている。でもそんな事がバレてしまえば、国のメンツにも関わってきてしまう。だって他国から勝手に禁止植物を持ち込んだ上に、それが原因で大量感染を引き起こしてしまったんだもの。だから、私の存在を利用したのよ」
都合良く、ディル派に忌み嫌われていた私の存在を。
案の定私の呪いと噂は広がり憎しみの矛先は私に向けられ、真実は闇に隠れ誰も事実を知る者はいなくなった。

第十四幕　忌み子

「おい、ちょっと待て。どうやって華を手に入れたんだ？デデの華は、キラ国にしかない。しかも、国王管理エリアにしか咲いてないはずだ」
そう私に話しかけてきたのは、リクとさっきまで戦っていた賞金首だった。
もう剣は降ろして、私達の話を聞いている。

「たしかに貴方の言う通り。だから外交という名目でキラ国に滞在し、隠れて禁止エリアに侵入して無断で華を密かに掘りおこしたの。そして、何食わぬ顔をして自国に持ち込んだ」
「なんて奴だ！！デデの華の花粉は毒性が強ぇんだ。俺達は生まれた時から免疫持ってるから華に近付いたり、触っても問題ねぇ。だが、他国の奴らは違う。だから王族の奴らの手によって、隔離されてんだ。他の国のやつらが、珍しがって持ちださないように」
「そう。それなのに、国王は持ちだしてしまった。自分の思惑通りにデデの華を入手した王は、自国に戻るとさっそくデデを妃や家臣などいろいろな人に見せて自慢を始めたの。みんなデデの美しさに魅了された」
ウイルスは知らず知らずの内には空気感染、直接感染などによりだんだん城を浸食していった。
そして原因不明の病に伏せってしまう人が増加していく。

その感染は強く早い。
ハイヤード公国に連絡が入った頃には城の連中はおろか、街の人々にまで病が広がっていた。

「そこからは皆に知られている通り。すぐに父様……バーズ様とラ

ズリによって原因究明が行われ、事実発覚。そしてすぐにアカデミーに応援を頼む連絡が入れられたの。そしてそれを受けたアカデミーの薬学の先生達、それからハイネとカリノを含む生徒の研究によりワクチンが作られた」
全て話終わったけど、男は何も話すこともないし動きもしない。
まるで人形のよう。

「リノア。お前は本当にハイヤードの姫なのか？ハイヤードの姫は幽閉されているっていうのは、ディル派じゃない俺でも知られていることだぞ」
「表向きはね。でも、幽閉はされてたよ。7歳の誕生日からずっと、15歳の時までにね。今まではアカデミーに入っていたから、大丈夫だったけど」
7歳の誕生日に私は神官の手により、明かりもない地下牢に幽閉された。
シドに助けられるまで、8年間ずっと。
その間は地獄だった。

「地下の真っ暗な部屋の中、頼りになるのはたった一本のろうそくだけ。湿気が強いせいか、木の机なんかはカビが生えてたっけ。それに、食事には毒が入れられてさ。それを考えると、ギルアの地下牢って良いよね。ランプあって、ごはんおいしいし」
クスクスと笑っていると、リクの怒号が聞こえた。

「何笑ってんだ！！なんでお前がそんな目にあわなきゃならないんだよ！？」
「……私に精霊がいないから」
ハイヤードの王族には7歳までに自分を守護する精霊が現れるんだけど、私には精霊が現れなかった。
これは前代未聞のこと。

神官達はこれを不吉な事とし、私は凶の源とされた。

「たったそれだけでかよ？それだけで、嬢ちゃんはそんな目にあったのか？」

「あぁ。賞金首さんは、キラ国出身だっけ？キラ国はガル派だもんね。でも彼らディル派にとっては違うの。精霊は崇める存在だから。精霊がいないイコール、私には精霊の祝福がない忌み子ってなるの」

「ハイヤードの国王はどうしたんだよ！？自分の娘がそんな目にあってるのに、助けなかったのか？」

「――幽閉はバーズ様が決めた事なの」

私の言葉に、リクをはじめ全員が息をのんだ。

「言っておくけど、バーズ様が悪いわけじゃないよ。あの時、そうしないと私殺されてたし」

バーズ様は神官達に今すぐ処刑するか、幽閉するかどちらかの選択をせまられていた。そして、バーズ様は幽閉を選んだ。

「お前、金が貯まったら帰るって言ってたよな？大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃないだろうね。あいつら、また私を幽閉するか処刑するかして欲しいっていう嘆願書送っているみたいだし」

「それなのになんでだよ！？わざわざ自分で敵地に出向くなんて、馬鹿か！？」

「それでも帰りたいの。今まで家族とちゃんと過ごした事なかったから、一緒に過ごしたいんだ。それに別に心配しなくても平気だよ。私ちゃんと鍛錬して剣術とか身に付けたから、強くなったもん。あの頃とは違う」

だからむざむざと幽閉なんてされないし、処刑もされない。

それに今はシドもラズリもユリシアも、騎士のみんなだって国にいるから。

「――っていうか、なんか完全に話それたよね」
なんか、いつの間にか身の上話になってしまっちゃったなぁ。

「かかって来ていいよ。じゃないと捕まえちゃうけど？」
そう言ったんだけど、誰ひとりとして剣を動かす人はいなかった。
え、何この空気。すっごく重い。
いや、作りだしたの私だけどさ。

第十五幕　水面下

しんと静まり返った森の中、さっきまで鳴いていた虫や獣の遠吠えすらかき消すぐらい大きい声が響いていた。
それは言わずと知れたあの真面目な男の声――

これ耳ふさいだら、もっと怒鳴られるだろうな～。
一応俯き反省した振りを見せているが、相手にはもうとっくにばれているだろう。
やだなぁ。ロイの説教長いんだよね。
平気で一時間とかするし。

「リノア！！人の話はちゃんと聞けっていつも言ってるだろ！！」
見たくもないが、私は一応顔を上げその人を視界に入れる。
そこにいたのは仁王立ちでこっちを睨んでいる、ロイだ。
髪には葉っぱをつけ、頬には枝で出来たと思われる小さい傷が出来ている。
そんなに眉間に皺よせると、とれなくなるよ？なんて言おうものなら、説教タイムが伸びまくってしまうので心の中にしまっておこう。

私は城を出る時に、ロイに伝書蝶を放って置いた。
それに気付いたロイが、スレイア様を引き連れ、私達より数分遅れで森へとやってきた。
ロイ達が私達に追いついたのはいいんだけど、事後報告で知らせたのがまずく、動く前に知らせろとぐだぐだとお説教が始まってしまったのだ。

「大体、お前はいつもそうだ。すぐ勝手にほいほい決めて行く。お前は人一倍命狙われているんだから、もっと用心して行動しなきゃ

ならないだろ。しかも相変わらず、また厄介事に巻き込まれて――」
巻き込まれるも何も、夜光華狩りにあったのはしょうがないじゃん。
それは私が悪いわけじゃないって。
……と、反論しようとしたが口を開くのを辞めた。
だって、絶対倍になって返ってくるもん。

「ロイ。お説教の最中、悪いんだけど」
後でいろいろ面倒になるの嫌だから、言ってしまおう。
それにどうせ怒られるなら一回でがいい。

「なんだ？」
「リク達に私の秘密バレちゃった」
正確には、自分でバラしちゃったんだけど。
あははと乾いた笑いを浮かべれば、ロイの顔色が急速に変わっていった。

「――っ」
痛い。
二の腕がにロイの手によって潰されるんじゃないかってぐらい握られた。

「まさか、あのお縄になった連中にもじゃないだろうな？」
ロイの視線は少し離れた所にいるリクとスレイア様、それから縄で縛られている夜光華狩りの連中に向けられている。
「……ごめん」
「リノア！！」
一瞬雷かとおもうぐらいロイの声は畏怖するものだった。
思わず身が縮こまる。

「ロイが心配してくれるのは、わかってるよ。でも、あいつらと戦

うって決めたの。だから、遅かれ早かれ私の存在は世間に現れる。
それが早くなっただけだよ」
どうせハイヤードの帰ったら、私の存在が明るみに出る。
私はもう幽閉される気もないから、自由に生活をさせて貰うつもりだし。

「わかってない。状況はお前が思っているより、最悪が方向に進んでいるんだ。あいつらはもう幽閉なんて生緩いやり方はしない。今度こそ――」
ロイはそこで言葉をやめてしまう。
もうそこまで言われれば、答えなんて考えなくてもわかる。

「――今度こそこいつを殺すのか？」
「……リク」
いつの間にか、リクが私の傍に来ていた。
ロイと同じでその表情は硬い。

「……シルク。しばらくこの国にいろ。幸いな事に、あいつらはお前の消息をプレサで失ったらしい。だから、ここにいる事は知られていないんだ」
ロイはリクの問いには答えず、そう告げる。
プレサって、私が飛ばされる前にいたところだ……
まさか、後つけられてたの？それとも、間者がいた？

卒業という事とハイヤードに戻れるという事で気を抜いていたのか、まったく気付かなかった。
これは完全に私の落ち度だ。

第十六幕　気がつけばもうすぐ朝

「またお前は勝手に城を抜け出して！！」
「……ごめんなさい」
「謝れば許される事ではないだろうが！！」
肩を落とし反省しているオリンズ様と、怒鳴り声をあげているリク。
まるでさっきの私とロイのようだが、きっとこっちの方が怖いと思う。
だってロイは最後の最後で許してくれるけど、こっちは許してくれなそうだもん。
リクってねちねちしてそうだから、きっと反省文とか書かされたり罰として勉強時間増やされたりしそう。

「リク。もういいじゃん。オリンズ様泣いてるし」
「お前は黙ってろ」
「リ、リノア…を怒らないで…僕が…悪いんだから……」
オリンズ様は涙をぼろぼろと流しながら、私とリクの間に割って入った。
あ〜、可愛い。
こんな時なのに、私の事庇ってくれるなんて。
ハグしたいけど、やったら絶対リクに怒られるな。

「今度は何が見たかったんですか？ちゃんと声かけて下さいってこの間お話いたしましたわよね？」
しゃがみ込んでオリンズ様と視線を合わせれば、潤んだ瞳と目があった。
オリンズ様は好奇心旺盛な方らしく、たびたび脱走を図る。
この間は湖が見たいからという理由だった。
一言断って護衛をつけさせて外出すればいいんだけど、即行動とい

う性格らしく勝手に抜け出してしまう。

「……ごめ…んなさい。お…花……さが…してて」

「花ですか？」

私の言葉にオリンズ様は頷く。

「……うん。リノ…アの髪と……同じ、プラ…チナの……色の花を……探してたの……」

「もしかしてツェルドラードの華ですか？」

もしそうなら、困った。

あれを探すのは困難というか、ちょっと無理なんだよね。

「名…前は忘……れちゃった。内緒で…探して……リ…ノアにあげ…ようと思って……」

そう言って差し出されたのは、一冊の本。

中身をめくっていくと、どうやらこの本には文献などに書かれている珍しい物ばかり集めて書いているようだ。

文字の大きさとイラストから、子供向けになっている。

「おい、ツェルドラードの華ってなんだ？」

「あぁ、リクはガル派だから知らないか。ツェルドラードの華って、精霊の王様ツェルドラードの名をとってそう呼ばれているの。ツェルドラードの髪と同じ銀色の花びらをしてるんだって。その花が咲いた時、精霊王がこの地に姿を現すという幻の花らしいよ」

マギアと同じでこの花も古い文献に書かれているので、実在するかわからないのだ。

まぁ、マギアも存在したから、もしかしたらこの花も存在する可能性もあるけど。

「精霊にも王がいるのか？」

「うん。精霊には二種類いて、一つは森や古い建物などに宿る精霊。そしてもう一つは、火や氷など自然の要素を司る精霊がいるの。王はその全てを統べる存在。私達、ハイヤードの王族は彼とハイヤードの姫君ルチル様の子孫だと言われているんだ。だから彼のおかげでハイヤードは精霊の加護を受けている」
昔寝る前に母様――ラピス様が私とラズリに読んでくれた絵本。
精霊王とハイヤードのお姫様の恋物語。
内容はある日人間界にやってきた精霊の王が、ハイヤードの姫に恋をするという話。もちろん姫も王の事を愛するんだけど、身分と種族が違うため結局離れ離れになってしまうという悲恋物。
ラスト納得出来なくて、ラピス様に抗議しまくって困らせたっけ。

「なぁ。お前の髪が珍しいプラチナなのって、その王と関係があるんじゃないか？」
「ないと思う。だって、私の髪って元々バーズ様と同じハニーゴールドだったんだもん。でも、地下に居た時の生活でこうなっちゃった」
食事に仕込まれていたさまざまな毒物のせいか、陽の光があたらなくて退色したのか。直接の原因は不明だ。

「まぁ、でもプラチナも悪くないでしょ？珍しいし」
「リノアの髪綺麗～」
「ほんとですか？ありがとうございます」
ん～。オリンズ様可愛いな。
ほっぺたプニプニしたい。

「お前はなんでそんなにあっけらかんとしてんだよ。普通なら恨――」
「王子。そろそろ戻りましょう」
リクが何か言いかけると、ロイがそれを遮ってしまう。

空は薄く明るくなり始めている。
あと二・三時間もすれば早番の人達の仕事が始まるな〜。
――って私、早番だし！！
……どうしよう。私の睡眠時間。

第十七幕　選択肢が結婚ですか？

鳥、まだ鳴くなって……
何処からか聞こえてくる鳥の鳴き声に、私は布団にもぐりこむ。
ふわふわと意識がまだ浮遊している。
仕事だからいいかげん起きなきゃいけないけど、まだ頭は半分夢の世界。
そろそろ起きなきゃな～。
そうは思ってはいるが、意識はもうすでにまたあっちの世界へ行きかけている。

オリンズ様の件で、寝たのがほんの二時間前。
正直仕事なんて放置して、このまま意識を手放してしまいたい。
あ～、なんで私早番なのよ。
誰でもなく、今月のシフト表を布団の中で怨んだ。

「眠い……――」
後、十五分だけ寝ようかな。そうすれば、すこしはすっきりするかも。
朝食抜けばギリギリ朝のミーティングに間に合うし。
時計を見て後十五分だけ寝ようと心に決めまた瞼を閉じた次の瞬間、乱暴に開け放たれた部屋の扉により、私の安眠は妨害されてしまった。

「リノアーーーっ！！」
「……う、メルさん……？」
思わず耳を塞いでしまうぐらいの大きな声に、無理やり意識が現実の世界へと連れ戻されてしまう。
その声の持ち主は、同じメイド仲間のメルさん。

私と同室で、頼りなるお姉さんだ。

「何寝てんのよ！！起きなさいって。大変なんだってば！！」

「……またオリンズ様が脱走したんですか？」

慌てた様子に、私はすぐにベットから飛び起きた。

今度は何処に行ったの？

戻ったのが数時間前だっていうのに、元気すぎるでしょ。

「オリンズ様じゃないわよ。リノアあんたよ、あんた！！」

「はぁ？」

メルさんは私より、５つ年上でメイド歴も私より長い。

だからそんな反応をしてはいけない事はわかっているが素で出てしまった。

「リクイヤード様が、あんたの事を囲おうとしてんのよ！！」

「囲う……？私は羊が何かですか？」

「そっちの囲うじゃなっうの。王子があんたの事をメイドから外すって。それから、部屋もここじゃなくゲストルームへ移動させるそうよ。早朝に町の宝石商と針子に使いを出して、宝石とドレスも用意させてるらしいわ」

まさか、それって私が姫だってバレちゃったから？

メイドを辞めさせるのは、正しい判断だとは思う。

だってまさか、一国の姫をメイドとして雇う常識外れはいないだろう。

もしバレたら、国際問題だもんね。

でも私はメイドとして働くけど。

「あぁ、そっちの方ですか」

「何であんたはそんなに冷静なのよ！！リノア美人だから、あの女好き王子に気に入られちゃったんだってば。今、報告を受けたメイ

ド長と女官長様が国王様の所に王子をお止して頂くために向かってるわ」
もしかして、これってもう広まってるのかな？
メイド達の噂話は広まるのがかなり速い。
その上、かなりオーバーに話されるため事実よりも誇大になっている事が多い。

事情を知らない者がそんな事を耳にしたら、「王子が権力をかさにメイドを囲おうとしている」って話になっちゃうじゃんか。
そんなことになったら、リクの城内の評価ガタ落ちかも。
女好きっていうのは皆知っているみたいだから、信憑性あるし。
とりあえず状況収拾のためにも、リクのところに行くか。

＊
＊
＊

「駄目だ」
リクはそう言うと、視線を手元の書類へと戻した。
このわからずやめが。本人が良いって言ってんだから、いいじゃんか。
私はリクに特別扱いすることなくメイドとして今まで通りさせて欲しいと頼みに来たのだ。
それなのに、こいつは駄目だの一点張り。

「いいか？うちだって完全に安全ではない。だから、国賓扱いにして常時護衛に守らせる。安全のためにそれが最善の策だ。わかったら、黙って言う事きけ」
「そんな事言ったって、ただじっとしてるの性にあわないんだってば」
「なら、大人しく詩集でも読んでおけ」
そんなの読んだから、絶対寝るっうの。
こいつじゃ埒あかないな～。国王様に言おうっと。
だって元々国王様の許可出てるし。
そう思って体を執務室から廊下へと出れる扉に向ける。

「リノア」
「なに？認めてくれるの？」
すぐにまた後ろを振り返ると、リクが顔をしかめた。

「んなわけないだろうが。出てく前にこれに今すぐサインをしろ」
「は？何それ」
リクに差し出されたのは、一枚の紙。

「何、この嫌がらせ」
それを見て思わず顔が歪む。
だってそれは婚姻契約書だったんだもの。
国によって様式は違えど、中身は大体一緒だ。
……しかももう、リク書いてるし。

「念の為の保険だ。もしお前がディル派に見付かったとしても、お前はギルアの人間と言いはる事が出来るからな。ギルアの王族に入れてしまえば、あいつらも手を出しにくくなるだろ」
「リク、結婚してないよね？だったらまずくない？」
「いや。側室の一人や二人いたところで、縁談にヒビなんて入らな

い」
あ～、そうか。ギルアは一婦多妻制か。
ハイヤードは一夫一婦制だから、一人としか結婚出来ない。
「後宮には親父のが５０人ばかりいるからな。それ以外の入れると、何十人いるんだか……」
えっ、そんなにいるの？
それって、会う時ってやっぱお気に入りとかの順？
私は自分の事より、そっちに頭がいってしまった。
「こっちだってお前じゃ不本意だか、人助けだ。事態が落ち着くまで俺と結婚してろ。問題が片付いたら、すぐに離縁してやる。まぁ俺が嫌なら、親父という手もあるが？」

第十八幕　これでも新妻

「……まさか、サインしたんじゃないだろうな？」
「したよ」
私は後ろにいるロイを見ず、目の前にある棚を見ていた。
え～と、元老院のおじいちゃん達は少し渋めが好みなんだっけ。
じゃあ、今日はこのお茶にしようっと。
棚からオレンジのラベルが貼られたビンを取りだすと、蓋を開けてスプーンですくいあらかじめ温めておいたポットへと入れる。
ポットとカップって、暖めるのと暖めないの全然違うんだよね～。

結局私はメイドの仕事をこうやって今みたいに続けられるようになった。
それはメイド長達が国王様に直訴してくれた事、それから元老院のおじいちゃんやおじさん達からのクレームなどによって、リクがしぶしぶ認めてくれたから。
今頃リクはクレームと仕事の処理に追われてるだろう。
元老院のおじいちゃん達さっき、「リノアちゃんに手を出そうとした罰だ」と言ってリク宛に大量の書類を嫌がらせのように届けさせてたもんな～。

「おま――っ」
慌てて私の元へ来たリクはテーブルか椅子にぶつかったのか、鈍い音と痛みを訴える声が耳に届いた。

「大丈夫？」
「……平気だ。それより、お前結婚だぞ？結婚！！」
そんなに大声で言わなくても聞こえるのに。

私は小さくため息を吐くと、ポットへとお湯を注ぐ。
そして、テーブルの上にあった砂時計に手をかけた。
さかさまにした真っ白の砂がさらさらと零れ、時間を刻み始める。

「でも問題が解決すれば、離縁するって話だよ」
だから、別にバルト様でも良かったんだけど。
バルト様にうちの息子にしてくれないかって言われて……

「結婚の事は内密に処理するらしいわ。でも、その方がいいかもね。リク、女の人いっぱいいるからバレるといろいろ面倒だし」
だから、ごく一部の人達しか私達の結婚は知られない。
ただの紙切れにサインしただけ。
そこには愛も何もない。ただの契約。

「今からでも良い、断れ。こんなことお前一人で決めていいはずない。バルト様からバーズ様に内密にご連絡を取って貰い、お伺いを立てた方がいい」
「今さら無理だよ」
えっと、あとシュガーポットとスプーンと……
銀のトレイを持ちまた違う棚に移動しようとしたら、両肩をロイに掴まれてしまい、身動きが取れなくなってしまう。

「ちょっと、ロイ。紅茶の蒸す時間って大事なの！！」
「今はお茶なんてどうでもいいだろ！！それよりも結婚の方が大じ――」
ロイの説教タイムはそこで終わった。
それは突然メイド室の扉が開いたから。

「……え」
私とロイの視線の先にはみつあみ姿のメイドがいる。

あ、ミミさんだ。
彼女は私とロイを交互に見ると、なぜか顔を赤くして「ごめんなさい」という謝罪の言葉を残しまた扉を閉めてしまった。

「ちょっと待て。まさか、この状況を……」
「勘違いしちゃったんだろうね。私とロイが出来ているって」
結婚って単語出てたし、ロイ説教しようとしてたから、やたらシリアスモードだったし。

「なんでそうなるんだ！？」
「さぁ？それより、追いかけて口止めしなくて良いの？ミミさん、かなりのゴシップ大好きだからすぐに広まるよ。ロイがメイド室に忍び込んでメイドを口説いてたって」
「忍び込んでないだろ！！お前が忙しくて手が離せないって言うから、こうしてしゃべっていただけだぞ。それなのに口説くなんて――」
ロイは頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。
あれもしかしてロイ、好きな子でもいるの？
だから勘違いして欲しくなくてそんなに落ち込んでいるのかも。

「……俺、騎士団に入れなくなる。せっかく試験受かって入ったのに」
「恋愛ごと禁止だっけ？」
「違う。そう言う事じゃない。ただ、噂の相手がお前なのが駄目なんだよ」
「何、レベルが低いって言いたいの？失礼ね」
口を動かしながら、ちゃんと手を動かす。
別に私は噂なんて気にしないし。
それに仕事をこなさないと溜るし、なにより紅茶が冷めてしまう。

「違う、逆だ逆。お前はかなりの人気なんだ……絶対皆騙されてるって。リノアは、顔だけだっていうのに」
「失礼な」
そんなにはっきり本人の目の前で言うか？
あ、でもうちの騎士にもそう言えばそんな事言われたような。

「俺とお前が友達だと知られた時の反応ですら、大変だったのに。どうすればいいんだよ、俺」
「そんなのちゃんと誤解といてあげるわよ」
「本当か！？」
ガシッと両手を握られ、キラキラと目を輝かせたロイと目が合う。
うわ、すげぇ犬みたい。
尻尾作ってあげようかな。

「うん。そのかわり、今度の休みに買いものに付き合ってね」
「あぁ。何買うんだ？」
「ん～、お酒とハーブティー。ほら、もうすぐ私の『誕生日』でしょ？効かないと思うけど、一応ね……」
あの忌々しい記憶が薄れる事はない。
消えて欲しいのに。

「シド呼ぶか？」
「ん～、大丈夫。今、シド動かすとあっちに私の事気付かれちゃうかもしれないし。それに、これ以上うちの騎士団長に迷惑かけれないもん」
「シドは迷惑だと思ってない。それに騎士は主のために働くのが仕事だ」
「とにかくいいの。平気だから」
私はロイに微笑むと、温めていたカップのお湯を捨てた。

出来ればずっと来ないで欲しい。
でもその日はもうすぐやって来る。
一年で最も私が嫌いな日が――

閑幕　王子と謎の訪問者　その１

あのじじぃ共め。毎日欠かす事なく俺の元に送り続けているなんて、どんだけ暇なんだよ――

俺は机の上にある二つの積み重なった書類を忌々しく睨む。
それはもうすっかり見慣れたものだった。
ここ一週間ばかりずっと送り続けられる雑用の書類。
それは元老院からの嫌がらせともとれるものだった。
こんなの俺じゃなくても出来るはずなのに、なぜわざわざ俺に寄こすのか？
理由は言わずと知れた事だ。

それは俺がシルクにメイドを辞めさせ、無理やり囲おうとしたという噂が広まったせい。
理由も知らない連中達によって俺は一躍悪役へと仕立て上げられ、シルクの事を気に入っている連中達や各棟のメイド長及びメイド達を一時敵に回した。

じじぃ共もそうだ。
あいつらもシルクの事を気に入って、孫娘のように可愛がっている。
シルクに「様づけなんて他人行儀じゃないか。おじいちゃんって呼んでおくれ」と言って「おじいちゃん」と呼ばせているそうだ。
他人行儀も何も貴族とメイドだし、他人だし。

しかし、想像しただけで寒気がしてくる。
元老院にいる奴らは由緒ある貴族の古株連中。
そのため頭が固すぎる生真面目連中なのに、目じりを下げてシルクを可愛がっているなんて……――

俺には風当たりキツイくせに。
この間の俺の議会での発言なんて、根拠がないから根拠を出せとかそんなわかりにくい説明だと伝わらないとか散々言いたい放題だった。

――この書類明日に回してそろそろ寝るか。

俺はランプに息を吐きかけ室内の明かりを消すと月明かりをたよりに扉に手をかける。
さっき見上げた闇夜は綺麗な満月だった。
どうせまた明日には新しい嫌がらせの書類が届くんだろう。
深いため息を吐くと、勝手に扉が開いた。
誰だ？

「お、いるじゃんか」
扉を開けたのは、見ず知らずの男だった。
銀色の長い髪に美しい造形をした顔。
一見女に見えなくもないが、喉ぼとけや骨格などから男だと判断する事が出来る。

誰だ？この派手な男は……

着用しているマントの下の衣服には宝石が一緒に縫われているらしく、煌びやかというか悪趣味というか、とにかく目立つ。

「もしかして、俺の美しさに見とれているのか？」
俺が黙っている事に対し、その男が髪をかき上げそんな事をほざいた。
なんだ、この自意識過剰男は。
たしかに美形だが、自分で言うか？

最初冗談で言っていると思ったが、本気だと言う事は男の次の言葉でわかった。

「まぁ、わかる。俺は美しすぎるからな」
こいつ、鏡があったら何時間も自分を見つめているタイプだ。
「……お前は何者だ？うちでは見かけない顔だな。まさか、その派手な格好で族や暗殺者と言うわけではあるまい」
「あぁ、そうか。『この格好』では初めましてだな」
男はマントを軽く退け、腰元を見せる。
するとそこには、あの女の愛剣が下げられていた。

閑幕　王子と謎の訪問者　2

「なぜお前がこれを持っている？」
自分の腰に下げていた剣に手をかけ、男の反応を見た。
すると、男はそんな俺の様子を見て奴は喉で笑う。

「まだわかんねぇの？――これ俺（マギア）」
「そんな戯言信じるか。剣が実体を持つなんてあるはずないだろ」
「戯言ってね……悪いけど、俺をその辺の剣と一緒にしないでくんない？俺はあのお方が創りし物」
マギアは俺をよけると、室内へと入る。
そしてソファへと体を埋めた。

「あのお方……？」
俺は扉を閉め、マギアとは反対側の席へと座る。
「もしかして知らないのか？シルクの旦那のくせに？」
「偽物のな」
俺はそもそも愛だの恋だのという感情は持った事がない。
俺が今関係を持っている女達も割り切って付き合っている奴らだ。
誰かと深くかかわるなんて面倒。

……だったんだが、なぜか俺はシルクを匿ってしまっている。
普通ならこんな厄介な話、即刻親父に押しつけるのに。
それなのに自ら首を突っ込んでいるという、異常事態だ。

「偽装結婚って言ったって知っておけよ。自分の嫁の事だろ。あのお方というのは、精霊王・ツェルドラード様だ。俺はあのお方が、最愛の姫君を守るために創られた剣。姫は剣なんて使えないからな。護衛の騎士を付けるしかない。だがあのお方はルチル様を寵愛なさ

っていたので、人間の力だけじゃ信用がおけなかったらしく、俺を他の精霊同様姫の護衛に加えた」
「どっかのメイドをする庶民的な姫は剣を振りまわすが？」
こいつが本当にマギアなら、こいつの主は姫なのに剣を使う。
しかも口が悪いし、気づけばあいつのペースになっている。
誰かあいつに慎ましさというものを教えてやって欲しい。

「……あれは別だろ。別。お前、あの暴走女を姫のカテゴリーに入れるなって」
マギアは声を大にして言った。
暴走女って、お前の主だろうが。
わかるなら、少しなんとかしろよ。

「普通の姫は剣なんて持てないから、俺が今のような姿でお守りしていたんだ。今は力が弱っていて実体を常に持つ事が出来ない。だが今日のような満月の時だけは、こうして一時的だが実体を持つことができるんだよ」
「あぁ、今日は満月だもんな」
窓からは見事な満月が雲に隠れる事無く、地を照らしている。

「だからこうして挨拶に来たんだ。せっかく動けるんだからな。あと、それから宝石貰いに」
「は？」
後半は何だ、後半は。
マギアは本体の剣をテーブルの上にのせた。
そして一か所を指差す。

「ほら見てみろよ。俺の本体。魔石無くなってるだろ？あいつバーズ様に誰かと結婚させられそうになってさ～、途中でこれ使ったんだよ。こんなんじゃ、俺の美しさが半減するだろ」

「結婚？あいつが？」
急に胸が締め付けられるような感覚に陥ったかと思うと、今度は真っ黒の黒い感情に襲われる。
あいつが俺以外と結婚だと？
誰だがわからない相手に俺は、苛立ちを覚えた。

「へ～。なんだ、そういう事」
マギアは俺を見て、口角を上げる。
そしていきなり笑い始めてしまう。

「なんだ？」
「ん～、芽が出たんだって思っただけ。頑張れ。かなり振りまわされるから」
「何言ってんだ？」
「その内わかるさ。まぁ、うちの姫をよろしく頼むよ」
そう言ってそいつは目を細めまた笑う。
その意味に俺が気づくのはこれからまだ先の話。
俺がシルクの事を自覚した時だ。

第十九幕　忙しさの原因

え～と、後はゲストルーム3室。
それからリクの執務室に寝室、それにメイド室。
雑巾やほうきなどの掃除道具を持ちながら、私は綺麗になった室内から早足に出た。
各部屋の掃除が全て終わったら、今度は洗濯担当の人達に回収したシーツや衣類などを渡しに行かなければならない。

「あ～、温泉行きたいな～」
だって肩は凝ってるし、足はパンパンだし。
少しは体を労わって、休息したい。

そういえば、ギルアって温泉地ってあるのかな？
お城の大浴場も悪くないんだけど、やっぱ温泉がいいよね。
ほら、なんか疲れ取れそうじゃん。

近くにあるかな？もしあるなら、次の休みにでも行きたい。
あ、そうだ。リクに後で聞いてみようっと。

「リノアっ！！」
その声にすっかり温泉でいっぱいだった頭が、すっきりと霧が晴れたかのように仕事モードに切り替わる。
振り返るとそこには、膝に手を当てて息を切らせたメイドが立っていた。
あれ？ササラさんじゃん。

「どうしたんですか？何かありました？」
「大変、リノア。フリージア様が、あんたを指名してんのよ」

「フリージア様ってたしか、第二姫の？」
「そうよ。あの我儘姫」
フリージア＝ギルア。
この国の第二姫で、リクとは腹違いの妹。
リクとスレイア様は正室で、それ以外の方達は側室の子らしい。
私はまだお会いした事ないんだけど、城内の噂話を聞くとあまり宜しくないんだよね。
まぁ、所詮は噂話レベルだけど。

「指名って、もしかして専属のメイドとしてですか？」
「そう言う事」
ついこの間、フリージア様付きのメイドが一人を残し全員辞めた。
一気に辞めるなんて前代未聞だって思ってたけど、前にも何度かあったんだって。

「私、一応リクイヤード様の専属って形を受けているのですが……」
専属って言っても、お茶入れとかしかしてないけど。
だってメイド長が、リク優先にして良いからこっちも手伝って欲しいって言うんだもん。

「そうなのよ。リノアは王子専属なのに。それにそもそも専属の掛け持ちなんて聞いた事ないわ。うちらリノアに抜けられると困るのよ。西棟なら西棟内で変わりのメイド決めればいいのに、東棟巻き込むなっうの」
「たしかに、一人でも抜けるとキツイですよね」
メイド達は、北・東・西・南・中央の五つによってわけられている。
棟は階に関係なく各メイド長がその管轄を仕切っており、人手不足を補うヘルプもその棟ごとに行われるのが普通だ。
だけどフリージア様の専属の人がいっきに４人も辞めてってしまった上に、パーティやお茶会などのイベントの準備のためにますます

人が足りない状況になっていた。
そのためここ数日私達の忙しさが加速している。
うちの棟からも他棟や西棟に穴埋め応援としてヘルプを出しているので、通常業務にシワ寄せが来のだ。

「メイド長は何と？」
「今、各棟メイド長を集めて会議中よ」
「……そうですか」
会議中なら今姫様の所に行くより、後で結果が出てから移動した方がいいわよね。
それに私も仕事が山ほど残っているし。

「――あ、あのっ」
「え？」
突然かけられた声に私とササラさんは、視線をそっちに向ける。
するとそこには顔色の少し悪い女の子が立っていた。
黒い長い髪は一つにきっちり結われ、全体的に見て年はわたしより三つぐらい下の１５歳前後のように見える。
彼女の着ている衣服は私達と同じメイド服なんだけど、唯一違うのはブラウスのリボンの色。
黄色は、西棟だ。

「リノアさんですよね？」
彼女の吐き出す言葉は消えてしまいそう。
疲れきっているのか、なんか彼女を纏っている空気が弱々しい。
誰だろう？この人。
私は首を傾げ彼女見ながら返事をした。

第二十幕　我儘姫と従順メイド

こりゃあ、メイドも辞めるわ……
ばらばらに散らばっているティーカップにソーサー、それに紅茶が染み一部分だけ濃く滲んでいる絨毯。
私はそれを見て一人納得していた。

「お茶がおいしいと聞いていたのに、たいしたことないわね」
窓辺に置かれた椅子に腰をかけている少女は、ぽってりとした唇で言葉を紡ぐ。
ウェーブがかった栗色の髪に、まだ少女らしさを感じる丸みをおびた輪郭。
そして私を映し出しているラベンダー色の瞳。

彼女が噂のフリージア様。
年は１３歳で、リクとは３つ違うらしい。
リクの妹っていうから美姫だと思っていたけど、違っていた。
華やかさはなく、いたって普通の我儘娘って感じ。

「何ぼうっとしてるの？早く片付けなさい」
「申し訳ございません」
私はその視線を受け止めつつ、頭を下げた。
本来ならばすぐさま片付けるんだけど、この時はすぐに動けなかったのだ。

――いやだってまさか、こんな絵に書いたような嫌がらせ受けるなんてさ～。

このティーカップを割ったのは、フリージア様。

紅茶を出したら、口に合わないとカップごと床に捨てられてしまったのだ。
おかげで割れたカップの片づけと絨毯の掃除という、二つの仕事が一気に増えてしまった。

は～、勿体ない。別にカップ割る必要ないじゃんか。
それに、絨毯の掃除って大変なのよね。
染みにならないように、素早く落とさなきゃならないし。
愚痴りたい気持ちをこれも仕事だとぐっと抑え、箒を持ってくる前に大きい破片だけでも片付けようとしゃがむ。

「エール。貴方は新しいお茶を」
「畏まりました」
フリージア様の言葉に返事をして頭を下げたのは、姫の傍で控えていた長い黒髪を一本に結っているメイド。
彼女はフリージア様付きのメイドで名前がエールさん。
年は１４歳。

さっきササラさんと一緒に居た時に呼びに来たのは彼女だ。
彼女の目の下にはクマが出来ており、時々辛そうに眉間に皺を寄せ目を閉じているのを何度か見ている。
唯一最初の配属から姫の傍に残っている貴重な一人だ。
だから疲れきっているのかもしれない。
彼女以外辞めていくし。

大丈夫かなぁ……？
本人は大丈夫って言ってたけど、顔色が青を通り越して土色になっている。
リクかメイド長に言って医者呼んで貰おうかな。

＊　＊　＊

やっぱエールさん、見て貰った方がいいと思うんだけど。
さっきメイド長に言って医者呼んで貰おうか？って聞いたら、余計な事しないで下さいと断られた。
姫のお世話をする人が誰も居なくなっちゃうからって。
ヘルプで数人入っているはずなんだけど、一日で配属願いを出すらしい。

専属メイドの仕事ってって寝室掃除から主の着替えの手伝いだけじゃなく、姫が主催するお茶会など多岐に及ぶ。
そのため通常3～5人ぐらいが平均だ。
フリージア様付きのメイドは数日前にエールさん以外全員辞めてしまっていから、エールさんが全て自分で取り行っているそう。
だからきっと休みもまともに取ってないのかもしれない。

他の人達、辞めるなら新しい人決まってから辞めて欲しかったな。
……まぁ、あれが毎日続くのが嫌っていうのもわかるよ？
それでも仕事としてちゃんとやらなきゃならないとは思う。
そうみんな頭では分かっているんだけど、感情があるから上手くいかないのかもしれない。

私もムカつく時あるもん。
ギルアではないけど、アカデミーの研修中にあった。
それでもなんとか波を立てず、やんわりと笑顔で交わしてたっけな

〜。
仕事終わった後、枕を気分が晴れるまであのムカつく貴族だと思って壁に叩きつけてたけど……
遠い昔の記憶に想いを馳せていると、すぐ傍にある階段からトントンと降りて来る足音が聞こえてきた。
顔をそちらに向けると、エールさんが階段を下りて来ている。

ギリギリだな。
やっぱ無理やりでも医者に見て貰った方がいいよね。
エールさんは足元がおぼつかないのか、体が不安定だ。

「エ――」
彼女の具合の悪さに声をかけようとすると、彼女の体が大きく揺らいだ。
そのため言葉が途切れてしまう。
嘘でしょ！？

「エールさんっ！！」
手にしていた箒と塵取りを手放し、私は急いで階段を駆け上がる。
間に合って！！
なんとか彼女を抱きとめる事に成功したけど、重力と重さによりそのまま二人とも倒れ掛かってしまった。
やばい。共倒れになる……

「――っ」
足と体全体で態勢を立て直そうとするが無駄なあがきとなり、結局私は体に強い痛みと衝撃を受け、意識はそこでフェードアウトしてしまった。

第二十一幕　ある意味似たもの同士

……――シルク。
浮遊する意識の中で遠くから聞こえて来るのは、必死で私の名前を何度も叫んでいる声。
それが誰の声なのかは、少しずつ覚醒していくにつれて確信をおびていく。
ゆっくり瞼を開けると、やっぱり想像していた人物が目に飛び込んできた。

「――……リク」
やっぱそうだ。あの声はリク。
彼の顔にはいつもの無表情が消え失せ、何か不安な事があるのか眉を下げ青い瞳を揺らしている。

「シルク！！」
リクの瞳は大きく見開かれ、珍しく大声で叫んでいる。
どうしたんだろう？
あまり見た事ないリクの様子に、起き上がろうと体を動かそうとした瞬間、リクが行き成り私に覆いかぶさるようにして抱きついて来た。

……って、えぇっ！？な、何事っ！？

急にそんな事をされ、動けなくなるのは当然。
過去いろいろなブラックな修羅場潜って来たから、ある程度肝は座っている。
そんな私だけど、さすがにこれには慌てふためく。
それは当然。

だって、なんでリクが私のこと抱きしめるのっ！？

誰か状況を！！
室内に感じる他の人の視線に見回すと、私を囲むようにしてバルト様もロイが立っていた。
この時になって、私は初めて室内に他の人達がいる事を知る。
二人とも私と同じように目を大きく見開き、私というよりはリクを見つめている。

ちょっ、ロイ！！これ何！？
目でロイに会話をしかけると、ロイはそれに気づきぶんぶんと首を振った。
わかんないの！？じゃあ、バルト様は？
バルト様を見ると顎に手を当てて、「まさか、こんなに思った通りいくなんて」とかなんとか呟いている。
もう駄目だ。二人共あてになんないじゃん。

「あのさ、リク。一体どうしたの？」
「……良かった」
耳元で囁かれるリクの声と頬や首に当たる髪がくすぐったく、思わず笑ってしまいそうになる。
ちょっと髪だけでもいいから退いてくれないかなと、手でリクの髪を撫でる様にして梳く。
うわっ、こいつすげぇ髪サラサラじゃん。

「本当に良かった。お前の意識が戻って」
「あ～。私、途中で気ィ失ったからな～」
エールさんを抱きとめようとして失敗。そして、一緒に階段から落下。
……ってとこまで覚えてる。でも、そっからまったく記憶がない。

鈍い痛みを感じで最後そこでフェードアウトしちゃったもんな。
「なんでお前はそういつも言い方が軽いんだ！！意識不明だったんだぞ！！しかも3日間も。その間俺がどんな思いだったかわかるか？」
リクは私から体を離すと私の肩に手をおき、揺さぶりながら声を荒げる。
その鬼気迫る様子を見て、理解出来た。
こいつすごく心配してくれたんだ。

「ごめん、心配かけて。私、怪我もあんましなかったし平気」
ただなんとなく見るのが嫌で見てないが、右腕は負傷している。
他にあるかわかんないけど、右腕だけは少しでも動かすと痛い。
それに布団に隠れてわかんないけど、何かに固定されているみたい。
これ、骨いったな。

「もう大丈夫だから。ありがとう、リク」
笑みを浮かべリクに微笑むと、リクは顔を顰めた。
はぁ？なぜそういう反応をする？
そう思った私の反応は正しかった。
なぜならその後リクは、理解不能な言葉を発したのだから。

「……俺、なぜお前の心配したんだ？」
「はぁ？」
さすがにその言葉に室内にいたリク以外の全員がハモった。

「お前が意識不明と聞いて、大げさに聞こえるかもしれないが世界が終わったように感じたんだ。それからお前に目覚めて欲しくて片時も離れたくなくてずっと傍で呼びかけて。お前が目覚めたら、神に感謝した。神なんて信じてなかったのに……――俺、どうしたん

だ？」
いや、どうしたって聞かれてもむしろこちらが聞きたいんですけど？
そりゃあ、さすがに心配するだろ。
それに対し何を疑問に思っているかわかんないよ。

「なんかよくわかんないけど、別に疑問に思う事ないんじゃない？
普通、心配するでしょ」
私だってリクが怪我したとか聞いたら心配するって。
もちろん、それがロイだって同じ。
自分が知っている人が怪我したとか聞いたら、普通心配するさ。

「そうか、そうだよな。今までこのような事感じたことなかったが、
普通だよな」
「そうそう。あんま深く考えることないって」
私の言葉にリクは納得したのか、頷いた。
たぶん、今まで怪我した人とか周りにいなかっただけだって。
もしかして、リクってもしかして天然なのかなぁ？

「なんで王子は納得なさるんですか！？シルクもシルクで、お前も
気づけよ！！」
叫ぶというか嘆くというか言葉を発すると、私達を見て頭を抱える。
「は？何が？」
「ロイ、どういう意味だ？」
私とリクはロイを見つめる。
なんなのよ？一体。
私達が首をかしげていると、バルト様はお腹から笑ってそれを見て
いた。

第二十二幕　こっそりと

退屈だなぁ～。
私は窓際に椅子を持って行きそこに座りながら、ぼーっと窓から中庭にある庭園を見つめている。
中庭ではちょうど薔薇が満開で、見ごろを迎えていた。

こうして景色を見るのも嫌いじゃない。
でも、これを何時間もっていったら苦痛だ。

なんか、じっとしているのって性に合わないんだよね。
左手でも仕事出来るのに、駄目だって言うんだもん。
私は右腕を骨折しているため、リクや他のメイド長に仕事を禁止させられているので暇なのだ。
ほらでもさ、骨折してもタオル畳んだりとかできるって思わない？
それなのに許可下りず、メイド長に仕事を回して貰えない。

「ひ～ま～だ～っ！！――……ん？」
叫びながら足をバタつかせていると、後方にある扉から控えめなノックをする音が聞こえてきた。
誰だろう？またお見舞いの人かな？
もしそうなら、出来れば手ぶらの方が嬉しいんだけど。

部屋中元老院のおじいちゃん達からのお見舞いの品物で溢れかえってしまっているため、広いゲストルームが狭くなり始めている。
中にはまったく知らない貴族や騎士の人からのもあった。

その品物のほとんどがお菓子や花束。

もちろんお菓子や花などはメイド仲間や女官さん達に御裾わけ済み。
だけど、やっぱ増えちゃうんだよね。
気持ちは嬉しいけど、お返しの額を考えるとちょっと困惑する。

「どうぞ」
私が声をかけても、室内に入ってくる気配がまったくない。
あれ？もしかして気のせい？
たしかに聞こえたって思ったんだけど……

不審に思った私は扉の方に行くと、取手を持ち引く。
するとそこにはフリージア様が一人で立っていた。
扉が開くと思わなかったのか、驚いた顔を見せると俯きだした。
共も着けずにどうしたんだろう？

「これはフリージア様。どうなさったのですか？こんなところで立ち話もなんですから、お入りになって下さいませ。すぐにお茶を用意いたしますわ」
取りあえず部屋に招き入れようとするが、彼女は首を横に振ると、何かを小声で呟くように言った。
なんて言ったんだろう？
その声は小さすぎて私の耳には届いてこない。

「申し訳ありません。聞きとれなかったので、もう一度お願いしてもよろしいでしょうか？」
「だから。お見舞いに何を送れば良いのかって聞いてるのですわ！！ちゃんと聞いてなさいよ！！」
「お見舞いですか……？」
なぜ急に？
ほんの数秒間止まった頭が回ると、納得した答えが出てきた。
あぁ、もしかしてエールさんにか～。

エールさんの体調はだいぶ回復したそうだけど、まだ本調子ではないそうだ。
過労の他に風邪も引いていたらしく、熱が昨日下がったばかりだそう。
そのため、まだ部屋で休んでいる。

「そうですわね。一般的な答えとしては、お花やお菓子などですかね。あと、本人の好きな物とか。ですがフリージア様の気持ちがこもっているものでしたら、きっとエールさんも御喜びになりますわ」
「だっ、誰がエール宛てだと言ったのよ！？私はただ聞いただけですわ」
顔を真っ赤にさせて抗議しても、今なら可愛いと思ってしまう。
しかしなんで彼女はエールさんに対しての優しさはあるのに、他のメイドにはないのだろうか？
もしかしたら、ただの我儘姫って感じじゃないかもしれない。

「そうだわ。フリージア様」
「なんですの？」
「もしよろしかったら、私と一緒に買いに行きませんか？」
「買いに行くって何処に……？」
「――もちろん、街に決まってますわ」
「ま、街にですって！？」
呆気にとられるフリージア様の気持ちもわかる。
だって許可下りるかわかんなし。
それに、護衛の関係もあるからね。

だが、そんなフリージア様に私はにっこりと微笑みを浮かべた。
許可が下りないなら、脱走すればいい。
さてそうなったらルートは『あの道』を利用させて頂かこうかしら？

護衛はそうね……マギアとやっぱり――

第二十三幕　リクの居ぬ間に

「ここは一体何処なんですの……？」
フリージア様はキョロキョロと辺りを見回している。

フリージア様の緩やかな栗色のウェーブのかかった髪は二つに結わえられ、いつも身に纏っている華やかなドレスじゃなく、今回はメイド服を着用していた。
顔バレしているため変装させるにも限界があったので、もういっその事と思い私がメイド服を着せてみたのだ。

だってまさか姫がメイドするなんて思いもしないじゃん。
私達もそうだけど、貴族なんかのメイドもお使いなどでメイド服で街に出るから別に珍しい光景じゃない。

もちろん、最初はフリージア様も猛反対。
こんなもの着れませんわってブチギレ。
でも、「エールさんのためですよ？」の一言にぶつぶつ言いながら着替えてくれた。
可愛いとこもあるんだよね。フリージア様。

「ここは中央教会の地下ですわ。御覧の通り、あまり使用されてませんけど」
辺りを見回しながら、私はそう告げた。
私達の周りには、重なった木箱やロープ、それから長年使ってない事が一目でわかる古びた椅子などが置かれている。
煉瓦作りの室内は少しでも動くと埃が舞う状態。
はっきり言って、掃除をしてやりたいぐらいのレベルだ。

ここに箒とちりとりと雑巾あったら、完璧に元通りになるように掃除するのに！！
仕事のせいか、掃除したくてうずうずする。

「中央教会ですって……？」
「えぇ」
ここ中央教会はその名の通り、城下町の中央に位置する大きな教会。
メイン通りにある上に建物と広大な敷地のため、ギルアに住んでいれば知らない人は誰もいないというぐらい有名。

「まさかあの離れの塔が、ここに繋がっているなんて誰も思わないだろうな」
騎士服に身を包んでいるロイは、床にある隠れ階段を見ながら呟く。
彼は今回非番だったため、護衛がてらに連れてきた。

ロイは最初予想通り、最初は大反対。こいつ堅物だし。
ちゃんと上に報告しなきゃ駄目だと言い始めた。
でもちょうどバルト様もリク不在だったので、無理やり連れてきたのだ。
しかし、リク居なくてちょうど良かった～。
だってあいつに許可願っても、絶対許可おりないもん。
バルト様なら条件付きで許可下さりそうなのに。

「だろうね。でも城だから、あっても不思議じゃないよ」
城には避難用に抜け道を作っている場合が多い。
ギルア城にもあって、私達はそれを利用してここまでやって来たのだ。

今回は中央教会に抜けるルートを使わせて貰った。
この隠し通路の事は、元々はオリンズ様に教えて貰ったのだ。

オリンズ様は隠し通路の存在を城内探検と称し遊んでいるうちに見つけ、いつしか街に脱走する用に使用していたそう。
だから誰の目にもつかない間に脱走出来たため、いつも発覚が遅くなったみたい。
私がバルト様に報告するまで、バルト様もその存在しらないぐらい使用されてなかったから、リクはきっと知らないはず。
今度から城から抜け出したくなったら、ここ使おうっと～。
リク外出すると護衛つけろとかうるさいんだもん。

「さて、さっさと参りましょう。リクが戻るまでに城に戻らないと……――」
私たちは限られた時間のため、さっそく街に行く事にした。

＊
＊
＊

すごい。やっぱ品ぞろえが違うわ～。
私はすっかり目の前に並んでいるそれを見て、テンションが上がっていた。
前後を棚に挟まれ、それぞれの棚には瓶が数十種類飾られている。
棚一つでこれだけだから、店のもの全てを合わせれば数百種類にも及ぶかもしれない。
それは花を乾燥させたものや茶葉。
お茶の他に使用法としては、単品で薬として使用されるものそれから料理などにスパイスとして使用する。

ここは城下町にある、ノアというお茶専門のお店。
フリージア様はエールさんのお見舞いに、お茶を買う事に決めたそう。
そこでロイにこの街で一番大きいお店に連れて来て貰ったのだ。

これならどの国の商品でもあるかもしれないな～。
もしかして、ハイヤードの物もあるかしら？
後で探して買って帰ろうっと。

「フリージア様。ありましたか？」
「こんなにいっぱいあって、探せると思ってますの？」
苛立っているのか元々口調が強いのに、今はそれより強くなっている。
そうだよね、時間限られてるし。やっぱ探すの無理か。
なら――

「おじさん～」
私はカウンターにいる店主を呼ぶ。
見つからないなら、場所を聞けば簡単。
私の呼びかけに、ぽっちゃりとしたおじさんは本からこちらに視線を移すと、人の良さそうな笑顔を浮かべながらこちらにやって来てくれた。

「お嬢ちゃん達、何かお探しかい？」
「はい。えっと……――何をお探しになっているんですか？」
隣りのフリージア様に伺うと、「マッシェ」と答えた。
何？マッシェって？
私とロイは、聞いた事のないお茶に首を傾げるけど、一方の店のおじさんはそれに対し「おや、マッシェかい。珍しいね」と呟いてた。

「ずいぶん珍しいの知っているね。もしかして、シャルダン出身かい？」
「……えぇ」
フリージア様は、目を少し伏せ弱々しく頷く。
あれ？フリージア様シャルダン出身って言った？
てっきりギルアで生まれたと思ってたのに。

第二十四幕　勝手に応援団

へ～。リクってこういうの読むんだ～。意外。
私はソファに座りながらテーブルの上に重なっている数冊の本に手を伸ばすと、
一番上にあった本を取り膝の上に乗せた。

盗賊グリードとリリアン姫。
これは2・3年前に流行った恋物語の本。
私は読んだことないけど、読んだ人に聞くとかなり砂吐くぐらい甘いらしい。
でもそこがいいらしく、アカデミーでも女の子達の間で流行ったっけ。

この本以外にもテーブルに重なっている本のタイトルをざっと見るかぎり、どれも恋物語の本ばかり。
一冊だけだと思ってたのに、全部って……リクってもしかして恋物語マニア？意外すぎて顔がちょっと引き攣る。
いや、別にいいんだけどさ。なんていうか、女遊びする私生活なのに純愛の恋物語って矛盾してない？

「言っておくけど、俺のじゃないからな」
「え？」
体を斜め後方に向けると、この部屋の主がペンを止めこっちを見ていた。
じゃあ、誰のなんだろう？こんなに大量に。
数冊ずつ重ねられている本が、三つずつ分けられ執務室の中央を陣取っているテーブルの上に乗っている。

「メイド長や女官長が持って来た」
持ってきたって事は、オススメだから読めって事じゃん。
でもよりによって、選んだのが恋愛系って。
しかもメイド長や女官長が？
ますます意外すぎ。
常日頃、主とは節度ある距離感をとるようにが口癖の仕事一筋の人達なのに。

「なんでだろうね？」
「知るか」
「聞けば良かったじゃん」
「聞いたに決まってるだろ。よりにもよって持ってきたのがアレだぞ？あいつら『これを読んで良く勉強なさって下さいませ』とだけ言って去って行ったんだ。一体何を勉強しろと？」
リクは私の所まで来ると、反対側にあるソファにドガッと乱暴に座る。
そして本の束を忌々しそうに見つめ顔を顰めながら、また一旦閉じた口を開く。

「……これが関係しているからなのか、最近メイド達の様子がおかしい」
「そうなの？全然わかんないや。リクの気のせいとかじゃなくて？」
メイドの仕事はお休みしていても、私が療養するために借りている部屋にみんな様子を見に顔を出してくれている。
その時も普通に話しているけど、おかしい様子なんて微塵もない。

「気のせいのわけあるか。『頑張って下さい。東棟メイド一同応援してます』とか言われるんだぞ。
今まで気軽にメイドが俺に声をかけてきた事があったか？ないだろ。
俺は使用人とそんな気さくな関係じゃないからな。それなのに急に

あいつ等はどうしたと言うんだ？その上頑張れって何を頑張るんだ？」
「仕事とかじゃないの？」
だってそれ以外他に考えられないし。
まぁちょっとリクと他の使用人の距離感を考えると、違和感はあるけどさ。

「いいじゃん。応援してくれてるんだし」
「お前、人ごとだとお――」
リクの声は扉をノックする音で途切れてしまう。
舌打ちをすると、リクは「入れ」と入室を促す。
その声に「失礼いたします」と言って、扉を叩いた人物が入室してきた。

「リノアっ！？」
そう私の名を叫ぶように言ったのは、メイド仲間のササラさんだった。
彼女はメイド服を着て、ティーカップとポットがのっている銀のトレイを持っている。
カップは２つ。
もしかして、スレイア様が？
私と入れ違いにスレイア様がいらっしゃったので、メイドにお茶を持ってくるように頼んだのかもしれない。

マズイ。非常にマズイ。
私は顔を俯かせた。
どうしよう……
メイドがこんな気軽に主の部屋でくつろぐって事はまずありえない。
それは身分的に出来ないから。
それなのに、私はやってしまっている。

こうなったら、濁してフェードアウトするっきゃない！！
バレたらメイド長のお説教どころの話じゃないもん。
私が口を開きかける前に違う人が言葉を発してしまい、私は口を閉じてしまう。

「リクイヤード様。こんな所でお茶なんてムードも何もないですわ！！薔薇園ですわよ、薔薇園」
「は？」
私もリクもササラさんの言葉に思わず声が重なる。
てっきり怒られると思ったのに。
そんな呆気にとられる私達をよそに、ササラさんはテンションが高く今にもトレイを放り投げそうな勢いだ。
……ごめん、リク。前言撤回。やっぱ変だわ。

「そうと決まれば、リノア。そんな格好してないで早く着替えないと。そうね、ほらサミ侯爵様に頂いたドレスあったじゃない？あのピンク色のドレス。それから、リウル伯爵様に頂いた髪飾りと、靴。リノアは綺麗だからお化粧しなくてもいいけど、せっかくなんだしお化粧もしましょう！！」
うきうきと楽しんでいるササラさんをしり目に、リクは眉間に皺を寄せ機嫌が悪い。

「ちょっと待て。お前、あの元老院のじじぃ共に貢がせてんのか？俺にはドレスや宝石は要らないって言ったくせに？」
「違う……います。あれは元々はおじいちゃん達のお孫さん達の物ですわ。サイズを間違えて買ってしまったらしく、捨てるには勿体ないから私にと」
危ねぇ。ササラさんがいるのに、いつもの口調になる所だったよ。
私はいつもリクとは砕けた話し方をするけど、それは他に人が居な

い時。
いてもロイ達事情を知っている人の前だ。
それ以外はちゃんとメイドとして接している。

「あのじじぃ共はお前が可愛くて作ったんだ。考えてもみろ、採寸してサイズ間違えるか？」
「あ」
そうだ。貴族令嬢やお姫様って採寸してオーダーで作って貰うんだった。
私、いつも既製品ばっか買っているからすっかり忘れてたっ！！

第二十五幕　王子、メイドに敗北宣言？（前書き）

ちょっと長めです。
話の都合上切れなかったので。

第二十五幕　王子、メイドに敗北宣言？

「あの～」
なんで私、こんな格好しちゃってるんですか？
私はそれが聞きたくて、鼻歌を歌いながらドレッサーの前にいるササラさんに声をかけた。
彼女はさっきまで使用していた櫛や化粧道具を片付けている。

私は、ただ今サミ侯爵つまり元老院のおじいちゃんに頂いたドレスを着用中。
何も着たくて着ているわけじゃない。
あの後リクの部屋からササラさんの手により連れだされ、強制的に着替えさせられたのだ。
しかも普段しない化粧もされ、髪飾りも着けられて。

お姫様や貴族令嬢は普通の格好かもしれないけど、仕事以外の時はワンピースを愛用中の私にとってはちょっと窮屈。
だってワンピースの方が膝上で動きやすいし、洗濯だってしやすいしじゃん。
それに私、じっとしてるの嫌いだから動き回るし。

一応こんなんでも身分的には私も姫。
だけど姫生活なんて七歳までしかした事ないからドレスなんて着慣れてない。
だからはっきり言って普段のワンピースに着替えたくてしょうがないのだ。

「大丈夫よ、ちゃんと似合ってるって」
「いや、私が聞きたいのはそうじゃなくて……――」

「綺麗よ、リノア。これであのリクイヤード様もますます」
グフフ……と奇妙な笑い声を上げながら、口元に手を当ててササラさんが笑っている。
その様子はちょっと、いやかなり怖かった。
思わず、2・3歩後ずさるほどに。

＊　＊　＊

もしかして似合わないって思ってるのかな？
茫然と立ち尽くし、私を見つめているリクを見ながらそう思った。
私の姿を見た瞬間、座っていた椅子から急に立ち上がってしまったため、リクの足元にはテーブルと御揃いの白く塗られた鉄製椅子が倒れている。

私はそんなリクをあまり気にせず、辺りをゆっくり見回した。
しかし、本当に見事な薔薇だわ。
私達を囲むようにして生えている薔薇に、私は感嘆のため息をあげた。

大輪の花に、色鮮やかな色彩。風が運んでくれる華やかな香り。
こんなに素敵な薔薇園のお茶会は嬉しい。

「リクイヤード様。リノアが綺麗で魅入るのは理解できますが、一先ず御座り下さいませ」
テーブルの近くに配置させているワゴンの前に立っていたミミさんはそう言うと、
倒れた椅子を直しリクに座る様に促す。

「……誰がリノアなんかに魅入るか」
ササラさんの言葉にリクはそっぽを向きながらそう答えると、椅子に座った。
その頬がわずかに色づいているように見える。

「さぁ、リノアも」
「ありがとうございます」
ササラさんに椅子を引いて貰い、私もリクに対面するように席に着く。
着席するとミミさんによって、紅茶の入ったカップとキラの実のタルトがのった皿がテーブルの上にのせられていく。

「薔薇綺麗ですね。私、切り花以外で見たの初めてです」
「お前、薔薇が好きなのか？」
「えぇ。でも薔薇も好きですが、花全般が好きです。そう言えば、ギルアの隣国のサーザは華の国と伺いましたわ」
ロイに聞いてずっと行ってみたいって思ってたんだよね。
でも馬車使っても日帰りだと結構キツイし。
まとまった休み取れたら、絶対に行きたいっ！！

「王子。聞きましたか？リノアは花が好きですって。この流れに乗じて渡しましょう」
「そうですわ。机の引き出しにずっと閉まったままなんて、花が枯

れてしまいますよ」
「なんだ、お前ら突然。あれは枯れないように特殊加工されてあるから、別に閉まっていても大丈……――って、何でお前らがそんな事知っているんだ！？」
リクがソーサーにカップをぶつけるように置いたため、カップから紅茶が波打ち零れてしまった。

あ～あ。
立ち上がり新しいソーサーかタオルを取りにワゴンの方へ行こうとしたが、ミミさんに手で制されてしまう。
そうだった。私、今仕事中じゃなかったんだ。
それにドレス汚れると大変だ。自分のお給料じゃ買えないし、シミ抜きが。
メイドとしての習慣でつい体が勝手に動いてしまったが、私は処理をミミさんに任せ、大人しくまた椅子へと座りなおした。

「嫌ですわ。リクーヤード様ったら、私達メイドですのよ。情報網ならある程度あります」
「……お前ら、メイドじゃなく間者にでもなったらいいんじゃないか？雇うぞ」
にっこりとほほ笑むササラさんに、リクは頭を抱えている。
なんか良くわかんないけど、こういうリク見るのも面白いかも。
なんか振りまわされている感がさ。

タルトを食べながらそんな三人の様子を見ていると、足元で「にゃ～」と猫の鳴き声が聞こえてきた。
ん？
視線を右下に向けると、エメラルド色の瞳と目があう。

「――お前はっ！！」

足元にいたのは、黒いふさふさの毛をした子猫。
首輪の代わりに首に細身の赤いリボンが巻かれている。
私がそう叫ぶと子猫は、「にゃ～」とまた鳴き逃走を図った。

まさかあの男、ギルアに来ているなんて！！

急いで立ち上がり追いかけようとしたんだけど、運悪くドレスの裾をふんずけてしまい、体のバランスを崩しかけてしまう。
やばっ。私は激しくドレスを着た事を悔んだ。
だから嫌なのよ！！
左手一本で体を支えるのを覚悟し咄嗟に目を瞑った瞬間、頭に最悪の結果が浮かんでくる。
まさか、運悪く両腕骨折か！？
あぁ、私のメイド復帰がますます遠ざかっていく。

「あれぇ？」
自分でも間抜けな声が出たと思う。
だって私の体は芝生の上じゃなかったんだもん。
おそるおそる目をゆっくり開くと、誰かの服が視界に入ってくる。
それが誰かは降りかかってきた声ですぐに知ることができた。

「このバカ。また怪我したらどうするんだ！！」
「リクっ！！ありがとう」
どうらや私はリクに抱きとめられたらしい。

「子猫が欲しいなら言え。無理して追いかけるな」
「違うよ。猫が欲しかったんじゃないってば」
あれは――
私がまた口を開く前に頭上から聞こえてきた「キャー」という悲鳴に近い黄色い声により、話を中断せざるを得なくなった。

「何時の間に……」
私とリクの声は見事に重なった。
私達二人の視線の先は、城の建物に向けられている。
そこでは東棟のメイド達が城の窓から身を乗り出し、「ナイスハプニング」など言いながら私達を見ていた。
みなさん、仕事はどうしたんですか？今、たしか忙しいはずですよね？

「リノア、これ説明しろ」
「ごめん。寧ろ私も聞きたい」
そんなメイド達を見て怒鳴り散らすかと思ったリクだけど、自分で処理できない範囲の出来事が重なったせいか、私の首筋に顔を埋めるように深く項垂れてしまった。

第二十六幕　姫君と猫の盗賊

気が付けばここに居た。
たった一つの蝋燭を持って。

何処？ここ……

辺りを見回すが、私がいるのは闇に支配された空間の中。
真っ暗ではなく、ほんのわずかだが足元を照らす分には問題ないぐらいの明かりがあるのが幸いだ。

その空間では、何かをひっかくような耳障りな音がひっきりなしに耳に届いてくる。
私はその原因を探るため、手元の明かりを頼りにその音の元となる方向に歩み寄って行く。

人……？
するとそこに居たのは、扉の前に座り込んでいる一人の少女の後ろ姿だった。
元々の色なのか、それとも汚れてしまったのか、わからないようなくすんだ色のドレスを身に纏っている。
彼女の無造作に伸ばされた手入れがなされていない長いの髪が、動きと共に揺れ動く。

「――けて」
離れていた時には気付かなかったが、彼女は何かを呟いているよう。
耳に入ってくるのだけでは聞きとれず、もう少し近づいて聞くためにしゃがみこむ。
その時だった。

完全には聞こえなかったその声は、何の予兆もなくしだいに大きくなったのは。

「助けて。誰か助けてよ！！ここから出して！！」
彼女は狂ったかのように泣き叫びながら、扉を爪で引っ掻いている。
爪先はボロボロになり、扉には無数の爪後が残っていた。

その声は最終的には悲鳴に近い叫びで耳に届いてくる。
聞いている私の方が、胸を締め付けられるぐらいに悲痛に。

「助けて。父様、母様、ラズリっ！！」
あぁ、これは――
それが何なのか分かった瞬間、何者かの気配によって私の世界は急速に反転した。

「あれ？自分で起きちゃったの？うなされているようだから、起こしてあげようと思ったのに」
まず最初に瞳を開けて視界に飛び込んできたのは、昼間の猫と同じエメラルドグリーンの瞳の少年。
彼は全身を覆うようなダークグリーンのフードを被っている。

目覚めて飛び起きるぐらいの悪夢だったんだけど、それが出来ないのはこの男のせいだ。
なぜなら私の首元にそいつによって鈍い光を放つナイフがぴったりとくっついているから。

その上こいつは不躾な事に、ベットに仰向けで眠っていた私に馬乗りになっている。

……最悪。

悪夢もこの状態も。

私は深いため息を吐くと、その少年を睨む。

「勝手に人の寝込み襲わないでくれない？――『リザー』」

その声に私に馬乗りになっている奴は、おどけるように肩を竦めるとフードを外す。

するとカーテンの隙間から入ってくる月明かりにより、彼の端正な顔がすべて照らされた。

耳が隠れるぐらいの長さの黒い髪に大きなエメラルドグリーンの瞳、そしてはっきりとした鼻立ちに、何が楽しいのか常にあげられている口角。

「もしかして寝起きで機嫌悪い？それともずいぶん顔色が悪いしうなされてたから、悪い夢でも見てたから？」

「お前には関係ない。いいから退け」

「酷いな～。久しぶりの再会なのに。っていっても、昼に一回あったから正確には久しぶりってわけでもないけどさ」

こいつがここにいるって事は、ロイ達捕まえる事出来なかったのか。お茶会の後こいつがギルアに来ているってロイに連絡したから、騎士たちが見回ってるはずだったんだけど……

「知るか。それより重いから退けってば」

「相変わらずキミ、口悪いね。せっかく綺麗な顔してるのに。実に残念だよ――ハイヤードの姫」

「良いから退けなさいって言ってるでしょ！！」

私は自分の寝ている左側に置いてあるマギアを取ろうと、手を動か

す。
何かある時のために、私はマギアを寝るときは常に傍に置いて眠っている。
これはもう癖のようなものだ。
今みたいに寝込み襲われる事もあるし。

「――なっ」
私はマギアを掴み取る事が出来なかった。
手を動かして掴んだのは剣の堅い感触じゃなく、ノリの効いたシーツのごわついた感触。

先を越されたか。
時すでに遅かったらしく私の視界には、ふわふわと空中に浮いたマギアが入っている。
これは『猫の盗賊』リザーの魔力によるものだ。

猫の盗賊というのは、世界中を騒がせている盗賊。
盗む物は過去の魔女狩りによって滅んだ『ログ家』のゆかりの品物ばかり。
それ以外は盗みをすることはなく、人に危害を与える事も絶対にしない。
ログ家の紋章は猫が杖を持っている図柄。
そのため人々は、彼の事を猫の盗賊と呼んでいた。

「魔法使うなんて卑怯よ！！私使えないんだから！！」
そう、こいつは魔法を使う。
そのため魔法が使えない私では圧倒的に不利。
精霊がいるラズリや魔法使いのハイネならこいつとなら戦えるけど。
せめてマギアがあって、右手が動けば勝算はあったかもしれないのに。

「ごめんね。これ魔石埋め込んでいるし、それにマギアも厄介だから捨てさせて貰うよ」
リザーがそう言うと、そこには誰も居ないはずのにカーテンと窓が勝手に開け放たれてしまう。
その上宙に浮いたマギアが窓の外まで移動したかと思うと、今まで浮いていたのが嘘のように重力に逆らわずに外に落下してしまった。

「ちょっ！？なんて事してくれんのよ！！あいつすっごく煩いんだからね！！」
「だってせっかくだし、ゆっくり話したいじゃん。僕、聞きたい事あるし」
「私は無いんだけど？」
あ～っ、もうマギアどうすんのよ！！
落として傷なんてつけようものなら、怒られるっうの。
まぁ、刃物同士ぶつけても傷なんてつかないぐらい頑丈だけど。
でもあいつはナルシストの自分大好き人間だから、大切に扱えとかうるさい。

美しい自分大好きだから、繊細に扱えって口うるさく言うし。
自分を美しく見せるために元々ついてなかった魔石をマギアに埋め込んだのも、マギアからのリクエストからだったしね。
魔石の美しさなら、「自分をもっと綺麗にひき立てられるはずだ」とかなんとか言ってさ。
あ～、絶対後でごちゃごちゃ言われるじゃんか～。

第二十七幕　リノアとリノア

一人の少女が窓辺に腰をかけ、ティーカップ片手に月夜を眺めている。
雲間から差し込む月の光がこの世界に彼女以外居ないと思われるプラチナの髪を、柔らかく包みこみ輝きを放っていた。

その夜着とショール、私まだ着たことなかったんですけど……
彼女が身に纏っている夜着や羽織っているショールは、私がこの間町に行った時に買った新品。
しかも値段がちょっと高めで買うのを迷った代物だ。

だから大事に着ようと思って取っておいたのに～。
こんな風に着られるなら、とっとと着ておけばよかったわ。

「月を見ながらお茶会っていうのも悪くない。ねぇ、キミもそう思わない？」
エメラルドグリーンの瞳を細めながら彼女は、極上の笑みを私に浮かべ同意を求めてくる。
その瞳もさることながら、ついつい彼女の首元に惹かれ目がいってしまう。

それは花のチョーカー。
紐の部分はベルベット調のリボン、中央には大ぶりな青い花に小さい数本の真っ白な花、そして淡いピンクに染めた鳥の羽根で出来た飾りがある。
これは私の私物じゃない。
一体これをどこで……？

「思うはずないでしょうが」
そんな彼女に対し、私は顔を歪め毒づいた。
いや、気持ち悪い以外感想出ねぇし。

「その姿辞めてくれない？なんか自分がもう一人いるみたいで気持ち悪くてしょうがない」
私は抗議の意味を兼ねて椅子をガタガタと揺らし、窓辺に座っている彼女――魔法で私の姿をしているリザーに向かって言った。

今すぐ胸ぐら掴んで元に戻れと言いたいが、椅子に体を紐のようなものでぐるぐる巻きにされて、固定されているためそれが出来ない。
一応骨折している腕を外して固定してくれているという気遣いは見せてくれてるみたいだけど。
そんな優しさがあるのなら、最初っから寝込み襲ったり椅子に縛り付けたりしないで欲しい。

「何そんなにイライラしてるの？お茶でも飲んで落ち着きなよ？キミの分ちゃんとあるでしょ。ほら、菓子もあるし」
たしかにテーブルには、私の分のカップとお菓子の乗った皿が置いてある。
だが、この状況で飲めるはずがない。

「これでどうやって飲めっていうのよっ！？」
「ん～。僕が冷まして口うつし？」
「飲めるかっ！！」
まったくなんでこいつは、いつもいつもこうなのよ？
彼の掴みどころの無さが私の調子を狂わせる。

そもそもこの騒ぎに誰も気付かないってどうなの？
オリンズ様の脱走の件も踏まえ、つくづくこの国の警備に問題があ

ると思うわ。
大抵どの国でも宮廷魔術師雇っているはずだから、魔力には敏感のはずなのに。
……もしかしてリザーの奴ってば魔力消してるの？
だとしたら最悪のパターンだ。
朝方誰かが呼びに来てくれるまで、この身勝手お茶会続いちゃうじゃんっ！！

「縄解いて」
「まだ駄目。ねぇ、それより知ってる？この青い花リノアって花なんだよ」
優しく包みこむように花に触れ、リザーは私の傍まで来るとしゃがみ込んだ。
「へ～。奇遇ね。私の偽名と同じじゃん」
私は奴と会話しながらなんとか縄抜けを腕を動かそうとするが、まったく外れる気配がない。
もうこうなったら多少乱暴になっても良いっ！！
そう思い腕を動かした結果、腕が外れそうになりやばいと思い動きを止める。
だ、脱臼するかと思った……

「うん。だからきっと彼はこれを選んだんだと思うよ」
リザーは着けていたそのチョーカーを外すと、それを私の首に結び始める。
生花だったらしく、華やかな花の香りが漂ってきた。

「うん。キミの方がやっぱ似合う」
いや、私の方が似合うって同じ顔だから。今。
「これどうしたの？」

「ん？これね。リクイヤード王子に貰ったんだ。ほら、さっき僕メイド室にお茶取りに行ったでしょ？あの時王子がまだ起きて仕事しているって聞いてね、執務室に行って来たんだ～。せっかくだから会っておこうかなって思ってさ。ねぇ彼、いつもこんなに遅くまで仕事してるの？」
「ちょっと！！まさか、その姿で行ったんじゃないでしょうねっ！？」
リザーは数分前、「お茶のみたくなっちゃったから、とってくるね」と私を縛りお茶を取りに行っていたのだ。
「もちろんこの姿だよ。まさか、僕の姿で行けっていうの？不審者で捕まるじゃん」
リクも夜勤のメイド達も気づいてよ～っ！！
誰一人として気づいてないなんて、ちょっと悲しいんだけど。
きっとおかしくも思われてなかったんだろうな。
誰も様子を見に来ない所を見るとさぁ。

たしかに一見わかんないと思うよ？
でもさ、目の色確実に違うじゃんか。
これでもわかんなかったなんて言われたら、さすがに凹む。

「ねぇ。キミ、ハイヤードの人間だよね？『イザラ様』って誰？」
「イザラ？」
脈絡のない上に、思わぬ名に眉を顰める。
なんで『堕ちた精霊』の名を？
彼女の名は、ハイヤードでも滅多に聞く事はないぐらい知名度が少ない。
それなのに、この男から聞くなんて――
「知っているけど詳しくは知らないわ。マギアなら知ってると思う」

「マギアかぁ……今、彼は話せないよね。いいよ、キミの知っている事だけ教えて」
「私達の中では、堕ちた精霊って呼ばれている。彼女は闇の精霊で、精霊界を裏切った上に人を操り人間界を滅ぼそうとしたって教えられたの。だから彼女は精霊王に封印され、禁忌の精霊となったって」
「へ〜」
リザーは何やら難しい顔をしながら、私の話を聞いている。

「でも、どうして知っているの？彼女が載っている文献はバーズ様が所持している一冊のみだし、王族や神官達などの限られた人間達のあいだでしか口承もされていないはずよ？」
「ん〜、それは内緒」
そう言ってあいつが唇に人差し指を当てた時だった。
タイミングよくノックをする音が響いてきたのは。

第二十八幕　姫君、忘れ去られる

「シルクが二人……！？」
返事がなかったのを不思議に思ったのかそれとも待てなかったのか、入室許可を出してないのに扉が開けられ男が入ってきたんだけど、この光景を見て中途半端に扉を開け放ったまま動きを止めている。
彼の視線は左右に動かされ、目の前で起こっている不可思議な現状を把握しようと私と私に変装しているリザーを見比べていた。

あれ？リクだ。
どうしたんだろう、こんな時間に。
私は首を傾げて扉の所にいる男――リクを見つめた。
深夜に人の部屋に来る用事なんて思い浮かばない。
しかもリクはなぜか片手にワインボトルを抱えているし。

いろいろと疑問は浮かぶけど、私は頭を切り替え自分が取るべき動きを考える。
だってリクが来てくれたから、この状況から逆転出来るかもしれないじゃん。
ほら、一人より二人って言うしさ。

これで朝までリザーとお茶会の可能性が無くなるかもしれない。
リクに拘束を解いて貰い、リザー捕獲出来るじゃん。
リクの出現で私の心はちょっと浮上してきていた。
だが、次のリザーの言葉とリクの反応にその浮上は海底へと沈められる。

「リクっ！！ちょうど良かった。人を呼びに行こうって思ってた所なの」

……え。
偽者の私から出されたその声に、顔が引き攣る。
リザーが変えたのは声だけじゃない。
いつの間にか瞳の色まで私と同じにしている。

冗談じゃないわ。こいつの思いのままにさせてたまるかっうの。
リザーが何を考えているか私にはすぐにわかった。
――こいつ、私になりすます気だしっ！！
リクに伝えて阻止しようと口を開くが、それが音となることはなかった。
なんで声でないの！？リザーの奴、魔法使いやがったな！！
苛立つ私をリザーのウィンクが余計苛立たせる。

「あのね、猫の盗賊って知ってる？」
「あぁ、ログ家ゆかりの物ばかり盗むやつだろ。たしか、ログ家の生き残りの王子だって言われてるな」
リクはこの状況に最初は戸惑った物の、そう口を開く。

「そいつが私に変装して部屋に忍びこんできたの。だから、捕まえちゃった」
――やっぱな。
想像通りの展開に私はうな垂れた。

大体、なんでリク気づいてくれないのよ？
まだ月日が浅いとは言え、リクとは毎日顔を合わせる。
だから気づいてくれてもいいのに。

「お前な、あんまり危ない事するな。そういう時はすぐに人を呼べ。仮にも姫だろうが。怪我してないだろうな？」
「うん、それは大丈夫。ありがと」

歩み寄るリクに、リザーが微笑む。
そんなリクに対し、私は気付いてという意味を込めた視線を送るが全くこっちを見てくれない。
……酷ぇ。こっちが本物なのに。無視かよ。

最低、リクの馬鹿っ！！
今度お茶入れる時、すっごく苦いの出してやるんだから！！
私はリクへの恨みつらみを言葉を発せない分、心の中で吐き出した。
その時だった。「てめぇ、猫目がっ！！」という怒鳴り声と共に、バンッと扉が開け放たれたのは。

「えっ、マギアっ！？」
……あ、声が出た。
扉を乱暴に開けて入って来たのは、銀色の長い髪を靡かせた端正な顔立ちの男。
着用している衣装は目をそむけたくなるような派手なやつで、色鮮やかな宝石なんかか着いている。
そして、腰にはマギアの本体で私の愛剣を携えていた。

マギアは元々人型。
でもそれは古代の神話の時代の話だ。
今ではマギアを作った精霊王の力が弱まり、人型になれるのは満月の夜だけ。
今日は満月じゃないのに、マギアはなぜか人型になっている。
一体どうして？まさか力がもどったの？……まぁ、そんな事は後回していいや。
取りあえず助かったわ。
マギアの登場にほっと一安心した。

「よくもこの俺様を落としてくれたな。俺様の美しさに傷でもつい

たらどうしてくれんだよ！！」
ちょっと待て～。まず私(あるじ)を心配するのが普通じゃない？
それなのに、自分の美しさかいっ！！ナルシストすぎるだろうが。
味方は増えるが一向に助かる気配のないって……
頭を抱えたいが、両腕拘束中のためそれが出来ない。

「俺様を傷物にしょうとした罪、今すぐ償え」
マギアは剣を抜くと大股で部屋に入って来て、リザーに刃を向ける。
だがそれが彼の首元まで届く事はなかった。

「辞めろ、マギア！！」
リクはマギアの攻撃を自分の剣で受け止め、マギアの攻撃を止めたのだ。
あのさ、そいつ偽物なんですけど。

「おい、王子。何でそいつを庇うんだよ」
「偽物はそこに縛られているだろ。少し落ち着け。リノアに攻撃してどうするんだ。切られれば、怪我じゃすまされなくなる所だったんだぞ」
「はぁ？王子何言ってんだよ。リノアはこっちの縛られている方だぞ？」
「……は？」
リクは口をぽかんと開けマギアを見ていたが、やがてマギアに頷かれゆっくりと縛られている私の方へと視線を向けた。
あのさ、一つ言っていい？
気づくの遅いんですけど。

第二十九幕　いや、本人だから

ほんと、いい加減にして欲しい。
なんて言ったって本人が本物って言ってるんだし、第三者のマギアも本物だって言ってるんだしさ。
それにリクの後方にいるリザーはもうすでに術を解き、私の姿ではなく通常の自分の姿をしている。
だから後ろを振り向けば、数秒ですぐにわかるんだよ？

もうすでに白黒はっきりついて、普通なら私が本物だってわかってもいいはずだ。
それなのに本人チェックに余念のないリクはリザーが元の姿に戻った事すら気づかずに、私の顔をペタペタとラインを確かめるように何度も撫でている。

「リク。しつこい」
意味のないチェックに私は心底うんざりしたまま、リクを見上げた。
後ろ見ろよ、後ろ。もう一発だから。っうか、リザー。お前、くつろぎすぎ。
リクの後方にいるリザーは、リクの私に対するチェックが長すぎたせいか、リクの持ってきたワインを空けて飲み始めている。

「ちょっとマギア！！リクの事なんとかしてよ！！」
……って、おい。
助けを求めた肝心のマギアは私の状況なんてどうでもいいとばかりに、蝋燭の明かりで本体を照らしていた。
たぶん、傷を確かめているのだろう。
この状況でも自分大好きかよ……

「よし、傷ついてないな。宝石も魔石も欠けてないし。まったく、俺に傷でも付いたらどうしてくれるんだよ。美しさが半減してしまうじゃないか。しかし、俺ってなんでこんなに美しいんだ？」
自分の体をいたわるように、マギアはうっとりと眼を細めながら、布で自分の本体を磨き上げていく。
今ならリザーの隙をついて捕まえられるかもしれないんですけど。
だが彼はそんな事よりも自分の事の方が優先らしい。

もういっそリクの気のすむまで触らしてやろうかな～。
なんかもうどうでも良くなっちゃって、そんな事を思った時だった。
以外な人物の言葉が私をリクのチェックから助けてくれたのは。

「ねぇ、もうそろそろ離してあげたら？いくらハイヤードの姫に触れたいからってさ、ちょっと触りすぎだと思うよ」
「はぁ！？誰がこいつなんかに触れ……――」
リザーの言葉にリクは後ろを振り向き、固まった。

「――……誰だ、お前。なんで俺がシルクに持ってきたワイン飲んでんだよ」
だからリザーだってば。
やっとこの時になってリクはリザーが術を解いた事に気付いたようだ。

「初めましてじゃないよね。さっき執務室で会ったから」
「……執務室だと？あれはお前だったのか！！やっぱりおかしいと思ったんだ。シルクがあんな事言うわけ無いって！！」
「言うわけ無いって思っても来ちゃったんだ～。こんな高いワインまで持って来てくれて。下心丸出しだね」
「うるさい！！」
クスクス笑うリザーに対しリクは剣を抜きかけるが、まるでリクだ

け時間が止まったかのように動けなくなってしまっている。
あ〜あ、また魔法使ったし。

「体が――」
リクはなんとか動こうとするが、思うように動かない体に顔を歪める。
「王子さ、愛が足りないんじゃない？」
「はぁ？なんだよ、愛って」
「僕ならハイヤードの姫がカエルになったってわかるよ。ねぇ、マギア。キミもわかるでしょ？」
「まぁな。このじゃじゃ馬姫がどんな姿をしても俺はわかる。俺はこいつと血の契約を交わしているからな」
あら、いつの間に。
てっきりまだ自分（本体）を眺めていると思っていたのに。
声がしたと思って視線を隣に移すといつの間にかマギアが立っていた。

「俺だってこいつがカエルになろうが蝶になろうがわかるぞ！！」
「いや、わかんなかったじゃん」
なぜこの二人に対抗意識燃やしてんのよ？
さすがにこのリクの発言に、私達三人の声が重なったのは言うまでもない。

バレンタイン企画　俺の分は？　第一幕め（前書き）

本編途中ですが、企画物です。
バレンタイン過ぎてしまったけど^^；

バレンタイン企画　俺の分は？　第一幕め

謁見や城の行事などのため俺は人よりも見られる事に慣れている。
そのため、他人の視線はあまり気にならないタイプだ。
だがメイド達との距離が微妙に変わったあの頃から、もしかしたら
実はそうじゃないかもしれない
という事をたびたび思い知る。

それは……――

またこれだ。
俺はうんざりしながらその視線を体に巻き付け、いつも通り執務室で仕事をこなしていた。
まったく今度は何だよ！？
うっとおしいその視線が俺の苛立ちを作るのにそう時間はかからなかった。

「おい」
俺は入り口から少し入ったところにあるテーブルで紅茶を準備しているメイドに声をかける。
するとそのメイドは中央にある俺が座っている机の方へと歩み寄って来た。

「はい。なんでございましょうか？」
メイドのミミが軽く会釈をしながら尋ねてくる。
何がなんでございましょうかだ！！
さっきまでニヤついて俺の事見ていたくせに！！

ミミの表情はさっきと違って真顔の仕事モードだ。

「何すっとぼけてんだよ」

「……あら、顔に出ちゃってました？」

出てたも何もはっきりと隠そうともしてなかっただろうが。

まったく、こいつは。

悪びれる様子もないミミに、俺はそっと溜息を吐く。

「だって、今日はバレンタインじゃないですか～」

「あぁ、もうそんな時期か」

月日が経つのは早い。

ついこの間までやれ新年だのと騒いでたのにな。

「嫌ですわ、リクイヤード様ったら。何とぼけてらっしゃるんですか。リノアに貰いましたでしょ？手作りチョコ」

「はぁ？なんでとぼける必要があるんだよ？貰ってないぞ」

「ええっ！？なんで貰ってないんですか！？」

何を大げさな。

ササラの声は廊下まで響くんじゃないかっていうぐらい大きい。

まったく、チョコ一つで騒々しい。

「まだ配ってないんだろ。そのうちここにも配りにくるんじゃないか？」

俺はあまり気にせずにそう答えた。

あいつ律儀だから、こういうイベントなら絶対に周りに配る。

そのためこの時の俺は貰えないという選択肢がなかった。

「いいえ！！リノア今日夜勤なので、元老院の皆さまやスレイヤ様それにスウイ様達には、

午前中のうちにとっくに配っていますわ！！私達も頂きましたし。

ですからリクイヤード様も、もうすでに貰っていると思いましたの……」
ちょっと待て。他の奴らにはもう配っているってことか？
と言う事は、あれか？俺だけ外されているって事か？

「どうしてリクイヤード様だけ貰えないんですか？」
「俺に聞くな」
「リノアったら、もしかしてリクイヤード様にだけあげないつもりなのかしら？何か嫌われるような事しましたか？」
「ミミ。お前、そう言う事は思っていたとしても黙っておけ」
現実受け止められてないのに、他の奴に言われるとまた改めて認識しなきゃならないだろうが。
その後俺は仕事があまり手つかずになってしまった。
リノアにチョコ貰えなかったという、ただそれだけなのに。

バレンタイン企画　俺の分は？　第二幕め

……何をやっているんだ、俺は。
足を止め見つめる先にあるのは、扉。
あれから仕事がまったく進まず、俺は気分転換にと執務室から出た。
そして出て足が勝手に向かった先がなぜかここ。
本当は城の外にでも行くつもりだったのだが。
どうやらそうとう気になるらしく、いつの間にか無意識にシルクの部屋の前へと来ていたのだ。

俺、ここに来てどうすんだよ……
まさか「俺にチョコはないのか？」って聞くつもりなのか？
そんなの女々しい事、本人に聞けるわけないだろうが！！

たかがシルクにチョコ貰えなかったぐらいで、こんなに振りまわされるなんて癪にさわる。
しかもただ仕事が手につかなかっただけじゃなく、元老院のじじぃ共が執務室に襲来してチョコを見せびらかしながら食いだしたりと、面倒な事が次々に起こっていったのだ。
まったく、あのじじぃ共何処で聞きつけたんだよ。
それだけじゃない。その上メイド達からは、やたら憐れまれるし。
はっきり言って皆、俺の事は放っておいて欲しい。

「そもそもなんで俺にくれなかったんだ？シルク」
呟くような声は、扉がすべて吸収してくれた。
こんな嘆き、あいつには聞かれたくない。
シルクの今日のシフトは夕方からの夜勤コース。
だからきっと今は眠っている。

――もう、戻るか。

わざわざ起こすのも悪い上に、聞くに聞けないから今は戻る以外道はない。
それにこんな場面あのメイド達に見られてみろ？
ますます憐れまれるだろうが！！
とっとと誰か来る前に執務室に戻ろう。
そう思い、足を動かそうとした瞬間、俺が恐れていた事態が起こってしまう。

「あっ！！リクイヤード様。こんな所にいらっしゃったんですかぁ～？探しましたよ」
「ほんとだ、いらっしゃったわ」
「私、他のみんなに教えて来るわ。みんなまだ探しているだろうし」
メイド達の明るい声に俺は自分でも顔が歪んだのがわかった。

……最悪だ。

廊下の数メートル先には、ミミを先頭に見知った顔のメイド達が見える。
本日何回目かわからない頭痛のする事態に、俺は現実を恨んだ。
今日はあれか？厄日か何かか？

「リクイヤード様。はい、これどうぞ」
「なんだ？これは」
ミミに差し出されたのは、赤いラッピングされた箱。
手の平にすっぽりと収まるぐらいの大きさだ。

「探すの苦労したんですよ～。私達が貰った分は食べちゃったので、これはバルト様がリノアに貰ったチョコです。今年はリノアから貰

えなかったから、これで我慢して下さい。きっと来年は貰えますって！！」
いやお前ら、気持ちはありがたい。
だが俺はリノアの作ったチョコが食べたいんじゃなくて、リノアからチョコを貰いたいんだが――
だからあいつに貰えるなら別に手作りだろうが、買って来たものだろうが構わない。

「最初はロイ様に頂こうと思ったのですが、ロイ様の分はもうすでに騎士団の方がトーナメント方式で争っている最中だったので無理でした。あの盛り上がりの中に入っていく勇気は私にはありませんでしたわ。それに私達、剣は使えませんし」
「……あいつら、何やってんだよ」
たかがチョコ一つでトーナメントって、大丈夫なのか？
うちの騎士達は。

「しかたありませんわ。あの子、かなりモテますから」
「そうそう。殿方達は皆、隙あらばと虎視眈々と狙ってるのよね～」
「当のリノア本人はまったく気付かないけど。あの子、自分が綺麗な事わかってないから。この間もさ……――」
スイッチの入ったメイド達はいつもの如くおしゃべりが止まらなくなり、俺を放置して井戸端会議を始めてしまった。
そのため幸いな事に絶好の退散状態なのだが、それが出来ない。
なぜならメイド達が盛り上がりすぎて、だんだん声が大きくなってきているのだ。

お前ら、盛り上がり過ぎだ。
ここのエリアは、主にメイド達の部屋が密集している。
そのためリノアだけじゃなく、他の夜勤組も眠っているはずだ。
さすがに止めようと口を開きかけるが、すぐ傍にあった扉がゆっく

り開く音が耳に届き、俺は思わず固まった。

バレンタイン企画　俺の分は？　第三幕め

「あの、夜勤組寝ているのですみませんが少し声を……――って、あれ？リクイヤード様も」
扉から顔を覗かせ、シルクは目をぱちくりとさせながら俺を見ている。
意外な事に、俺らの前に現れたシルクは寝起きではなかった。
たしかにクリーム色の夜着に赤いカーディガンという格好や、銀色の絹のような髪にねぐせがついている事などから寝ていたということは確か。
だが、シルクの表情から直前まで眠っていなかったとい事がわかる。

「どうなさったんですか？」
俺に対しシルクはいつもタメ口だが、他の奴らがいる時は口調をメイドにする。
元々は姫だが、ここではそれを隠しているためマズイらしい。
だから口調を変えると言っていたが、他の姫達より話の口調がくだけすぎだと思うのだが。

「珍しですね、こちらの方にいらっしゃるなんて」
「別に。ただ偶然通りかかっただけだ。もう戻る」
ここに来た理由なんて素直に言えるか。格好悪すぎだろ。
俺は余計な詮索をされる事を拒むために、そう言うとここから立ち去ろうと足を来た道の方へ動かそうとした。
だがシルクの言葉により、俺は地面に足が縫い付けられたように動けなくなる。

「――……　へ～。チョコ貰えなかったから、わざわざ私の部屋まで来たんだ」

「なっ！！」
振りかえるとシルクと視線が合う。
あいつはクスクス笑いながら俺を見ると、背伸びをして俺の頭を撫で始めた。

「リク可愛い～。もしかして自分だけチョコ貰えなくて拗ねてたの？仕事が手につかなかったんだって言ってるけど」
「お前ら！！」
咄嗟にメイド達を見るが、あいつらは首を左右に振りまくった。

「違います！！」
「そうですよ。私達何も言ってないじゃないですか！！」
「じゃあ、誰だよ！？」
「えっ。それは私達にも……ちょっと、一体誰なの？リノア」
メイド達の視線が一点に集中する中、シルクは笑みを浮かべた。

「実は皆さんがこちらにいらっしゃる前に、スレイヤ様がいらっしゃってたんです」
「なんだ～。スレイヤ様かぁ」
メイド達は納得しているようだが、俺は腑に落ちない。
あいつは『言っている』という言葉を使った。
と言う事は、あの時点で誰かに聞いているという事だ。

まさか――

シルクの方を見ると、案の定人差し指を唇にあてているシルクと目があった。

＊　＊　＊　＊

「――はい」
執務室の机にコトッとカップと四角い形の焼き菓子が置かれたのを見て、俺は首を傾げた。
これの何処がバレンタインなんだ？いつもと同じじゃないか。
カップから視線をあげると、さっきとは違いメイド服に身を纏ったシルクを見る。
するとあいつも俺の言いたい事がわかったのか口を開いた。

「リク、甘いの苦手かなって思ってこれにしたの。これハイヤードのお茶とお菓子なんだ～。
お菓子はテラッタっていう果物が入った塩味の効いた焼き菓子で、お茶の方は今の時期しか手に入らない珍しいお茶なんだよ。
ほら、すっごく青いでしょ？」
「あぁ、毒々しいぐらいな」
たしかにシルクがいうように、カップに入っている茶は青い。青すぎる。
これ飲めるのか？と疑問に思う。

「ソーサーの上にある、赤い丸い実あるでしょ？それを絞ってみて」
言われるままやってみると、不思議な事が起きた。
あんなに毒々しいぐらい青かったのに、ほんのりと淡いピンクに変わったのだ。

「色が――」
「ねっ、色変わるの。これリクにも見せたくて、いつもお茶を買いに行っているお店のおじさんにお願いして仕入れて貰ったんだよ」
「俺だけか？」
「うん。やっぱチョコの方がいい？珍しいかなって思ってこれにしちゃったんだけど……」
「いや。俺だけなら良い」
カップに口をつけ飲むと、甘酸っぱさが口の中に広がっていく。
それと同時に何か温かい物が胸に落ちてきた。

「ん～。喜んでるのかなぁ？よくわかんないよ」
「は？お前急に何を……っておい、まさか――」
辺りを見回すが俺には姿が確認出来ない。
以前オリンズの件で見た時は鳥の姿をしていたから見れたが、普段はシルクやハイヤードの王族しか見る事は出来ないため、存在を確認する事や気配すらわからない。

「おい！！もしかしてさっきの事もそいつに聞いたのか！？誰なんだよ！？一々お前に言ってる奴！！」
「その子いつもリクと一緒にいるよ。普段は無口でおしゃべりしてくれないんだけど、今日初めて話しかけられちゃったから嬉しかった」
「俺と一緒だと？」
「うん。あっ、私もう仕事戻るからもう行くね」
「おいっ！！」
教えて行けよ……
扉から出て行くシルクを止めるが、あいつはもう室内から退室してしまった。

その後精霊の見えない俺は、身につけているルビーのピアスや剣など精霊のやどってそうな物に「余計な事話すなよ」と話しかける姿がメイド達に目撃され、今度は違う意味での変な視線にさらされる事になるとはこの時の俺は知らない。

第三十幕　発言の波紋

「おいしいっ！！」
手にしているワイングラスを見ながら、私は感嘆の声を上げた。
葡萄の渋みと深いコクがほのかに口の中に広がっていく。
私ワインって数えるほどしか飲んだ事ないけど、これは今までで飲んだ中で断トツにおいしい。アルコールは滅多に飲まないし、飲んだとしても甘い果実酒ばっかりだけど、今度からワインも飲んでみようかしら？

「ねぇ、もうちょっと飲んでいい？」
その問いかけに、テーブル越しのエメラルドグリーンの瞳が笑った。
「いいよ。どんどん飲みなよ」
そういってリザーは、私のグラスへとワインを注いでいく。
私はリザーのペースに乗せられ、リザーと一緒に月を肴にワインを飲んでいた。
最初はなんでこの状況で！？って思ったけど、こんなおいしいワインが飲めるならたまには流されるのも悪くないかも。
ん～。チーズとかも欲しいなぁ。
とってこようかなって思ってたら、不機嫌そうな声が飛んできた。

「――おい！！お前らそれ俺のワインだぞ！！」
「あ」
すっかり忘れてた。
飲むなと言われる前に残っていたワインを飲み干すと、私はその声の主を見る。

そこに居たのは、リク。
リザーの魔法により行動を制限されているリクは、自由を求めなん

とか体を動かそうともがき続けているが、それはただ体力を奪われるだけだ。
経験者は語るってわけでもないけど、そんなに力をいれてもしょうがないんだよね。
だって魔力の無い者に魔力を打ち破る事など出来ない。
しかもこの猫の盗賊の魔力は強く、もし魔力があったとしても勝算はないもの。

「何それ～。一国の王子がそんなにケチケチしていいの？一般市民に対してもっと広い心を持ってもいいんじゃない？」
リザーは立ち上がるとリクにゆっくり近づいて行く。

「何が一般市民だ！！盗賊だろうが！！」
「盗賊はどっち？あれらは元々代々ログ家に伝わる家宝。１５０年前に魔女狩りと称し、勝手に人の国に攻め込んだのは誰？僕はただ返して貰っているだけ。だから盗賊じゃないよ」
「……お前、本当にログ家の生残りの王子だったのか」
「うん、そうだよ。だから――」
「うわっ！！」
急に肩を抱かれ、私は立っているリザーにもたれ掛るようになってしまう。
もうなんなのよ？私はリザーを睨んだ。
だが、リザーの視線はリクに向いている。

「もし仮に姫と僕が結婚したとしても身分的には問題ないよね」
「はぁ？なんで結婚？」
あまりの唐突な話にまったくついていけない。
なにこいつ、酔っぱらってんの？

「それに触るな。俺のだ」

「なに、その物扱い」
リザーに同意。私、リクのものじゃないし。
「俺のを俺のと言って何が悪い。お前、もう帰れよ！！」
「うわ～。せっかく来たのに、もう追い出すの？少しは招いて歓迎してくれても良くない？」
「いいから帰れ！！」
「そんなに大声出さないでよ。周りに聞こえないように結界張ってるけど、うるさくてかなわないじゃん」
「誰のせいだ、誰の」
「も～。そんなに僕の事追い出してハイヤードの姫君と二人っきりになりたいの？そんな風に下心で頭いっぱいだから、暗殺者につけられてるのにも気づかないんだよ～」
「はぁ！？こんな女に下心なんて抱くわけないだ……っておい、ちょっと待て」
さらりと重大発言をしたリザーに、私たちの空気が変わった。
『暗殺者』って、リザー言ったわよね……？
リクがつけられたって、もうすでに城に侵入者がいるって事になるはず。
「何この沈んだ空気。大丈夫だよ。今は『彼女』は飼われて、どうやら『監視者』みたいな役目をおっているみたいだから――」

第三十一幕　いろいろ未消化のまま残る疑問

王族や貴族に生まれれば、命を狙われるのも不思議じゃない。
やっぱり王位継承争いとかいろいろあって、邪魔者を闇へ葬ろうと暗殺者などを使い暗殺を企てるケースがある。

もちろん私も何度も暗殺者に襲われたり、食事に毒が混ぜられたりした。
私の場合は、銀の悪魔（わたし）の存在を邪魔に思う連中にだけどね。

だからリクが狙われても不思議ではない。
ギルアぐらいの大国なら余計だと思う。
だけどその分、普通なら警備を強化したりしてなんらかの対策を打っているはずだ。
それなのにまさか、侵入されていたなんて――

「安心していいよ。彼女は城下町の外れまで転送魔法で飛ばしてあげたから。僕、覗かれるの好きじゃないもん」
「それでその暗殺者とやらは、どっちを狙っているんだよ。うちのじゃじゃ馬姫かそれとも王子か？どうせお前の事だから、もう探っているんだろ？」
「うん、もちろん。だって気になるじゃんか。大方この異常事態を、飼い主に知らせると思ったから、最初から使い魔を彼女に尾行させたんだ」
猫目は残ったワインを飲み干すと、またボトルからグラスへと注いだ。
結構なシリアス展開なのにまだ飲むのか、お前は。
「結論から言って、二人共今すぐ命狙われるとかそういう問題ない

と思うよ。ただし、この国にとって邪魔になる存在になったら話は別だけどね」
「国？国って、ギルアのことなの？」
「うん。――ってもう王子は気付いたようだね。誰が飼い主なのかを」
リザーの言葉を聞いて、リクの方を見るとなんか機嫌悪そう。
眉間に皺寄せてむすっとしている。
その飼い主とやらが、誰なのかわかったのかしら？

「おい、王子。誰なんだよ？」
マギアも私と同じ考えだったらしく、リクに問う。
「心配しなくても、あいつらはシルクを気に入っているから問題ない。大方、俺がシルクの部屋に行くからつけてきたんだろ。……迂闊だった。まさか、あいつら『影』の他に『監視者』まで使っているなんて」
「へ～。キミ、彼らに好かれてるの？すごいね。あの彼らを手なずけるなんて」
リザーの視線を受けながら、私は首を左右に振る。
いや、そんな聞かれても知らないって！！
っていうか、その監視者とやらの雇い主は一体誰なんですか？

「ねぇ、リク」
「お前は知らなくていい。この事は忘れろ」
「はぁ！？」
忘れろだと？いや、無理でしょ。
その後も押し問答が続いたけど、全然口を割ってくれなかった。
リクがこんなに頑なに口を割らないのは、もしかしたら私の身近な人なのかもしれないって思う。
思うって言うか、リザーの話とリクの話を合わせると確かな真実だ。

「優しいんだね、王子は」
リザーは口元を綻ばせながら目を細めてリクを見つめたかと思うと、ゆっくりと今度はリクから私の方へと視線を向ける。
その視線はほんの数秒にも満たない物だったかもしれないけど、私には数分に感じた。
そのあまりの視線に耐えられなくなり、私は口を開く。

「なに？」
「……ううん、なんでもない。そろそろ帰ろうかなって思って」
少し寂しそうに笑ったリザーに、私はなんだか妙な感じがした。
それはリザーが彼らしくない表情を見せたからなのかもしれない。

「ねぇ、マギア。少し僕に付き合ってくれない？聞きたい事があるんだ」
「俺？まぁ、いいけど」
「じゃあ、姫。マギア借りて行くね」
「え。あ、うん」
私が返事をすると、マギアとリザーの足元に魔法陣が光を発しながら浮かびあがってきた。
リザーが来た時は捕まえる気でいたんだけど、今はなんかその気がなくなっている。
どうしたんだろう？なんか、胸がざわめく。

「――リクイヤード王子。その子……ハイヤードの姫から離れないで。姫の事気をつけて見てあげていてね。じゃないと、キミは死ぬほど後悔するよ」
「おい！！それどういう……――」
リクの言葉が全て紡ぎだされる前に、リザー達は転送魔法で消えてしまった。
後に残されたのは、私とリクだけ。

なんか急に静かになったなぁ～。
二人っきりになってみると、静寂がやけに気になる。

リザーってば、ほんと何しに来たの？
猫のように気ままなリザーの行動についていくら考えてもわからない。
しかもマギア連れて行くし。
というか、そもそもマギアは何で実体化なってんの？
今日満月じゃないのに……――って！？

さっきまでリザーとマギアが居た場所を眺めていたのに、急に強い力に腕を引かれ視界が変わってしまう。

「ちょっと！！何っ！？どうしたの！？」
私はなぜかリクの胸の中にいた。
背にリクの手が回され、痛いぐらいに抱きしめられている。

これは俗に言う、抱擁ってやつじゃ……？
リザーもわかんない奴だけど、リクもわかんないよ～っ！！

間幕　おじいちゃん閃くっ！！　前編

「若造！！貴様、よくもわしらの可愛い孫娘のリノアちゃんを危険な目に合わせておきながら、のうのうと良くわしの前に顔を出せたな！！しかも『メルティ』の報告では、真夜中にリノアちゃんの部屋に訪れたとか。年頃のしかも嫁入り前の娘の部屋に、そんな時間に入るとはなんたる事じゃ！！」

煩いのが来た……

勢いよく扉が開いたかと思ったら、老人が杖を振りまわし怒鳴りこんできた。

あまりの激しさに被っていた黒いシルクハットが頭からずり落ちるが、構わずに地面を鳴らすようにしてこちらに向かってくる。

「ノックぐらいしろって。あと顔を出すも何も、勝手に入って来たのはじいさんだろ。それに何度も言うが、リノアはお前らの孫娘じゃないだろうが」

俺のため息交じりのその言葉も、その老人には届かない。

むしろ逆に油を注いだのか、ヒートアップしてしまう。

「青二才めが！！口ばっかり達者になりおって！！」

猛禽類のような鋭い目に筋の通っ高い鼻、長い白髭の白髪老人はそう強く言うと、俺の首すじに杖をつきつけた。

「杖をどけろ。とりあえず話は座ってからだ」

――アスラ公爵を見て俺は、手にしていた書類を置き手でソファへと促す。

シルクには猫かぶるが、俺達にはこんなのだ。

今回もノックも無しに俺の部屋に乱入して、貴様呼ばわり。

普通なら処罰ものだが、このじいさんはそれが許される。

それはこの大国ギルアを、そして王族を数千年前の建国以来ずっと支えている五大貴族がいる。
その一つ・ロロアラ家の現当主だからだ。
彼らの作りあげた功績は測りしれないもの。
時代が変わり当主の代が変わっても、この国を支えているという自負と王族に匹敵する権力は変わらない。

ギルアという大国があるのは、裏で動いている五大貴族達の力もかなりあるだろう。
それは国内外の不穏分子を排除するという役割から、各国を繋ぐパイプとしての役割など様々。
いくら大国と言えども、ただその座布団の上にあぐらをかいてばかりでは国の維持出来ないのだ。
だから俺達はこの五大貴族をないがしろに出来ない。
そのため、ある程度の無礼講は許している。

「来るとは思っていたが、まさか一人で来るとはな。他のじいさん達と一緒に乗り込んでくると思ったんだが？」
「事を大ごとにして表に出す気はないからのぅ。他の者は元老院で待機しておる。事が世に広がればギルアに隙があると思われる」
「たしかにな」
じいさんが座ったソファとは反対側にある席に座ると、俺はテーブルの上にあったベルに手を伸ばした。
これから話す内容は人に聞かれないようにしなけらばならない。
そのために人払いをする必要がある。

「人払いのためのベルならせんでもいいぞ。もうさせてある。それに念のため影を数人監視させておるから、誰かが近づけば連絡が入るじゃろ」

「準備いいな」
「当然じゃ」
「まぁいい。深夜の事はもう報告している通り。猫の盗賊がリノアに会いに来ただけだ。そして俺がリノアの部屋に行ったのは、リノアに変装した猫の盗賊のせい」
「猫の盗賊のせいとはどういう事じゃ？」
「……そこにはあまり触れるな。重要じゃない」
話せば長くなるから省くが、簡単に言えば色仕掛けに引っかかったのだ。
しかもあれはシルクじゃなくて、シルクに変装した猫の盗賊だし。
今にして思えば言動がありえなかった。ありえなかったのに引っかかったのは、男の性なのかもしれない。
考えるまでもなく、シルクはあんなに色っぽく男を誘わないしな。
というか、そんなスキルは無いと思うから男なんか誘えないだろう。

「つまりこれ以上話す事がないと言う事か？わしがそれに納得するとでも？」
「納得するも何も話はない。ただ、その件に関してはだが」
含みを持った俺の言い方にじじぃは眉を顰めると、ソファにふんぞり返った。

「他に何があるのじゃ？」
「――……じいさん達に頼みがある」
「ほう。若造が頼み事とは、雨や雪でも降るのかのぅ」
「なんとでも言え」
このじいさん達の情報収集力はギルアで一番だ。
そのため、俺よりもこいつらの方がこの件に関しては向いているだろう。
この件に関しては俺が自分で動きたかったし、じいさん達に借りを作るのは嫌だ。

だが……――頭の中に浮かんだのは、シルクの笑顔。守ってやりたい。

それにはこのじいさん達共の力を借りなければならない。

本来ならしたくないが、重大な秘密を本人の了承なく勝手に話してしまっても――

間幕　おじいちゃん閃くっ！！　前編（後書き）

長いので分けます。

間幕おじいちゃん閃くっ！！　後編

「シルク＝ハイヤード。名前ぐらいは聞いた事あるだろ？」
「わしを馬鹿にしているのか？ディル派でなくても知っておるわい。あのハイヤードの幽閉された姫じゃろ？ハイヤードの王族は皆ハニーゴールドの髪だが、その姫だけは銀色のため銀の悪魔とよ……――」
気付いたのか、じいさんの顔が瞬時に変わっていく。
目を大きく見開きながら俺を見ている。

「まさか、リノアちゃんがシルク姫……？ありえん！！ただ同じ髪色というだけではないのか！？現にリノアちゃんは幽閉なんかされておらんし、あんなに庶民的じゃ！！それにハイヤードの姫が、護衛もつけずにギルアになんているわけがあるまい！！しかもメイドとして働いておるなんて……」
「いや。リノアはシルクだ。言わずともわかると思うがこれは極秘事項だ。シルクがうちにいる事はなぜか、敵方には知られていないらしい」
「まさか……そのようなことが……」
「今は俺と結婚してハイヤード家ではなく、ギルアの人間になっている。もちろんこれはあくまで、あいつに何かあった場合ギルアの人間として守れる保険的な契約結婚だ」
「け、結婚じゃと！？」
さすがのギルアの影の支配者と呼ばれる者も容量を超えた話には頭を抱えたようだ。
深く深呼吸すると、顔を上げ俺を見据えながら口を開いた。
「わしらは、リノアちゃんのウェディングドレス姿を見ておらんぞ！！」

「なんでそっちの方にいくんだよ……あと、テーブル叩くな」
じいさんの抗議に今度は俺が頭を抱えたくなった。

「契約結婚だって言っただろ？式なんてあげるわけないだろうが。知っていると思うが、あいつは忌み嫌われ命を狙われている」
「契約結婚という事は、もしそのリノアちゃんが抱えている問題が解決すればリノアちゃんは帰ってしまうのか……？そんな事になったら、わしらがリノアちゃんと会えなくなるではないか！！年寄りの楽しみ奪うのか！？」
「別に会えるだろ。俺はシルクとの婚姻関係を解消する気はない」
最初の約束で離縁すると言ったが、それは無効だ。
情が移ったのかよくわからないが、俺はあれを傍に置く。
シルクが居ない生活なんて考えられないからな。

「あれは俺のだから手元に置く。シルクがハイヤードに帰るのは一時帰国だ」
「それは若造の気持ちじゃろ。リノアちゃんは帰りたいはずじゃ。時々寂しそうに空を見ておるからな……」
「もしそうだとしても、俺はあれを手放せない。どんな方法をとっても俺の傍に繋ぎとめておく」
「ずいぶんと勝手な事を抜かしおって。リノアちゃんを監禁でもする気か？わしらがそんな事させるわけなかろうが。少しはまともな考えを持て。そうじゃのぅ、たとえばシルクちゃんが若造の事を……――そうじゃ！！その手があった！！」
急に立ちあがったじいさんに、俺は俺は首を傾げた。
なんだ？急に。

「わしは冴えておるぞ！！そうじゃ。ふぉーりんらぶ大作戦じゃ！！」
「はぁ？」

「こうしちゃおれん。元老院に戻って皆と作戦会議じゃ！！これは女子（おなご）の意見も聞かねばなるまい。至急メルティを呼ぼう」
じいさんはスキップをしながら、扉の方へと向かって行く。
かなり機嫌が良いらしく、鼻歌交じりで。
シルクなら「おじいちゃん、今日機嫌いいね」で済ませられるが、俺らは済ませられない。
こんなの恐怖以外ないと思うのは、俺だけじゃないはずだ。じいさんの事を知っている連中だってそう思うだろう。

「ちょっと待て！！話はまだ終わってないぞ！！」
思わず思考がフリーズしてたが、大事な話の最中である事を思い出し急ぎ呼びとめた。

「わかっておる。ディル派及びハイヤードについてじゃろ。調べておく」
俺もシルクの敵について独自で調べているが、まったく何も出て来ない。
人を雇って変に探りを入れても敵に身元がバレてしまう。
そんな事になれば芋づる式にシルクの居場所まで知られてしまうかもしらないので、下手なことはできない。
それで今回こういう事に強い、じいさん達に頼むのが一番だと思ったのだ。

……だが、なんとも言えない不安があるのはなぜだ？

「本当にわかっているのか？」
「わかっておると言っておるじゃろ。あの子は――リノアちゃんいや、シルク姫は良い子じゃ。若人達はわしらを堅物で古臭い口うるさい老人だと煙たがるが、シルク姫嫌な顔しないで最初から接してくれた。じゃからわしらの目が黒いうちは好き勝手にさせんわい！

！若造っ！！情報収集はわしらがする！！貴様はすぐさま男を磨け！！男の魅力をあげるのじゃ！！」

「はぁっ！？」

じいさんは俺にそう言うと、また鼻歌を歌いだし扉の外へと消えてしまった。

一人俺を取り残して。

女に困ったことがないぞ！？それなのに、男の魅力を上げろ？男を磨け？

一体なんだ、それはっ！？

第三十二幕　流れに逆らうも結局流される

たとえば周囲を無数の敵に囲まれたとしても、私は往生際が悪いと言われようが最後の悪あがきぐらいする。
たとえ逃げ場がないとしても。

だって、もしかしたらの可能性があるじゃん？
ほんの少しでも希望があるかぎり、私はここから逃げるために行動するわ。

……敵じゃなく、お仕事仲間からだけど。

前方からじわじわと距離を縮めて包囲して来るのは、メイド長を筆頭にした私のお仕事仲間のメイド達。
そしてその後ろには、おろおろとこちらの成り行きを見守るスケッチブックを持った女性と純白の布を持った女性の二人組。
髪をアップにして緑色のドレスを着ている方が、ドレスデザイナーのキキさん。
そして純白の布を持っているレモンイエローのワンピースを着ている方が、針子のコーアさん。
と先ほどメイド長に紹介を受けた。

たぶん初対面の彼女らに助けを求めたとしても、無駄だろう。
というか、誰かに助けを求めるという事に酷く失望していた。
だって身内がこれじゃあさ～。
私の左右は、がっしりと裏切り者のスレイア様とロイに掴まれている。

薄情すぎるわ。スレイア様もロイも。

そもそも護衛騎士って守ってくれるんじゃないんですか？
それなのに、「すまない。今ここで彼女達に従っておかなければ、私にも別の方角から火の子が飛びそうなのだ」なんてスレイア様はまさかの裏切りに走るし。
ロイもロイで、上司がそうならと潔く裏切るし。

そもそも、これも全てリクが悪いのよ！！
いきなり私に護衛をつけるなんていいはじめてさ～。
そんなのいらないって断ったのに、リクの奴が「断るならこいつらクビにする」なんて脅すんだもん！！
だから仕方なく怪我が治るまでっていうことで、ごねるリクをなんとかねじ伏せて話をまとめたのに。
こんなまさかの裏切りにあうなら、無理やりでも断ったわよ……

「リノア。無駄なあがきはやめて、早く採寸をしなさい。お二人共、わざわざ貴方のために時間を割いて来て下さっているのですよ？」
メイド長はそう言うと、一歩踏み出す。
たったそれだけの行動に私の肩がビクつく。
メイド長って普段仕事に厳しいお人だから、条件反射で体が緊張してしまう。
別に「まだ掃除終わってないの！？素早く丁寧に綺麗にっていつも言ってるでしょ！！」なんて怒られるわけじゃないのに。

「そうよ～、リノア。キキ様にドレスを作って貰いたい人が、どれだけいると思っているの。キキ様は超人気のデザイナーで、一年先まで王族や貴族の予約いっぱいだから普通なら作って貰えないのよ！！今回は特別に、来て頂いてるの」
「いきなり来て採寸ってなんですか！？私、頼んでませんよ！？」
というか、そもそもドレスなんていりません。

着ていくところがないですし。

「当たり前じゃない。それに、私たちが頼んだ所で来てくれないわ。今回の依頼主は五大貴族の皆さまだから特別に来て下さったのよ」

「……え？おじいちゃん達？リクイヤード様じゃなくてですか？」

てっきり、リクだと思ってたのに。

だって前も無理やり採寸され、ドレスを贈られた事があったから。

だからてっきり今回もと思ったんだけどな～。

「いくらリクイヤード様でも無理よ。お金も権力もコネも持ちまくっているあの方達じゃなきゃ、予約も無しにキキ様になんて作って貰えないわ。今回は、アスラ公爵様がキキ様の恩人という縁でお願いを聞いて下さったのだもの」

「貴方達無駄なおしゃべりは辞めて、さっさとリノアを脱がせて採寸させなさい。まだリクイヤード様の採寸も残っている上に、ドレスのデザインも布地も決めてないから時間が足りないのよ。急ぎなさい。ロイ様は殿方なので、外へ」

「あ、はい」

「ちょっと、ロイ！！」

メイド長の指示に従うロイを止めるが、ロイは眉を下げ「すまない、リノア」と言い残しあっさりと扉の外へと消えて行った。

ロイ、後で覚えてろよ……

第三十三幕　癒されます

やっぱ薔薇園はいいなぁ～。
そっと一輪の薔薇の花を撫でるように触れながら、顔を近づけて香りをかぐ。
気品のある華やかな香りだけど、どことなく甘さを含んでいた。

あ～、癒されるわ。
薔薇のおかげか、私の気分はふんわりと軽くなった気がする。
なんだか、さっきまでの疲れがどっかに吹き飛んだみたい。

あのリクとのお茶会をしてから、私は良くここに足を運ぶ。
それは一人でふらっと立ち寄ったり、リクと一緒の時だったりいろいろ。
リクには「飽きないのか？」って聞かれるけど、飽きるわけがない。
だってそこは、私にとっては心地いいのだから。
周りは薔薇の垣根に目隠しをされるように囲まれてるし、少し先に進んだ所にある噴水の流れる音が耳に届きでリラックスできるしね。
ほら、なんか水の音って癒されない？
川のせせらぎとかもそうだけど。

「――そうしていると、まるで1枚の絵のようだ。きっとリノアちゃんの美しさには、女神スティーアもたじろぐよ」
「え？」
急に聞こえたその歯のうくような声に振りかえると、にこにこ笑ったバルト様が立っていた。
人払いをしているのか、護衛をつけてないよう。
なんの前触れもなく突然現れたバルト様に対し、ロイは頭を下げ数歩後ろに下がり、スレイア様は唇を引き攣らせてバルト様を見てい

る。
その視線は何処となく冷たさを含んでいる気がするのは何故だろう？
「バルト様、こんにちは。そんなに毎回お世辞言わなくても大丈夫ですよ」
「やぁリノアちゃん、こんにちは。お世辞ではなく、本心だよ。それよりもどうしてここに？まさか、もうドレスのが決まったのかい？」
「あ～、ドレスですか」
そのフレーズに、私のテンションは急降下。
だって、あれのせいですごく体力的にも精神的にも疲れたからここに来たんだもの。
はぁ～、思いだしたくもないわ。

あの後、無理やり脱がされてドレスの採寸をしたかと思うと、今度はドレスのデザインを決めると言われたのだ。
はっきり言って、流行のドレスなんてわかんない。
だってドレスなんて滅多に着ないし。

……まぁ、ハイヤード（じっか）に戻れば、必然的に着るかもしれないけど。

でも普段は着ないでしょ？ほとんどメイド服だし。
休みの日は動きやすいワンピース着用だしさ。

だから、そんな事言われてもわからないので「おまかせで」と告げた。
そしたら、どうなったと思う？
メイドのみんなから非難されまくったっうの。
しかも、メイド長にまで。

「一生に一度のことでしょうが！！」とか散々言われてさ。
「なんで一生に一度のこと？」って思ったけど、余計な事言ってまた何か言われるのもあれだし、大人しくながされたわ。
だから「なるべく動きやすいような感じでお願いします。裾長いやつだと転んじゃうかもしれないので。それ以外は流行とかわからないので、おまかせいたします」とだけ言って、早々に退散してきたというわけ。
おまかせでよかったと思う。私だと、きっとやぼったいドレスになっちゃってるだろうし。
そう考えると、ドレスに詳しい人に頼めば、ちゃんとしたドレスに仕上げて貰えるはず。

「ドレスはおまかせしました。私、ドレスとか詳しくないので」
「そうか。でもきっと良いドレスが出来ると思うよ。あのキキが作るドレスだからね。楽しみだね、ドレス。リノアちゃんのようなプラチナの髪には、やっぱり白いドレスが映える」
「白ですか？汚れちゃうので、白はちょっと……もしかして、作って貰うのって白色のドレスなんですか？珍しいですね。白いドレスなんてウエディングドレスみたい。さすが新進気鋭のデザイナー」
あ～、だから針子さん白布系いっぱい持ってきてたんだ～。どうしよう。色変えて貰わなきゃ。
せっかく作って貰ったのに、汚れちゃったら大変だもの。
結構私、動き回るし。

「え？」
「え？」
どうやら私とバルト様との話に食い違いがあったらしく、二人じっとお互いの顔を見合わせたまましばし動かない。
だがすぐにバルト様の方は視線をはずし、スレイア様の方に視線を

向けた。
二人とも一言もしゃべらないでアイコンタクトというか、目で会話をしている。
時々首を横に振ったり、縦に振ったり。
さすが親子。

「……そうだな。ここは触れずにリクイヤードに任せよう」
「何をまかせるんですか？」
「いやいや何でもないよ。それより、リノアちゃん。明後日からちょっと旅行に出かけてみないかい？リクイヤードには内緒で」
は！？り、旅行っ！？あの～、ドレスの話は何処へ――？

第三十四幕　わけわかんないんですけど？

「旅行ですか……？」
私は首を傾げバルト様を見つめた。
さっきのドレスの件も気になるけど、今はそれよりもまずこっちの旅行の方が先だ。
それにしてもなんで急に旅行を？しかも、怪我してるこの時期に？
何か、バルト様のお考えでもあるのかしら？

「そう、旅行。リノアちゃん、もうすぐ誕生日だよね？どう？最近眠れてるかい？」
「……。」
誕生日というフレーズが出て、私は口を一文字に結び俯いた。
もしかして、バルト様はご存知なのかもしれない。
誕生日が近付くにつれ、だんだん眠れなくなっていくのを――

私が幽閉されたのが誕生日だったためか、毎年誕生日が近付くにつれ不眠のカウントダウンが始まっていく。
眠っていて見る夢は全て悪夢ばかり。
しかも夢とは思えぬリアルすぎる物。
そのため私はあの時の恐怖心が蘇ってしまい、眠る事が怖くなってしまう。

だからここの所、ほとんど寝ていない。
アルコールもリラックス効果のあるハーブティーも全然駄目。
体が眠るのを拒否しだしてしまっている。

「嫌な事思いださせてしまって、ごめんね。実はバーズにこのこと聞いてたんだよ。それでね、アルル国にアカデミー時代からの古い

友人がいるんだけど、そこに今度良い抱き枕がハイヤードから届くんだ。それがあればきっとリノアちゃん安眠出来るはずだから、旅行がてらにどうかなって思って」
「えっ！？もしかして――」
それは、シドの事？
私の答えが正しかったらしく、バルト様は意味ありげにウィンクをなさった。

私が唯一その期間内に眠る事が出来るのは、我がハイヤード公国の騎士団長・シドの傍だけ。
たぶん、私をあの闇から救ってくれたのがシドだったからなのかな？
他の人じゃ無理なんだけど、シドの傍なら悪夢も見ずに安眠出来るんだよね。
だからいつもこの時期はシドと一緒に眠る。

「本来なら彼をここに呼びたかったんだが、この現状じゃ叶えられない。敵に追跡される可能性も無きにしもあらずだし。だから今回は万全を期して、漆黒の魔女の力を借りて、彼をアルル国まで転送魔法で連れて来て貰う事にしたんだよ」
「えっ、ハイネのですか！？」
「うん、そうだよ。君の為と言ったら二つ返事で協力を申し出てくれた。アルルまで暁の獅子を送ってくれるそうだから、彼女とも会えるかもしれないね」
「本当ですかっ！？バルト様、お心づかいありがとうございます」
私はお礼を言うと、頭を下げた。
すっごい楽しみだわ。
カシノが居ないのは残念だけど、シドとハイネに会えるなんて！！
もう、顔も自然に緩んじゃう！！

「いいんだよ～。可愛い可愛いリノアちゃんのためだからね～。う

んうん、やっぱり女の子は笑顔が一番。そのリノアちゃんの笑顔のためだったら、なんでもしちゃいたくなっちゃう。何か欲しいものはあるかい？なんでも買――」
「――父上」
バルト様の言葉に覆い被さるように、スレイア様の氷のような声が重なった。
その声に弾かれたように私とバルト様が視線を向けると、眉をつり上げ仁王立ちになっているスレイア様がいた。
こめかみと口元を引きつらせ、バルト様を見据えている。
その一方のロイは、おろおろと私達とスレイア様を見比べて中。

「スレイア。一体どうしたんだい？」
「どうしたんだいじゃないでしょうが！！所構わず口説くの辞めていただきたい」
「ちょっと待ちなさい。いつ、俺がリノアちゃんを口説いたっていうんだ」
「どうやら、自覚無いぐらいに父上にとっては自然な事のようですね。リノアの事は幼い時からご存知だそうですが、まさかずっと目をつけていたんじゃないですか？リノア、父上のストライクゾーンですし」
「スレイア、リノアちゃんの前でなんてことを言うんだい。それじゃあまるで俺に下心があるような言い方だ。たしかにリノアちゃんの事は、目をつけていたよ。でも、それは――」
「――……目をつけてただと？」
その声によりバルト様の言葉はまたまた遮られてしまう。
しかも今度はスレイア様の時よりも、かなり低く冷たい。
スレイア様が氷なら、リクはなかなか溶けない永久凍土かも。
声のする方向を振り向くと、こちらに向かって大股で歩いてくるリクが視界に入った。

リクは私とバルト様の間に無理やり入り、私を自分の背に追いやると、自分の着用していたマントを外し私の頭からばさっとかぶせた。
なっ、何これっ！？
急に視界を遮られたかと思うと、今度は何かにがっしりと拘束されてしまう。

「これは俺のだ！！」
頭上で聞こえたリクの声。
さっきの第一声から理解できるように、かなりご機嫌ななめのよう。

「ちょっと、リク！！なんなのよ、これ。っていうか、また人を物扱いしてるし！！あんた、何様？」
どうやら私はマントを被された上に、リクに抱きしめられているらしい。
もうさっぱりわけがわからない。
いきなり人に布をかける理由も、抱きしめられなきゃならない理由も。

「お前は少し黙ってろ」
「はぁ！？」
なんで私が黙らなきゃならないわけ～！？

「これは俺の物だ。だから見るな、触れるな、近づくな」
「今度は人をばい菌扱い！？」
「ばい菌扱いなんかしてないだろうが！！いいからお前は黙ってろ。今、このエロ親父と話をしているんだから」
「え、エロ親父っ！？」
そんな事言われると思わなかったんだろうね。
バルト様の声がどもって聞こえた。

さっきから聞いてれば人を物扱いにするし。
ちょっとこいつ、いくらこの国の王子だからって横暴じゃないの？
まったく、この王子はほんと理解不能だわ。
そんなんだと、アルル国のお土産なんて買ってきてやんないんだからね。

第三十五幕　重なる予想とダルディガの伝言

宝石の国として名高いアルル。
面積こそかなりの広さを誇るが、この国はハイヤードと同じように長閑な田舎の国。
それはもう、見渡す限りの田畑と山々ばかり。
そんなこともあって私たちが通っている道も、全く人が通らず民家すらも見当たらない。
でもそんな景色も、ハイヤードと似ていて懐かしかしいのよね。

「こういうのもたまにはいいな。空気がうまい」
反対側の馬車の座席に座るスレイア様は、開けられた馬車の窓から入って来るそよ風に、頬づえをつきながら目を瞑っている。

たしかに空気がおいしく感じる気がするわ。
自然豊かなだけじゃなく、標高のせいもあるかも。

「お世話になる別荘の近くには、大きな湖があるそうですよ。日ごろの疲れを癒してリフレッシュできますね」
「そうだな。ここには煩い王子もいないから、リノアもゆっくり休むといい」
スレイア様のその言葉に、私は思わず噴き出してしまう。
煩い王子。浮かんだあの王子は、私の頭の中でもお小言を言っている。

たしかに――

クスクスとスレイア様と笑っていると、私の隣りから「笑えない」という、ものすごく暗いじめじめとした声が降り注いできた。

「何よ、ロイ。どうしたの？」
「やっぱ、リクイヤード様に黙って出てきたのはマズイって……」
彼は馬車の側面にうな垂れたまま、弱々しく呟く。
視線はずっと下を向いたまま。
も～。せっかくなんだからこの景色楽しめばいいのに。

「そりゃあ、誰でもそうだけど、急に居なくなったら心配するよ。
でも、今回はバルト様が事情知ってるから大丈夫だってば」
「心配とかそういうのじゃない。いいか？女の嫉妬も怖いけど、男の嫉妬も怖いんだ。リクイヤード様、あの鬼畜王子と似ている気がするんだよ……二人のタイプはまるっきり違うけど、何をしでかすかわかんないっていうかさ……」
「はぁ？なんでリクが嫉妬するの？っていうか、鬼畜王子って誰よ？」
結婚してるって言っても、契約結婚だし。
リクが私のことを好きってこともないもん。
だって私はリクが関係を持っていた、女性の魅力溢れる貴族令嬢達達とは違う。
だからリクの好みじゃないのは確定してるから。

リクが妬くとしたら、恋人にでしょ。ロイってば、何言ってんの？
そう言えば、リクにもう新しい人出来たのかな？
あれって、一月前ぐらいかな。
リクが女性全員と別れたってササラさん達に聞いたのよね。
みんな何を興奮しているのか、「リクイヤード様が女性全員とお別れなさったのよ！！」と私に力説してくれてたっけ。

「鬼畜王子なんて決まってるだろ。あのシス……――いい。なんでもない。お前に言うと、俺の身が危なくなる」

ロイは青ざめた顔のまま自分の身を温めるように両手で体を抱きしめるようにすると、ぶるぶると震えだした。
なんか、こんな光景前にみたことあるような無いような。

「そう深く考える事はないだろ。事情を知っている父上がなんとかなさるはずだ。それにリクイヤードに知らせなかったことに私は賛成だ。事情が事情にしろ、間違えなくこちらに着いて来たからな」
「えぇ、絶対に着いてきてますね」
「その場合の護衛を増やさなけらばならないし、そうなったら他の騎士にリノアのことも話さなければならなくなるしな。だから父上も黙っていたのだろう。まぁ、何かあれば父上が対処するだろうし、リクイヤードも大人だからわかるだろう」
「そうですよね。国王様がいら――」
『シルク様』
――え？
今までロイ達の話に耳を傾けていたんだけど、なんか名前を呼ばれたような気がして、右窓の辺りを見回す。
すると馬車の金色の窓枠のところに真っ白い鳥がとまっていた。

『突然のご無礼をお許し下さいませ』
「いいよ、気にしないで。ねぇ、貴方はもしかしてちょっと前に通った湖の精霊？気配が同じような気がするから」
『さようでございます。まだ私の力が届く範囲ですので、こうして鳥に姿を変え飛んでまいりました。姫はダルディガという者をご存じですか？』
「ダルディガ？うん、知ってるよ」
ダルディガっていうのは、リクの愛剣。
なかなかの年代物で、ギルアの歴代の王は代々継承されてきたそう。
いろいろ条件が重なり、ダルディガは精霊化しはじめていて言葉を話せるようになっている。

まだまだ力が足りなく姿を形づけることは出来ないけどね。
あ、そう言えば私ダルディガが精霊化してるのリクに言ってなかったわ。
私、ダルディガと話す時は言葉に出さないから、リク絶対に気づいてない。
だってダルディガが黙ってて欲しいって言うんだもの。
あのあいさつしかしてくれない無口なダルディガの頼みだし。
私達は精霊と話す時は、人間に対するように言葉を発してしゃべる場合と、テレパシーのように口に出さずにしゃべることが出来る。
弟（ラズリ）なんかはどっちも同じって言うけど、私は後者場合には、頭が少し疲れる。
だから私はほとんど口に出してしゃべっちゃう。
なんか、勉強ぶっつけで2時間やったぐらい脳が疲労するんだよね。

「もしかして、リクに何かあった？」
『はい。ハイヤードのダルディガと名乗る者より伝言が私の方にも伝わってまいりました。お伝えしてもよろしいでしょうか？』
「お願い」
『リクイヤード様がバルト様の命により、西の塔の地下牢に閉じ込められたとのこと。そのため一刻も早くギルアへの帰国をお願いいたしますと』
「はぁ！？」
私がギルアを出発して、2日半。
一体ギルアで何があったっていうのよ！？

第三十六幕　魔女の呪いと王子様（前書き）

ちょっと長めです。

第三十六幕　魔女の呪いと王子様

「本当にごめんね、リノアちゃん。うちの馬鹿息子ときたら、リノアちゃんが駆け落ちしたって噂を信じ切っちゃって人の話も聞かなかったんだ……一応ちゃんと事情を話したんだよ？それなのに物壊しまくって暴れまくるし、第一・第四・第六騎士団に捜索命令を出す始末でさ。もう手がつけられなくて」

「だから、閉じ込めちゃったんですか……？」

何て言うか結構強引ですよね？バルト様。

軽く頭痛のする頭を押さえながら、少し先を歩くバルト様に視線を向けた。

薄暗い廊下の壁にはところどころ蝋燭が灯され、私達の足元を照らしてくれている。

地下ともあってか、ひんやりとした空気が私達の肌を撫でていき、ほんの少しばかり寒い。

ここはギルア城にある塔の地下室。

私は一旦アルル国に行き、久々の再会の間もなくすぐにハイネの転移魔法によりギルアに戻ってきた。

ハイネの転移魔法だと数秒もかからずにギルアまで戻ってこれるから、普通に馬車で戻るよりも断然早く済む。

最初リクが捕まったって聞いた時、「何事っ！？」って思っちゃったわ。

それが話を聞いていくと、私が駆け落ちしてギルアを出て行ったのが理由って話じゃん。

なんでそんな思考回路に繋がるか、正直わかんない。

リクってあんな大量の執務を一人でこなせるから、頭良いはず。
だから、そんなの違うってわかりそうなんだけど。
だって、スレイア様もロイも一緒なのよ？
本当に駆け落ちするなら、連れて行かないわ。
っていうか、まず相手いねぇし。

「しかし、えらくギルアの王子というのは妄想家の上に達が悪い奴だのぅ」
私の隣りを歩くその少女は、肩にかかった髪を払いのけながら顔を歪め口を開いていた。
年の頃は８歳から１０歳ぐらいの彼女は、腰より下まである長いつやの漆黒の髪を風に靡かせながら歩く。

彼女が身につけているのは、髪と同じ色の何の飾りもない漆黒の丈の長いワンピース。
ただそれだけなのに、その姿は花があり、可愛いって思う。
それは彼女の人形のような可愛さを持っているからかも。

彼女は『漆黒の魔女』こと、ハイネ＝グランス。
ハイネとはアカデミーの在学中に知り合い、友達になった。
卒業後は魔女狩りで唯一生き残った国・グランス国の女王として、政務を取り行いながらグランス国にいる。
魔女狩りの生残りや子孫は存在しているけど、国として形が残っているのはハイネが率いるグランスだけ。

ハイネは漆黒の魔女って呼ばれてるんだけど、それは髪の色が黒だから。
黒い髪はハイネ以外この世界には存在しない。
古代の文献にある通りに黒髪というのは稀なもの。
黒髪は魔力が桁違いらしく、全魔術を使用することができるらしい。

だからハイネは数少ない者しか使えない治癒魔法も使えるんだ。
だから、私も会った時に骨折を治してもらったの。
強力な魔力を持つ漆黒の魔女の存在は真実と噂も混ざり合い、自国他国を問わず恐れられる存在となった。魔術師が恐れるぐらいハイネの魔力が強すぎるんだって。
そんなんだからハイネってば、最初とっつきにくかったのよね～。まだ仲良くない時なんて、めっちゃ睨まれたし。

「リクイヤードと言ったかのぅ。ギルアの王子だがなんだか知らぬが、そんな迷惑極まりない奴はわらわが灸をすえてやろう」
「ハイネ、ここギルアだから」
いくら漆黒の魔女だからってそれはマズイ。
ここギルア国内だし。しかも、ここにリクの父親のバルト様がいらっしゃるし。

「別にかまわぬだろ」
そんなハイネの言葉に対し、バルト様はただ苦笑いで答えていた。

＊　＊　＊

知っていたが、実際見てみると違う。

ほんとに捕まってるし！！
思わずその光景を見て、そう叫びたくなった。
牢の中にいるその人物は、手枷と足枷をされ、両手足の自由を奪われている。
着衣も汚れ、ところどころ切れているよう。
何してんのよ！！あのバカっ！！
しかも大人しくしていればいいのに、それに抗おうと腕と足を大きく前後左右に動かしているし。
怪我でもしているのか、彼の両手足首には包帯が巻かれていた。
静まりかえった世界には、金属のぶつかりあう音とリクの叫び声だけがむなしく響く。

「リクっ！！」
「シルクっ！？」
私を見つけるやいなや、リクは一瞬動きを止め大きく見開き私を見詰める。
たがそれもほんの数秒の間だけ。また暴れ始めてしまった。
「動かないでよ！！それ怪我してんでしょ！？」
も～、ちょっとは大人しくしてないさいよ……
また怪我するじゃんか。
急ぎバルト様から預かった鍵を使用し中に入り、リクの傍に駆け出す。
「戻ってきたのか！？浮気男も一緒か！？相手は誰だ！？ロイかそれとも他の奴か！？」
「だからその話はもういいから、大人しくしてて。後で話すから」

暴れると鍵外せないんだってば～。
私は中腰になりながら、さっきから何度か鍵穴に刺そうと試みている。
だけども、リクが暴れるからそれが出来ない。
「リク、動かないでよ！！も～、めんどくさいことばっかりして！！」
「めんどくさいって何だ！？いいか、お前は俺の……――にゃあ！？」
「あ」
リクの言葉はそこで途絶え、彼の姿が私の視界から消えてしまう。
「……ハイネ」
突如目の前で起こった異変に、私は彼女の名を呼び体を半回転させる。
すると、口角を上げたハイネの姿が視界に入ってきた。
彼女が見つめる先は、リクを拘束していた足枷がある場所。
「に、にゃ！？にゃあ！？」
その足枷のある少し手前に、鳴き声をあげながらせわしなく辺りを見回している猫がいる。
金色と茶色の間の毛色の海色の瞳。
毛並みは良く、ふさふさと柔らかそうな毛質。
「ギルアの迷惑王子よ。お主に呪いをかけた。わらわ達の久々の再会を邪魔した罰じゃ――」
魔女は猫にそう言葉を残し、黒い扇子で口元を覆い隠しクスクスと笑った。

第三十七幕　猫の監視

ん……――

ゆっくりとふわふわと曖昧な意識が、少しずつだけどたしかに確実に覚醒していく。
そんな中うっすらとまぶたを開くと、紅蓮色の短い髪をした男性の顔がアップが視界に飛び込んできた。
凛々しい気分ばかり太めの眉に、堀の深めなのかはっきりとした目・鼻、口元にはうっすらと生えた無精髭。そして黒い服から覗く日に焼けた筋肉質な体。

あ…れ……？ど…うし…て……？
私は目を擦りながら、「シド」とその彼の名を呟いた。

――私、たしかギルアからまたアルルに戻ってきて……そんで……

頭が冴えるのを待ちながら、ぼうっと彼を見つめ続ける。
シドは私と同じように横向きになって、ベッドに横になっていた。
彼の後ろの背景と化している家具や壁も、この体を休めているベッドもリネン類も全て馴染みのないものばかり。

あぁ、やっぱり。ここアルル国のシルビアさんに借りた部屋だわ。
シルビアさんというのは、バルト様のアカデミー時代のご友人。
私達がアルル国に滞在する間彼女の館でお世話になることになっているの。

天蓋付きのアイアン製ベットと真っ白い机があるだけのゲストルームの寝室。

狭くもなく、広くもなく、丁度良い大きさで過ごしやすい。
テーブルやソファなんかはここと扉で繋がっている部屋にあり、そこでお茶を飲んだりしてくつろげるようになっていた。

「まだ寝ぼけてるのか？」
「ん……――」
だんだん頭が冴えて来たとはいえ、まだ眠気で完全ではない。
そんな中途半端の私に彼は喉で笑いながら、すっと右手を伸ばし私の頭を撫でてくる。
それが酷く小さくて弱かったあの頃を思い出してしまい、懐かしい。
それと同時に心地よく、私はまた目を瞑りそうになった。

絶対的な信頼を寄せている彼の傍は、私にとって世界で一番安心出来る場所。
そう言っても過言ではないぐらい、この男――シド＝アンセムの傍は私にとって特別なの。

暁の獅子こと、シドはうちの騎士団・団長。
シドの家はハイヤードに長年使える武人の名家で、何人も騎士団・団長を輩出している。
去年引退したシドのお父様も騎士団の団長をしていたの。

年は私と結構離れていて、シドは３０歳。
私にとって彼は恩人であると同時に、同じアカデミーで学んだ仲間であり、血は繋がってないけど家族のような存在だ。

「どうする？もう少し寝るか？」
「ううん、大丈夫」
「そうか」
「ねぇ、シド。腕痛くない……？」

まだ鈍い思考の中、私の頭の下におかれているシドの腕が気になり、そこに触れながら聞いてみた。

子供の頃からなんだよね、これ。
幽閉が解かれた後、私はなかなか普通の生活に戻る事が出来なかったんだ。
ショックで言葉がしゃべれなくなっていたし、疑心暗鬼で周りは全部敵だって思いこんでて、眠る事も出来なかったの。
そんな私をシドが傍にいてくれ、「少しずつでいいからな」って言って、日常に戻れるのを見守ってくれた。

だから、寝る時もシドと一緒だった。
シドが居なくならないように、彼の服を掴んで、腕枕で眠る。
不思議とシドの傍なら、私は眠れたんだ。

筋肉で出来ているシドの腕は堅いんだけど、子供の頃からずっとそれだったから問題はない。
シドの影響なのか、今ではすっかり枕も堅い方が眠れるんだよね。
負担にならないように、腕の上に枕を置いて眠って眠ればいいんだけど、もう癖のように染みついちゃって――

「これぐらいどうってことないぞ。今までもずっとして来たからな」
「そっか。そうだよね、ずっとだったもん」
「ただ、ちょっと……」
「え？」
「視線が痛い」
「は？視線？」
シドは私を越え、何かを見ている。
私もその視線追うため、体を半回転させそれを見た。

「……何してんの？リク」
その光景を見て、思わず起き上がってしまった。
そこには丁度扉から1、2メートル先に猫がいたんだけど、その猫は2本足で立ち、まるでそこに見えない壁でもあるかのように、両前足と顔をくっ付けながら、こっちをすごく見ていた。
顔をくっつけすぎて、片頬は潰れている。

ほら、ガラス窓に顔を押しあてると、反対側では潰れて見えるじゃない？
あんなイメージ。

「シルクが寝ている2時間、ずっとあのままなんだよ」
「は？2時間も！？」
振りかえり、シドを見ると頷かれた。
隣りの部屋には、ハイネ達がいるから、あっちでも休めるのに。
あの体勢辛くないのかしら？

首を傾げながらリクを見ると、口元を動かし、今度は爪をとぐみたいに、両手でその見えない壁みたいなのを引っ掻き始めた。
口元が動いているんだけど、鳴き声すら聞こえないわ。
もしかしてハイネが、私が眠れるように騒音対策とかのために、結界張ってくれたのかも。

そんな事を考えていると、扉が開いて、ハイネの姿が見えた。
すると今まで聞こえなかったのに、「にゃあ」という猫の声が耳に届く。
あれ？結界解いたのかな？

「にゃあ、にゃ！！」
リクが鳴きながら私の方へ走って来て、ベッドにダイブしてくると、

すぐさま私とシドの間に入り、2本立ちになって私の左腕を押し始めた。

「どうしたの？」

「にゃ、にゃ、にゃーっ！！」

何度も押されるけど、猫の力じゃ私を動かすことは出来ない。

それがわかったのか、今度は反対側に回ると、服の右裾を噛み何度もくいくいと引っ張り出してしまった。

「さっきからどうしたの？」

「にゃ」

私は両手でリクを抱き上げると、正面から顔を見た。

ほんと、綺麗な目の色だわ。

人間の時も綺麗だって思ってたけど。

「その猫王子、シドに嫉妬しておるのだ」

「嫉妬～？もしかして御主人様と遊んでほしかったの？ごめんね、アルルに戻って来たら眠くてしょうがなくてさ。私、まともに寝てなくて……何して遊ぶ？猫じゃらし？」

「にゃー！！」

「ちょっ！！」

今度は暴れ出したし！！

両手をバタつかせ暴れ始めてしまった。

第三十八幕　温度差

ハイネがリクにかけた『呪い』。
あれって実際は、本当は『期限付きの魔法』だった。
夕刻まで猫の姿のままで、それ以降は元の人間の姿に勝手に戻るの。

だからリクは最初アルル国に連れて来る予定はなかった。
だって、夕刻には自動的に戻れるんだし。
それまでバルト様経由でメイド仲間か誰かに預かって頂く予定だったんだ。
でもそれが出来なくて、私は結局リクを連れてきたの。
人間に戻る夕刻までという約束で。

だって、あの時のリクってほんと可愛いかったんだもん。
私の首元にリクが鳴きながらしがみ付いて来たんだ。
「ちょっとだけ留守にするから、離してね」って言っても、いやいやと鳴きながら首振ってさ。私と離れたくないとばかりに。
あれ、反則。破壊的に可愛い。

――それが人間に戻った途端これか……

「だから、なんでお前はそういつも反応が淡泊なんだよ！？いいか、もう戻るって言ってんだぞ！？」
その言葉を聞きながら私はため息を吐きだし、真正面にいるリクをみた。
眉を顰めながら、ほんの少しばかり怒ったような表情をしている。
だがその姿も背景となっている窓際の景色も前後左右に揺れ、不安定。

それは、私の両肩に置かれたリクの手によってだ。
この手が私を前後左右に揺すっている。
2時間仮眠取ったとはいえ、私はまだ眠いんだよ～。
だから、そんなに揺らされると気持ち悪くなるってば。
あ～。猫の時のリクなら可愛かったんだけどなー。
どんなに暴れても、機嫌悪くても、我儘言っても全てが可愛かった。
それなのに、今はちょっと面倒な人でしかない。
「少しは寂しがれよ！！俺達しばらく会えなくなるんだぞ？」
リクはこれからハイネの転移魔法により、ギルアへと戻る。
もう人間の姿に戻ったし、駆け落ちじゃないって理解して貰ったから、アルル国にいる理由はない。
それにスケジュール調整がされているなら良いけど、明日にはギルアで会議があったりして、仕事の他に予定がぎっしり。
だから残るのは無理な話。
「寂しがるって言ったって、たかが一週間やそこらじゃん」
だから寂しいか寂しくないかって言えば、寂しくはない。
そりゃあ、ハイヤードに帰るってなったら寂しくなる。
だって、ギルアとハイヤードじゃ遠すぎるもん。
馬車で1カ月ぐらいかかるんじゃないかな。
「は？たかがだと？お前にとっては、一週間はたかがなのか！？」
「……。」
――駄目だ。何をしゃべっても、全てが地雷のように思えてきた。
「――……んで」
「え？」

それは、何か言った？って聞き返したくなるぐらい小さい呟き。
それが耳に届いた瞬間、ぱたりとその視界のぶれが止まり、リクの手が私の肩から外されていく。

「……なんで、俺ばっかり寂しがらなきゃならないんだよ！！不公平だろ！！」
「は？」
もう時間が止まったんじゃないかって思った。
だって、あのリクが寂しいって……
たかが一週間離れるだけでだよ？
しかも、羞恥心からか顔真っ赤にしてうっすら涙目だし。

「こっち見るな！！」
私がぼけっと見ているのに気付いたのか、リクが急に怒鳴り出した。
何この理不尽。

第三十九幕　お土産屋さんにて

「――あ」
「ん？欲しいのでもあったのか？」
突然店内の一角を見つめたまま立ち止まった私に、シドが尋ねてきた。
私達の周りには、色とりどりの宝石達が棚やクロスのかけられたテーブルにディスプレイされている。
それらはピアスやネックレスに加工されているものや、原石など種類がさまざまだ。

ここは、アルル国の都市にある宝石屋さん。
さすが宝石の国とも言われているだけあって、数件ある宝石店もお土産屋さん感覚で気軽に入れる雰囲気なの。
値段も市場よりも安く、私達みたいな観光客も多い。

もちろん、宝石だから手がでないぐらい高い物もあるよ？
そういうのは、大抵ガラスケースに入れられている。
さっきもすごく欲しいって思ったブローチが高かった。

あのブローチ可愛かったんだけどなぁ。
私、シンプルなワンピースとか着るから合わせられたし。
それは赤い宝石が組み合わされて花をデザインしたブローチ。

すごく気に入ったんだけど、メイドのお給料で3年分でも買えないぐらいの金額だった。
まぁ、ガラスケースに入れられている段階で値段高いことに気づくべきだったよね……
私はまだあきらめきれずに、店内の中央に配置されているガラスケ

ースをみつめた。
三年分かぁ……――
未練がましく見つめていたが、なんとか断ちさっき見つけた宝石の方へ足を進めた。

「これリクに合うって思ったの」
そう言って棚からそれを取りシドへと見せる。
それは、透き通った湖の色をした宝石のピアス。
リクの瞳の色が青だから、この水色だと綺麗に引き立つんじゃないかな～って思ったの。
値段もお菓子一箱分ぐらいの値段だし。

「でも、王子様にこの値段って失礼かな？」
なんか、王子って高そうな物身につけてるじゃん。
弟のラズリも王子だけど、プレゼントの類いは値段とかそういうの気にしないでつけてくれる。
けど、リクって身につけているものとかすごく高そうなものばかりだからなぁ。
頻繁につけているピアス、ルビーとかダイヤとかだし。

「あぁ、それは大丈夫だろ」
シドはあっさりとそう言った。

「そうかな？」
「あぁ、あの王子に関しては問題ないぞ」
「そっか。シドが言うなら大丈夫だよね」
よし、じゃあリクへのお土産はこれに決まりと。
バルト様には香水を買ってあるし、これであと買ってないのはメイドのみんなの分とおじいちゃん達の分だけかぁ……メイドのみんなには、日持ちのする菓子とかお茶にしようかな。

おじいちゃんには、何にしよう？なんて事を考えていると、シドが急に変な事を言い出した。

「――なぁ。あの王子の事どう思う？」
「王子？それって、リクの事？」
「あぁ」
「んー、わけわかんない人」
私は、他の宝石を見ながらそう答えた。
だって、実際わけわかんないって思うもん。
急に怒るし、寂しがれって言うし。

「お前な～。自分の旦那だろ？」
「旦那って言っても、仮だよ。全部終わったら離縁するって本人も言ってたし」
「おそらく、そう思ってるのはお前だけだろ。あの王子、離縁なんかしないぞ」
「え？なんで？うちとギルアって外交上って何か利点あるっけ？」
「利点とかの問題じゃない。ただ、あの王子がラスボスに負ければ離縁する可能性もある。絶対にうちのラスボスが潰しにかかるのは目に見えているからな。王子がそれを難なくクリアすれば、このまま婚姻続行。まぁつまりは王子次第っうことだ」
ラスボスって、最後のボスっていう意味だよね……？
一体誰？バーズ様のことかしら？国王様だし。

第四十幕　早く会いたかったから

やばい。顔がにやけてくるのが抑えられない。
とうとう抑えられなくなった私は、自分でもわかるぐらいに顔の筋肉を緩ませながら正面にあるそれに視線を向けた。
それは私が借りている寝室の壁にかけられているアンティーク調の鏡。
そこには、真っ白いワンピースに身を包んだ姿が映し出されている。

ワンピースの左胸には真っ赤な花のブローチが。
両手には白地に薄いリボンのついた手袋、足元もそれと同じようにリボンのついた靴を着用中。
髪はそのまま下し、真珠のカチューシャをしていた。

これらはみんな誕生日プレゼントとして頂いた物。
昨日、私達がお借りしている館の主・シルビアさんが誕生日パーティーを開いてくれたの。
その時に、みんなから誕生日プレゼントを貰ったんだ〜。

ワンピースはロイとスレイア様から。
白ってあまり着ないし、こういうワンピース持ってないからなんか新鮮。
ワンピースは襟元が丸襟になっていて、それから袖口はパフスリーブタイプ。
袖口と襟にはシェルのボタンが飾りとして付けられていた。
丈も動きやすいひざ上。

そして左胸につけられている赤い花を模したブローチ。これは宝石店で欲しかったあのブローチだ。

シドが内緒で買っておいてくれたみたい。
値段が値段だから気後れしたんだけど、「以外と貯蓄してるし、団長になってから給料かなり上がったし。だから気にするな」って言われた。
シドもみんなも遠慮せずにというから、言葉に甘えて頂いた。

あと、それから手袋と靴はハイネから。ロイ達がワンピースにするって聞いたから、それに合わせて選んでくれたみたい。
なんか、イメージとしては「お嬢様風」したいって言ってたっけ。

髪のパールのカチューシャは、シルビアさんから。
光に当てるとゴールドに近い発色をするの。
誕生日のパーティーを主催して貰った上に、誕生日プレゼントまで頂いて……
ただでさえ、館に滞在してお世話になっていたのに。

相変わらず、誕生日は嫌いだ。
あの時の光景が頭をよぎるから――

でも、こうしてみんなにお祝いして貰えるのは正直嬉しいわ。
だから、毎年少し複雑な感情なんだよね……

「いつか、誕生日の全てが好きになれる日が来るといいな」
心のどこかが真っ黒のままじゃなく、いつか全てがクリアになって心から好きになるように。
あの悪夢を見なくなるぐらいになるように。

そうなるためにも、私は強くならなきゃいけないわ――

目を閉じ息をふと吐くと、室内に異常なノック音が響き渡り、私は動きを数秒で止められてしまう。
「な、何事！？」
反射的に唯一の扉を見ると、ドンドンと叩きつけるように何度もノックが繰り返されている。
それは、まるで今にも扉を壊されそうな勢いだ。

何かあればこの寝室に扉一枚で続いている部屋で待っているシド達が動いてくれるはず。
だが、そんな気配は全くない。

……ってことは敵襲とかではないし。

念の為にマギアに手を伸ばしかけた瞬間、バンと扉が勢いよく開け放たれ、ここには居ない人が私の名を呼ぶ声が耳に届いてきたので反射的に振り返った。
それに対し、つい思わず目が点になり、唇を閉じるという行為を忘れかけてしまう。

「リ、リクっ！？」
これは幻覚なのか、幻聴なのか。
ギルアにいるはずの彼が、アルル国にいるんですけど。

「おいっ！！さっさと帰るぞ！！」
ノックの返事もないのにどがどがと入って来たリクは、腕を組みながら両足で地面にしっかりと立ち、私を見下ろしている。
その表情は私がさっきまでしていた表情とは反対に、不機嫌そのもの。
そして何事もないように私の手を握りしめると、部屋の外へと引きずるように連れて行こうとした。

「ちょっと！！何処行くの？っうか、なんでここにいるの！？」
「……俺が居て何か不都合なことでもあるのか？」
「いえ、別に」
なぜ急にそんなに声が低くなって威圧的に？
ただ、どうして一週間ほど前にギルアに帰国なさった貴方様が再度ここに戻ってきたのか、ものすごく疑問に思っただけだってば。

「いつこっちに来たの？」
たまたまこっちに用事があったのかしら？なんて勝手に想像してたんだけど、どうやらそれはリクから出た言葉から違うと否定されたようだ。

「ついさっきだ。議会が終わったらすぐにこっちに来る予定だったんだが、爺共に捕まってしまったから遅くなった。あの爺共も一緒に行くとほざきやがって……
おかげでお前を迎えに来るのが少し遅れたじゃないか。あぁ、先に言っておくけど、その分漆黒の魔女には上乗せしてある」
「え？ハイネ……？もしかして、ハイネにここに連れて来てもらったの？」
「それ以外どうやって、ものの数秒でギルアからアルルにお前を迎えに来れるんだよ？」
「は？迎え？なんで来たの？」
なんか、想像もしていなかった答えが返ってきてちょっと怖いんだけど。
だって、リクが迎えに来てくれたんだよ？
疑問に思うの当然じゃん。

「俺がここに突然来ると何か不都合な事があるのか？」
「いえ、別に。ただ、純粋に疑問に思っただけです……」

なんでそんなにつっかかってくるのかなぁ？今日に限って。
そりゃあ、たしかに迎えに来てくれたのに、「なんで来たの？」って聞いた私もちょっと不躾だったけどさ～。

「――……ったからに決まってるだろうが！！」
急に足を止めたリクが、耳まで真っ赤にさせながら吠えるように叫んだ。
そのため、思わず瞬きの回数が異常に増えてしまった。
おそらく重要だと思われる最初を聞き逃してしまったよう。

「ごめん。最初の方聞こえなかったんだけど、もう一度言ってくれない？」
「うるさい！！もういいから、世話になったシルビア様達にあいさつして帰るぞ。お前に見せたいものがあるんだ」
「えっ！？何それ。すっごく気になる！！何？」
「ギルアに戻ってからだ。だから、早く行くぞ」
「うん」
私は頷きながら、リクに合わせて足を速めた。

第四十一幕　触れたのは彼女の闇

「花壇……？」
「あぁ。これをリノアに見せたかったんだ」
私はしゃがみ込みそれを見ていたが、それから視線を斜め左上方向移すために、顔をそちらに向ける。
リクは私の方を見ず、腕を組みながらただじっと目の前にある花壇を見つめながら立っていた。

いつ作ったのかしら？
旅行前は芝生で何もない場所だったはず。
それなのに、今では煉瓦で回りを囲われ長方形型の花壇が存在している。
幅が６、７メートル、縦３メートルぐらいってところかも。
私は両手を広げて、アバウトながら大きさを測った。

花壇に植えられている花は、色と種類が様々なものが植えられているが、ほどんどが名前の知らない花ばかり。
唯一知っているのは、中央部に植えられている大ぶりの青い花だけだ。

ん～、８０本ぐらい？
とにかくこの花壇に植えられている中では、一番数が多く植えられているのはパッと見すぐにわかる。

「――『リノアの花』、いっぱいあるね」
真ん中にいっぱい植えられている花は、リクが私にくれたチョーカーの花だった。
リノアっていう、青い大ぶりの花弁がたくさんある花。

リクから貰ったチョーカーは、花だけだったから全体を見たのは初めて。
葉っぱは丸めのやつで、小さめだ。
「ハイヤードから１００本ばかり取り寄せていたんだ。ちょうど数日前につぼみの段階で届いて、今ちょうど咲き始めのようで良かった」
「え？リノアって原産国ハイヤードなの？」
「あぁ」
知らなかったわ。
私はリノアの花にそっと触れた。自分と同じ名前の花でしかもハイヤードが原産。
それだけで、より愛しく思う。

「リノア」
「ん～？」
「それな」
「それ？花壇のこと？」
「あぁ」
私はリノアの花に触れるのをやめ、立ち上がりリクをみつめた。

「それな、それ…そ、その……あれだ」
リクは顔を真っ赤にさせ、両手で拳をつくり握りしめながら、ずっと似たような言葉を繰り返している。

ごめん、ちょっとわからない。
リクと以心伝心ってわけじゃないし、長年連れ添った女房とかじゃないし。
だから、あれとかそれとかじゃ意味が理解できないよ。

「――はっきり言えばいいじゃないか。その花壇がキミからリノアちゃんへの誕生日プレゼントなんだって」
「！？」
突然ふわりと風にのって、私とリクの耳に届いてきた声に体がびくっとなった。
その言葉に二人して、その声の方向に同時に振り向く。
すると、私達から2・3メートル後方側にバルト様が立っていた。
穏やかに私達を見つめながら、片手を上げ微笑んでいる。

心臓がまだ早鐘打ってるし！！
バルト様って、一体何者っ！？全然気配感じなかったわ。
私、人生経験的に結構そういうのに敏感なのに。

「なんで来たんだよ……」
未だに胸を押させて心臓の音を沈めている私とは違い、リクは心底嫌そうな顔をしてバルト様を睨みながら私を自分の背に隠し始めた。

「いいじゃないか、別に。おかえり、リノアちゃん。どう？リクイヤード手作りの花壇。結構なかなかでしょ？」
「えっ！？」
バルト様の言葉に、私は驚きを隠せなかった。
だってリクから誕生日をお祝いして貰えるって思ってもいなかった上に、花壇のプレゼントだなんて。
しかも、リクの手作りだよ？

「メル達も手伝ったから俺だけで作ったわけじゃない」
そっか。リクが作ってくれたんだ。
きっと花なんて触った事なくて悪戦苦闘していたんだろうなぁって想像したら、リクの心遣いにますます嬉しくなった。
なんだかんだ文句を言いながらも土いじりしているリクが想像でき

るわ。
思わず笑みが零れるのを抑えきれない。

「ありがとう、リク」
「……。」
私がお礼を言うと、リクは2・3秒固まったかと思うと、くるっと反対側を向いてしまった。

――あ、あれ？私、何かした？

「リク？」
「お前、そういう顔絶対他の奴に見せるなよ！！」
「私の顔、変？」
リクのマントをひっぱり、こっちを振り向かせようとするが、見てくれない。
だから自力で見ようとしたんだけど、そのたびにリクが顔を背けてしまう。

「違う！！か、かわ……――って、言えるか！！」
「は？」
急に怒鳴られ、私は脱力した。
なんなんだ、ほんとに。
そんな私達の光景を見て、バルト様は声を噛み殺しながら笑っている。

「でさ、リノアちゃん。この花どこかで見た事ない？」
「えぇ。リクから頂いたチョーカーで見た事あります」
「そっちじゃなくて……あ～、やっぱり覚えてないかぁ。これね、君が子供の頃に書いた落書きを元にして、バーズが品種改良を施して作った花なんだよ――」

バルト様のお話に、私は呼吸を忘れた。

父様……いえ、バーズ様は植物学の研究者の中では名が知られた研究者だ。

国王の執務の傍ら、国営の研究所の所長もしている。

うちは工業や商業中心じゃなく、田舎国だから農業が中心。

そのため農作物の品種改良などを始めとする研究は必要不可欠なの。

だから、バーズ様はアカデミーにお通いになっていた若いころからずっと研究をなさっていたそう。

その研究の成果が、国益に結びついているものもある。

「ど…う……して…？」

息が苦しい。

酸素を吸っているのに、肺にまで入ってきてないよう。

何か喉に詰まった感覚がして、手足が冷たく冷えてきている。

それと同時に思いだされるのは、あの時の情景。

――駄目だ。思いだすな。

あの幽閉された空間に、バルト様が面会に来てくれたのは週に一回だった。

それがだんだん減っていき、最終的には月に一回。

そのたびに、バルト様はただ『すまぬ』と謝罪の言葉を吐き私を抱きしめ泣いていた。

私は父様達――バーズ様達の迷惑以外なにものでもない存在。

憎まれても当然。

面会のたび、その現実が何度も自分にのしかかっていく。

その反面、どんなに叫んでも助けてくれない彼らへの恨みも降り積もっていった。

「鮮やかな青は作るのが難しいから時間がかかったそうだけど、彼は君との約束を守ったんだよ。君がまだ4、5歳ぐらいの時に『父様、このお花作って欲しいの』って、君が落書きを持ってバーズの元へやって来たことがあったんだって。バーズはその願いをちゃんと覚えていて、君のために作ったんだ。
世界中に君の名で埋め尽くすようにとの願を込めて、今現在ハイヤードから各国に流通させている最中なんだよ。本当は、本名にしたかったんだけどあまり良く思わない人達がいるからね。バーズは今も変わらずちゃんと君の事を愛してくれているんだ。だから、リノアちゃん。そろそろ、バーズの事昔みたいに呼んであげてくれないかい？他人行儀にバーズ様じゃなく、父様って……」
「――っ」
何か言葉を発しようとしても、世界がぐらぐら揺れ、視界が真っ暗になっていく。

頭ではわかっている。バーズ様達は悪くないって。
でも、心がそれを拒絶する。
あの時の歪んだ感情はまだ消えていない――

間幕　願わくば、これから彼女の世界が　前編

シルク＝ハイヤードは、あんな過去があるのに飄々としている。
過去の幽閉の事を語っても、「それがどうしたの？」とでも言うような感じで、あっさりと話をしてしまうぐらいに。

そんなシルクを見て、何度怒鳴りたくなった事か。
だってそうだろ？
あいつは何も悪くないのに、あんな目にあったんだぞ？
普通なら、恨みごとの一つや二つ言いたくなるはずだ。

それなのに、あいつはそういった負の感情を一切見せない。
最初は、もしかしたらこいつ楽天的なのか？とも思った。

だが、それも表面だけ。
ただそういった感情を、心の深くに閉じ込めて、周りに悟られないようにしていただけだったんだ。
いや、もしかしたらそうやって自分を守っていたのかもしれない。

あんな事がなければ、俺はそんなシルクの奥底に閉じ込めていた感情に気づかずにいた。
それはつい先日の出来ごと。

シルクのために作った花壇の前で、親父の口から語られるシルクの父上・バーズ国王の娘への親の愛情が詰まった話。
その話を聞いている最中シルクの様子が急変したんだ。
シルクは顔は青ざめるとを通り越して土色になり、苦悶の表情を見せ、耐えるように唇を噛みしめていた。

手にグローブが装着されてなければ、きっと今頃自分の爪で傷を作っていただろう。
皮の軋む音が何度か耳に届いてきたから。
シルクは両手でこぶしを作り、それぐらい強く握りしめていたんだ。
すぐに様子がおかしい事に気づき、慌てた親父が何度も謝罪をするが、あいつは無理やりの笑みを浮かべるだけ。
俺はあの時、表に出たあいつの深い傷を見た。

あいつ、大丈夫だろうか……

俺は羽根ペンを止め、書類から視線を離した。
これで何度目だろうか。
仕事を中断するぐらい、シルクの事が頭から離れない。

今現在シルクは何事もなかったように、メイドの仕事をしている。
少し休ませようと考えたが、働いている方が気がまぎれるかもしれないと思い、シルクの意思のまま働かせていた。
空元気なのは周りが見てもすぐにわかるから、痛々しい。

正直どうすればいいのかわからない。
シルクにかける言葉が浮かばず、俺は励ますことも出来ないでいた。
無力で役立たずな自分。
それが酷く苛立たせる。

「様子見に行ってみるか」
そう思い椅子から立ち上がろうとした瞬間、ものすごい音と共に執務室と廊下をつなぐ扉が開かれた。

乱暴に開けられたため、扉が跳ね返り、半分だけ閉められた状態となっている。
それを元老院の爺さん達は、その半分だけ開かれた扉を杖で殴るようにして開け、ドガドガと足音を立て、我が物顔で部屋へと入ってきてしまう。
それはいつもの事だが、構わない。
ただ、いつもと違い、他に連れがいたようだ。
それに続くように、「失礼いたします」とメイド長とメイド達が入室してきた。

「おい、若造！！」
「リクイヤード様！！お話があります！！」
執務室の机の前には、腕み仁王立ちになっている爺さん達。
そしてその後ろには、メイド長を筆頭にしたメイド達。

はっきり言って、この二つのグループを相手にする余裕は今の俺にはない。
ただでさえめんどくさいのに、ダブルだぞ？
せめて一組ずつ来てくれ。

「……リノアの事だろ？」
「そうじゃ！！若造、貴様一体何をしたんだ！？誰が見ても様子がおかしいぞ！！」
「俺は何もしてない」
「もしかして、リノアが花壇のメッセージにお気付きになられたのですか？」
シルクのメイド仲間のミミが呟いた『花壇』という言葉に体が反応する。
もしかして、こいつら事情を知って――

だが、ミミの口から出た言葉に俺の想像は外れた。

「おい、花壇のメッセージとはなんじゃ？」

「実はリクイヤード様がリノアと同じ名前のお花をお取り寄せして、花壇に植えたんです。私達もお手伝いさせて頂いたのですが、その時にリノアの花をハート型に植えたんですわ。リノアの花がハート型。つまり、リノアラブって。それできっと気づいたのですわ。リクイヤード様のリノアに対する身分違いの恋を。それを思ってリノアは心を痛めて……」

「お前ら、どさくさにまぎれて何やってんだ！！」

つい突っ込んでしまったのは、しょうがないことだ。

花壇作り手伝っている最中、やけにテンション高いと思ったらそんな事やってたのか、お前らは。

ったく、油断も隙もない。

俺でさえ気付かなかったのに、シルクが気づくわけないだろうが。

「そういうのじゃない。リノアが元気ないのは、家の事情だ」

「家の事情だと？」

元老院の爺さん達の顔色が変わり険しくなった。

事情を知っている人間が、シルクの家の事情と聞けばあまりよくない事だという事が頭をよぎるだろう。

「お前らがリノアを心配する気持ちはわかる」

それは俺にも痛いほど理解できる。

「だが、誰にだって触れられたくない事があるだろ？だからむやみやたら聞かず、様子を見守ってやれ」

「……はい」

メイド達は俯きながらも、頷く。

「あぁ、そうだ。ちょうど良い。爺さんもメイド長もいるから、今

渡しておく」
俺は机の上にあった書類の中から2枚ほど紙を抜き取り、それを元老院の爺さんとメイド長へと差し出した。
2枚とも硬質で丈夫な紙を使用していて、淵は金色のフレームで囲われ、本文の他に俺のサインと捺印が押されている。
爺さん達やメイド長は、書類を受け取るとそれを凝視し、今度は俺の方へと視線を上げた。

「これはどういう事だ？若造」
「全騎士団を動かすには、法的には国王の承認が必要。俺だと一部しか動かせない。
だが親父を通さなくても、爺さん達全員の署名・捺印さえあれば効力を発生させる事が出来る。
その書類にサインをして元老院として承認すれば、全騎士団を動かす事は特例として認められているはずだ。それは可能だろ？」
「たしかに。じゃが、お主正気か？」
「あぁ」
「これは、ちと横暴すぎるぞ？お前さんの承認がなければ、リノアちゃんは国境の警備門を通る事が出来ないとは……」
「ええっ！？ちょっと、リクイヤード様。それはあまりにもやりすぎじゃないですか？もしかして、この間リノアが勝手に旅行に出かけたのまだ尾を引いているのですか？」
「……それはなくはないが、違うな。これは、念のためだ」
シルクの命を狙う奴らも要注意だが、もう一人要注意人物がいる。
それは、ラズリ＝ハイヤード。
顔も名前も知っているが、詳しくは知らない。
パーティーで挨拶程度しか交わさないからな。
ただ、噂で聞くところ、かなりの優秀な上、民にも慕われているそうだ。
そのため。バーズ国王の影が薄くなっていると。

そんなシルクの弟である彼は、かなりのシスコンらしいという事をロイから聞かされていた。
最初はシスコンの定義と意味が曖昧だったが、ロイに渡された厚さ3センチぐらいの手の平サイズの本で、それを把握する事が出来た。
その本の中身は、『姉上』で始まる注意事項がぎっしり。

要約すると、『姉上に手を出すんじゃねぇぞ？もし一瞬でも妙な真似を見せたら全力で潰す』という内容。
正直、引いた。どん引き。

俺にも姉（スレイア）がいるが、こんな本作った事ないし、作りたいとも思わない。
しかも驚いたことに、これをハイヤードの騎士たちは入隊した時に配られるそうだ。
そんなシスコンに、もしシルクがギルアにいるという事が知られたらどうなると思う？
絶対に連れ戻しに、城まで乗り込んでくるはず。
だから、何かしらの対策は念の為にしておかなければならない。

「とにかく、爺さんたちは考えておいてくれ。それから、メイド長。その件は、別に急ぎでなくても構わない。まだ言ってないから」
「はい、畏まりました。申し訳ありませんが、リクイヤード様。確認を一点だけ。つまりそういう事で宜しいんですよね？」
「あぁ。そうとらえてくれて構わない」
「では、ドレスなどの用意はどういたしましょうか？それから、お部屋の準備も」
「あぁ、ドレスは時間がかかるか……その点はお前たちに任せる。パーティー用はまだ必要ない。あいつを表に出すつもりはないんだ。それから部屋の方だが、家具は俺の方で準備をするからしなくてい

い。それ以外は準備してくれ」
「畏まりました」
メイド長は深く一礼するのを見て、これ以上の質問がない事を確認し、俺は席を立った。

「悪いが俺はこれから用事があるので、退出させて貰う」
「リノアなら、四階ですわよ」
メルのその言葉に、爺さん達の横を通っていた足がピタッと止まる。
……なぜわかったんだ？
どうやら俺の疑問は顔に出てたようだ。
メルはふふふと口元を手で押さえながら、目を細めて笑みを浮かべた。
「だって、心配でしょうがないって顔に書いてますもの。感情ダダ漏れですわ――」

間幕　願わくば、これから彼女の世界が　中編

――なんだ？

４階へと続く階段を昇っている最中に、足を止め顔を上げた。
それは雑音めいた女の声のせい。
お互いの距離があるためか、はっきりとした言葉は聞き取れないが、
声音から怒っているのだけは理解出来る。

「シルク……？」
ふと頭によぎったのは、あいつの顔。

もしかして、シルクと一緒に組んでいる誰かが怒らせたのだろうか？
もし仮にそうだとしたら、珍しいことだ。
シルクが同じメイド仲間に怒鳴り散らしているのなんて聞いたことも、見たこともないからな。
まぁ……なんと言っても俺と違って、あいつらはシルクを怒らせるようなことはしないから。

何にしても、ここ数日のシルクの塞ぎ具合をとってみれば、それは良い兆しなのかもしれない。
感情を表に出すという好意は。
そんな事を思いながら、俺は止めていた足を進め、シルクのいる元へと向かった。

＊

＊
＊

「お前ら、何してんだ！？」
扉を開けて見てしまったものに対して、人目もはばからずそう叫んでしまった。
その叫びを受け、先に室内にいた二人の視線が俺の体に絡みつく。
その視線の持ち主は、エメラルドグリーンの瞳を持つ青年と、銀色の髪を持つ少女。
エメラルグリーンの瞳の青年――猫の盗賊ことリザーは、シルクに胸ぐらを掴まれている。

何も今さらそんな光景が扉を開けて飛び込んできたぐらいで、俺は叫んだりしない。
むしろ「また猫の盗賊が面倒な事をしにきたのか」と、きっと頭を抱えるだろう。
現に今回も面倒なことになっているのを目にしているし。

「あ、王子～。すっげぇ、久しぶり。元気？」
片手をあげてリザーが馴れ馴れしく挨拶をしてくるが、俺は勝手に城に侵入していたその猫の盗賊よりも、胸ぐらを掴んでいるシルクに目がいってしまう。

別にシルクが奇妙奇天烈な格好をしているなどではない。
いつも通り、白のブラウスに黒のワンピースを重ね着して、その上に真っ白いエプロンというメイドの格好をしている。
一見、ぱっと見れば普通だ。
ただし、彼女の頭部を見なければ――

「可愛いでしょ？うさ耳。猫耳にしようか迷ったんだけどさ～」

そうリザーがふざけて言うように、シルクの頭にはふわふわのウサギの耳が生えていた。
飾りではなく実際に機能しているのか、声に反応して耳がぴくぴくと動いている。

「魔法か？」
俺は深いため息を吐くと、外部に聞かれないように扉を閉める。
どうせこの男の事だ。
結界の一つや二つ張ってあるかもしれないが、一応念のためにな。

「もちろん、決まっているじゃないか。僕、魔術師だし～。ねぇ、それよりさ、どう？可愛いよね」
「そんなこと聞くまでもないだろ。シルク。お前、もしかしてこんなことで怒っていたのか？似合あうからいいじゃないか。なんなら、お前のメイド服にオプションとしてつけさせてもいいぞ」
「酷い、リクっ！！人ごとだと思っているでしょ！？」
少し正直にしゃべりすぎたらしい。怒りの矛先が、こちらに飛び火してしまったようだ。

シルクは猫の盗賊から手を離すと、今度は俺の方へ詰め寄ってくる。
羞恥心のためか、珍しく頬を染め瞳が潤んでいる姿がまた可愛らしさを倍増させているのを、こいつはわかっているのだろうか。

「ねぇ。姫という身分の者が、人の胸ぐら掴むのってどうなの？マナー悪いよね。僕、こんなことされる覚えが全くないのに。『可愛くしてくれてありがとう』って言われるなら覚えがあるけどさ」
リザーは肩をすくめながら、俺から視線をシルクへと移した。

おい、そんなこと言うと益々……

俺の想像通り、その言葉はシルクの感情を逆なでしてしまう。
シルクが眉を吊り上げながら、再度リザーの胸ぐらを掴み大きく前後に揺らしはじめたのだ。

「あんたにマナーについて語られたくないわ！！呼んでもいないのに、勝手にやってきて！！しかも、頼んでもいないのにこんな姿にしてくてさ。早く元に戻しなさいよ！！」
「え～、めんどい。ねぇ、それよりお茶とお菓子は？折角この僕が時間を割いてわざわざ遊びに来てやったのに～」
語尾を伸ばすリザーの言い方に、俺はなんかイラッと来た。
どうやらそう思ったのは、俺だけじゃなく、シルクもだったらしい。

「リザー。あんた、ふざけてんの？」
そう言ったシルクの声のトーンがかなり低くなってしまっている。
おい、マジギレしているぞ。

「人をからかいに来た人間をもてなすなんて、私はそんなに心が広くないわ」
「ああ、君って心狭そうだもん」
「はぁ！？」
「しょうがないなー。じゃあ、僕が面白いもの見せたらお茶出してくれる？交換条件ならいいでしょ」
そのリザーの台詞にぴたりとシルクの手が止まり、ゆっくりと顔をあげるとその瞳で猫の盗賊を捕える。
おい、シルク。耳がすごく反応しているぞ。

「……その面白いのによる」
「じゃあ、交渉成立」
「何を見せてくれるの？」
「ん？もう見せてるよ」

そう言ってリザーは、シルクから俺へと視線を向けてくる。
　リザーの視線を追ったシルクは、俺の方を見て目を大きく見開くと、やがて大きく瞬きをした。
そしてその後、吹き出して笑い始めてしまう。

何がそんなにおもしろいのだろうかと後方を振り返るが、何も変わらず、ただクリーム色の壁だけが存在しているだけ。だが、あいつらは俺を見て笑っていた。

――……ということはまさか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3626e/

姫君的メイドライフ

2011年12月16日21時36分発行